山口大学大学院東アジア研究科

博士論文

武田泰淳中国小説研究

―中国語・英語・草稿資料を手掛かりに―

令和 5 年 9 月 13 日

孫森

凡例

※中国語資料の引用は繁体字、簡体字を日本語の新字体に改める。

※中国語・英語資料の訳は筆者による拙訳である。

※武田泰淳の作品の引用はすべて『武田泰淳全集増補版』に拠る。

※引用に際し、旧字体は新字体に改め、ただし、未発表の草稿資料は四角で囲い、原文のまま引用する。

※引用文において「支那」と表記するものは、原文のまま用いる。引用文以外は一貫して「中国」という呼称を使う。

※下線は筆者による。

※本論文の十八頁において、中国語「革」「合」の読み方を提示している場合と、中国語「大家」「一条」の意味を明示している場合、引用文のままルビを振る。それ以外の引用文のルビは原則省略する。

目　次

序章 3

一、武田泰淳中国小説の先行研究と問題点 3

二、本研究の対象・目的・方法 6

三、本論文の構成と意義 11

第一章　武田泰淳「揚州の老虎」の典拠と方法―「動かすもの」としての商人たち― 14

一、問題提起 14

二、「揚州の老虎」とその典拠 16

三、「揚州の老虎」と典拠との比較 18

四、典拠の利用法と小説の独創性 32

五、おわりに 35

第二章　武田泰淳「水の楽しみ」の典拠と方法 37

一、問題提起 37

二、「水の楽しみ」とその典拠 38

三、「水の楽しみ」と典拠との比較 40

四、典拠の利用法と小説の独創性 54

五、おわりに 56

第三章　武田泰淳「流沙」の典拠と方法 59

一、問題提起 59

二、典拠の追考と武田の英語力 62

三、「流沙」と典拠との比較 67

四、典拠の利用法と小説の独創性 77

五、おわりに 79

第四章　武田泰淳「王者と異族の美姫たち」論―草稿類資料を手がかりに― 82

一、問題提起 82

二、「王者と異族の美姫たち」関連草稿 85

三、草稿「天命」と初出本文との対照表 87

四、「王者と異族の美姫たち」の生成過程 101

五、おわりに 109

終章 111

参考文献 116

謝辞 119

序章

一、武田泰淳中国小説の先行研究と問題点

武田泰淳は東京帝国大学支那文学科を中退し、1934 年竹内好らと「中国文学研究会」を創設し、機関誌『中国文学月報』に論文や翻訳を発表した。1937 年輜重兵として中国に派遣された。除隊後、1943 年評伝『司馬遷』を刊行し、1944 年上海に渡り中日文化協会に就職したが現地で敗戦を迎えた。1946 年帰国後、敗戦体験をもとに「審判」「蝮のすえ」などを発表し、戦後作家として出発した。1961 年、1964 年、1967 年、三回にわたって中国を訪問した。以上の武田の経歴を思えば、武田文学が中国・中国文学と深いかかわりを持っていることは明瞭である。竹盛天雄は『近代文学研究必携増補版』の「武田泰淳」(1963) において、「これまでの武田論には、解釈論が多すぎた。やや類型化してきている。そこから抜けるためには、(一) 仏教、(二) 共産主義、(三) 中国・中国文学、(四) 戦争などとの関係について、本格的に取りくむ必要があろう。」[1]と武田研究の問題を指摘している。本研究はその「(三) 中国・中国文学」と武田泰淳の中国小説との関係を考察するものである。

「武田泰淳中国小説集」が冠された作品集は現在まで二つ出版されている。一つ目は新潮社より刊行の『武田泰淳中国小説集』(全五巻、1974) である。本小説集に収録されている武田の作品は第 1 巻 (「廬州風景」「E 女士の柳」「会へ行く路」「学生生活」「才女」「審判」「秋の銅像」「非革命者」「謝冰瑩事件」「苦笑の前後」「玉璜伝」「閃鑠」「才子佳人」「人間以外の女」「女賊の哲学」の十五篇)、第 2 巻 (「蝮のすえ」「『愛』のかたち」「月光都市」「夢の裏切」「聖女俠女」「詩をめぐる風景」「女帝遺書」の七篇)、第 3 巻 (「悪らしきもの」「L 恐怖症」「細菌のいる風景」「獣の徽章」「F 花園十九号」「淑女綺談」「女の国籍」「勝負」「美しき湖のほとり」「烈女」「橋を築く」の十一篇)、第 4 巻 (「興安嶺の支

[1] 竹盛天雄「武田泰淳」、近代文学懇談会編『近代文学研究必携増補版』、学燈社、1963、411 頁

配者」「汝の母を!」「流沙」「水の楽しみ」「うつし絵」「秋風秋雨人を愁殺す」「揚州の老虎」の七篇)、第 5 巻（「十三妹」「王者と異族の美姫たち」の二篇）である。本小説集には、1939 年に執筆（雑誌には未発表）の「廬州風景」から、1968 年に発表の「揚州の老虎」に至るまでの四十二篇の中国小説を収めた。二つ目は中央公論新社より刊行の『淫女と豪傑　武田泰淳中国小説集』(2013）である。本作品集は中国小説「女賊の哲学」「人間以外の女」「廬州風景」「うつし絵」「獣の徽章」「女帝遺書」「興安嶺の支配者」「烈女」の八篇と評論「淫女と豪傑」一篇を含む武田の九作、高崎俊夫の「解説」を収録している。この八篇の中国小説は先述の『武田泰淳中国小説集』（全五巻、1974）にも収められている。

本論文では基本的に、『武田泰淳中国小説集』（全五巻、1974）に収録された作品と、当該選集の刊行後に発表された中国体験を描いた自伝的小説『上海の螢』(1976)、未発表作品として掲載された明末の旅行家・文人・地理学者である徐霞客を主人公にした「霞客」（1979）を中国小説として扱う。

中国小説の分類に関して、桶谷秀昭は評論「武田泰淳『武田泰淳中国小説集』」において、以下のように『武田泰淳中国小説集』に収録された四十二篇の中国小説を三つのカテゴリーに分けている。

> まず武田泰淳の中国体験を素材にした作品集であり、次に「秋風秋雨人を愁殺す」のような中国近代史上の革命家の姿を史実に即しながら描いたもの、あるいは「十三妹」のような中国古典に素材を取り氏の奔放な想像を駆使した物語を含む、そういう意味での「中国小説集」なのだと考えられる。[2]

桶谷秀昭の分類方法を用いて詳しく分類を行っていくと、武田の中国小説は下記のように分類される。「武田泰淳の中国体験を素材にした作品」の中に「廬州風景」「才女」「審

[2] 桶谷秀昭「武田泰淳『武田泰淳中国小説集』」(1974)、『危機と転生』、泰流社、1976、296 頁

判」「秋の銅像」「非革命者」「苦笑の前後」「蝮のすえ」「月光都市」「夢の裏切」「聖女俠女」「悪らしきもの」「細菌のいる風景」「F 花園十九号」「淑女綺談」などがあり、「中国近代史上の革命家の姿を史実に即しながら描いたもの」の中に「秋風秋雨人を愁殺す」「揚州の老虎」があり、「中国古典に素材を取」った作品の中に「閃鑠」「才子佳人」「女賊の哲学」「女帝遺書」「橋を築く」「水の楽しみ」「十三妹」「王者と異族の美姫たち」などがある。

以下は桶谷秀昭の中国小説に関する分類を参考にし、これまで武田の中国小説に触れた主な先行研究を整理していきたい。「中国体験を素材にした」中国小説に触れた単行本研究書について、松原新一『武田泰淳論』（審美社、1970）を皮切りに、大橋毅彦・趙夢雲・竹松良明・山﨑眞紀子・松本陽子・木田隆文『上海 1944-1945　武田泰淳『上海の螢』注釈』（双文社出版、2008）、和田博文・黄翠娥編『〈異郷〉としての大連・上海・台北』（勉誠出版、2015）など数多くの良書が陸続と出版されている。例を挙げて説明すれば、『上海 1944-1945　武田泰淳『上海の螢』注釈』において、「注釈」という方法を選択し、武田の「中国体験」が素材となっている自伝的小説『上海の螢』を丹念に読み解いた。武田の中国体験の実相をつぶさに検証したのみならず、作品に登場する数多くの作家たちの年譜の空白を補い、戦時下上海の文化状況を呈した著作であると評価されている。

また、「中国体験を素材にした」中国小説に触れた博士論文も謝崇寧『武田泰淳の文学発想：中国体験の意味を中心に』（神戸大学、1995）を皮切りに、白蓉『武田泰淳と中国体験』（立命館大学博士論文、2001）などが発表されている。例えば、白蓉は『武田泰淳と中国体験』（立命館大学博士論文、2001）の第三章の第二節「『上海の螢』論―上海に群がる螢たち」において、小説『上海の螢』を用いて武田の大東亜思想批判と自己批判を分析し、第四章の第一節「『審判』論」において、「歴史的な持続と個人的な悩み」「二郎の殺人行為」「罪への自覚」という三つの論点に分けて小説「審判」を論じた。かくして多様な視点から「中国体験を素材にした」中国小説を検討してきた。

「中国近代史上の革命家の姿を史実に即しながら描いたもの」に関する先行論は主に「秋風秋雨人を愁殺す」に絞って論じられてきた。代表的な論考として郭偉の「武田泰淳

的リアリズムの生成―小説「秋風秋雨人を愁殺す 秋瑾女士伝」の方法―」(『日本近代文学』(77)、2007) が挙げられる。郭偉はこの論文において、小説「秋風秋雨人を愁殺す」で利用された資料を整理することによって作品の成立過程を辿り、未発表原稿などをも視野に入れて「秋風秋雨人を愁殺す」における夏衍の戯曲「秋瑾伝」の重要性を検討した上で、「秋風秋雨人を愁殺す」の方法を見極めた。

「中国古典に素材を取」った作品に関する先行研究は主に「十三妹」「才子佳人」に絞って検討されてきた。藤原崇雅の「十三妹にされた何玉鳳　武田泰淳『中国忍者伝 十三妹』における転倒した白話」(同志社国文学 (89)、2018) は秀逸な論考として見落とせない。藤原崇雅はこの論文において、典拠受容の大体を考察した上で、中国の長篇小説『紅岩』の主題と武田の長篇小説「十三妹」を比べて、武田の中国現代文学に対する姿勢を導き出した。

以上の先行研究の整理を踏まえて、桶谷秀昭の中国小説に関する分類を参考にすれば、これまでの武田泰淳中国小説に関する先行研究の問題点は、「中国体験を素材にした」中国小説をめぐる関心が集まり、関連する論考が盛んに展開されている一方、ほかの二種類の中国小説に関する研究は少しずつ行われているが、論じられていない作品が多く残されているという点と言えよう。

二、本研究の対象・目的・方法

したがって、本論文は、主に中国体験に基づいた中国小説を論述してきたという従来の研究状況を改善するため、中国小説の中の「中国体験を素材にした」小説以外の作品を積極的に研究の対象とする。本論文で考察したい対象は「中国体験を素材にした作品」以外の「揚州の老虎」、「水の楽しみ」、「流沙」、「王者と異族の美姫たち」という四篇の中国小説である。この四篇の中国小説を取り上げる理由は次の 2 点にある。

1、ひとつはこの四篇の中国小説はいずれも武田にとって比較的重要な作品である点に

ある。これから詳しく説明していく。武田泰淳は中国の辛亥革命の最終日と言われている1912年2月12日（当日宣統帝（溥儀）が退位）に生まれた。武田と辛亥革命が運命づけられているようである。小説「非革命者」（1948）において、登場人物である村井の口を借りて「中国の問題は、やはり革命の問題なんですからね。」[3]と「中国の問題」を解決する上での「革命の問題」の重要性を強調しているように、武田は敗戦後日本に帰国し、中国革命に関する思索を重ねてきた。中国語歴史資料を踏まえて描かれた「揚州の老虎」も辛亥革命題材小説のなかで重要な位置を占めていると思われる。

中国において明末の文学、およびその研究が流行していたころ、中国文学研究会が設立された（1934年）。中国文学研究会員の一人である武田泰淳は鋭い洞察力で他のメンバーに先立ち、中国における文学研究の新しい動きに気付いた。おそらくそれは武田が「明朝滅亡」に関心を持つきっかけになったのであろうか。その後武田は続々と「明朝滅亡」・「明末文学者達」に関連する作品を発表していた。1953年に「『明朝滅亡』のうちの一章」である小説「水の楽しみ」を書いた。

恐らく父、伯父からの影響を受けたのであろう、武田は長期間にわたって敦煌に興味を持っていた。大学時代において、武田は敦煌の資料と『大正新修大蔵経』などとを読み合せることにより論文を書こうとしていた。「中国文学研究会」を設立した後も、武田は機関誌に投稿した論文の中で敦煌研究に言及した。1937 年から華中戦線に送られた武田は依然として敦煌発掘の資料などを読みふけっていた。1952年に武田文学における唯一の、敦煌の資料をもとにし、スタインの探検調査を取り扱った小説である「流沙」を発表した。

中国文学研究会が発足した後、武田泰淳たちは中国古典について、自分の考えを述べようとしていた。戦場に派遣されてから、武田は中国の古典『史記』について考え始め、相次いで『史記』に関する評論『司馬遷』、小説「女帝遺書」、小説「王者と異族の美姫たち」を発表した。

以上の整理によれば、この四篇の中国小説（「揚州の老虎」、「水の楽しみ」、「流沙」、「王

[3] 武田泰淳「非革命者」（1948）、『武田泰淳全集増補版』第2巻、筑摩書房、1978年、123頁

者と異族の美姫たち」）はいずれも武田にとって比較的重要な作品であると言えるのであろう。

2、もうひとつはこの四篇の中国小説は関連する先行論が少なく、ほとんど検討されていない未開拓の中国小説である点にある。詳しく述べると、「中国近代史上の革命家の姿を史実に即しながら描いた」中国小説の研究はほとんど「中国革命の源流に生きた人物」[4]と見られる女革命家秋瑾を主人公にした「秋風秋雨人を愁殺す」に絞って行われ、ほぼ作品集の書評・解説しか「揚州の老虎」に説き及んでいない。「水の楽しみ」に関する研究は管見によれば皆無である。「流沙」に関する研究は主に『群像』創作合評、作品集の「解説」の中で論及されている。「王者と異族の美姫たち」に関する研究も主に作品集の書評・解説しか言及していない。

以上の点に基づいて、本論文は「中国体験を素材にした」小説以外のこの四篇の中国小説を研究の対象にし、以下の二つの研究の目的を達成したい。一つ目は「揚州の老虎」、「水の楽しみ」、「流沙」という三篇の中国小説の典拠を指摘し、小説と典拠との比較を行ったうえで、典拠の利用法を明らかにし、さらに変更・付加の内容を通して武田の独創性を検討したい。二つ目は日本近代文学館に所蔵されている「武田泰淳コレクション」における小説「王者と異族の美姫たち」の未発表草稿類資料「原稿　天命」（資料番号　T0056535）などを考察対象として取り上げ、草稿と初出本文との異同を検討しテクストの生成過程を分析した上で、改稿の時代背景から武田の「気持」を理解し、具体的に武田が「悠久なものがなぜほしかったか」、即ち本小説における「悠久のもの」の「現代」的意義を検討したい。

これから研究方法について述べておきたい。本論文では比較の研究方法を用い、典拠・草稿との比較を行う。詳細は以下の通りである。

1、典拠研究について

竹内栄美子は「研究動向　武田泰淳」（2002）では、武田文学の典拠研究に関して、以

[4] 武田泰淳「人民間の文化交流」（1969）、『武田泰淳全集増補版』第 16 巻、筑摩書房、1979 年、318 頁

下のように述べている。

『才子佳人』については、典拠『西青散記』との照合を丹念に行った布村弘「武田泰淳の『才子佳人』一～四」（『高岡法科大学紀要』一～四号、一九九一年三月～九四年三月）が重要である。典拠や先行文献で言えば、木田隆文による「武田泰淳『士魂商才』の典拠と方法」（『国文学論叢』四十三号、一九九八年二月）「武田泰淳『貴族の段階』の生成と構造」（同誌四十四号、一九九九年二月）などがある。典拠論は手つかずのものが多く、特に『十三妹』[5]や『秋風秋雨人を愁殺す』など中国に材をとった多くの作品については今後検討されるべき課題であろう。[6]

竹内栄美子の指摘した中国小説『十三妹』、『秋風秋雨人を愁殺す』の典拠論について、郭偉「武田泰淳的リアリズムの生成―小説「秋風秋雨人を愁殺す 秋瑾女士伝」の方法―」（2007）、藤原崇雅「十三妹にされた何玉鳳　武田泰淳『中国忍者伝 十三妹』における転倒した白話」（2018）はこの問題の解決にあたった。ただし、竹内栄美子が代表的なものとして列挙した『十三妹』、『秋風秋雨人を愁殺す』以外の中国小説、例えば「揚州の老虎」「水の楽しみ」「流沙」など中国語・英語の文献に素材をとった作品はまだほとんど検討されていない課題であると思われる。本論文において中国語・英語資料を使用し、中国小説の典拠に関する研究を行うことで、研究史を更新したい。

典拠研究の意義について、長谷川泉は『近代名作鑑賞：三契機説鑑賞法 70 則の実例』（第 5 版、1977）において、「出典」に関連する「創造部分との分離」について以下のように述べている。

森鴎外の「渋江抽斎」における妻五百が、金を奪おうとする刺客に襲われた夫抽斎

[5] 竹内の論文には『十三姉』と書かれているが、明らかな誤字であるため、本論文では『十三妹』と訂正した

[6] 竹内栄美子「研究動向 武田泰淳」、昭和文学研究 45、2002 年 9 月、136 頁

の危機を救うべく、風呂場から全裸体のまま飛び出し身を挺して盗賊を走らせたことには、息子渋江保の手記があるのであるが、それと鴎外の「渋江抽斎」における腰巻一つをまとった五百像とを比較することによって、鴎外の創作部分、しかもすぐれて感動的な創作部分を分離・確定することができる。[7]

長谷川泉は典拠との比較を通して作家の「創作部分を分離・確定することができる」と指摘した。筆者は長谷川泉の指摘を踏まえて、まず中国小説「揚州の老虎」「水の楽しみ」「流沙」の典拠を突き止め、次に出典との比較を行うことで、小説が典拠から何を取捨選択しているのか、典拠とする表現の数々はどのような意図で用いられているのか、典拠の利用方法を検討したい。さらに、典拠をどのように書き換えているのか、何を付加しているのかを分析することで、各中国小説における「創作部分を分離・確定」し、武田の独創性を析出したい。

2、草稿研究について

2005 年、武田の長女武田花氏が作品の原稿・草稿、スケッチブック、色紙、写真などを含む 2161 点の資料からなる「武田泰淳コレクション」を日本近代文学館に寄贈した。その後、石崎等「『廬州風景』の成立」(『日本近代文学館年誌：資料探索（2)』、2006）を皮切りに、武田文学の研究に大きな影響を与えた「武田泰淳コレクション」についての読解を始めた。石崎等のこの論文のほかに、中国小説の草稿に関する研究について、郭偉「武田泰淳における杜甫：武田泰淳「詩をめぐる風景」の成立を中心に」(『国学院中国学会報』58、2013）が挙げられる。ただし、井上隆史が「作家別事例　武田泰淳」(2015）において「今後の（武田泰淳コレクションに関する、引用者注）調査研究によって、泰淳文学の知られざる具体相が明らかになることが期待される」[8]と述べているように、戦争時代発表されていない草稿類資料を手がかりにして、テクストの生成過程を一歩一歩丹念に究明

[7] 長谷川泉『近代名作鑑賞：三契機説鑑賞法 70 則の実例』(第 5 版)、至文堂、1977、1118 頁
[8] 井上隆史「作家別事例　武田泰淳」『近代文学草稿・原稿研究事典』、八木書店古書出版部、2015、249 頁

し、武田の中国小説を解読する余地がある。

草稿研究の意義について、松坂俊夫は「草稿の検討」（1968）において、以下のように述べている。

> もとより作品論は、完成された作品を対象になさるべきはいうまでもないが、その作品の成立過程を追い、構想の変容をたどり、草稿と決定稿を比較検討することは、自らその作品がいかなるものであるかを浮びあがらせ、究極においてはその作品の価値に迫る――作品論となるにちがいない。[9]

筆者は松坂俊夫の指摘を参考にし、中国小説「王者と異族の美姫たち」と日本近代文学館に所蔵されている草稿「天命」との異同を検討し、「作品の成立過程を追い、構想の変容をたどり」、成立過程を踏まえて改稿の時代背景から具体的に武田が「悠久なものがなぜほしかったか」、即ち本小説における「悠久のもの」の「現代」的意義を検討したい。

三、本論文の構成と意義

本論文の各章は中国語資料（第一・二章）・英語資料（第三章）・草稿資料（第四章）の順に並べる。そのうち、中国語資料に関する第一章、第二章は現代中国語、古代中国語の順に並べる。これから章相互の関係性について説明する。前述のように武田の「中国体験を素材にした」中国小説の研究は盛んであるのに対して、他の二つの種類の中国小説に関する研究は比較的少ない。ゆえに、第一章は「中国近代史上の革命家の姿を史実に即しながら描いたもの」である小説「揚州の老虎」、第二章、第四章はそれぞれ「中国古典に素材を取」った小説「水の楽しみ」、「王者と異族の美姫たち」を取り上げる。第三章で取り上げる小説「流沙」は主に中国の敦煌に関する英語資料をもとに作られた作品であるゆえ

[9] 松坂俊夫「草稿の検討」、『国文学　解釈と教材の研究』（特集　作品論への招待）、1968．07、40 頁

に、厳密にいえば、桶谷秀昭の述べたいずれの項目にも分類しえないものである。ただし、英語の文献を典拠とする中国小説に関する分析が欠けているので、本論文の検討対象に扱う。第一・二・三章は典拠研究を行う。ただし、典拠研究のみでは充分ではないため、草稿研究をする必要がある。第四章は草稿研究を行う。

それでは、本論文の構成を簡単に述べる。第一章では、『辛亥革命江蘇地区史料』が小説「揚州の老虎」の典拠であることを突き止め、具体的なテキスト間の相互関係を明らかにし、そのうえ、小説全体にわたる典拠の利用方法をまとめ、併せて、付加された表現によって、武田の独創性を明確化した。第二章では『珂雪齋集』が小説「水の楽しみ」の典拠であることを指摘し、小説とその典拠とを比較した上で、小説全体にわたる典拠の利用方法、武田の独創性をまとめた。第三章では武田と敦煌との関係を切口として、日本近代文学館に所蔵されている「武田泰淳コレクション」の中の未発表資料を参考にして、武田文学における唯一の敦煌題材小説「流沙」の典拠資料を整理し武田の英語力を確認した上で、典拠と小説との比較を行い、「節ごと」、「全体」という二つの方面から武田泰淳の言う「換骨奪胎」の方法（典拠の利用法）を分析し、さらに武田の独創性を検討する。第四章では日本近代文学館に所蔵されている「武田泰淳コレクション」における未発表の草稿類資料「原稿　天命」（資料番号　T0056535）などを考察対象として取り上げ、三つの方面から具体例を挙げて草稿と初出本文との異同を検討し、テクストの生成過程を分析した。それを踏まえ、改稿の時代背景から、本小説において、具体的に武田が「悠久なものがなぜほしかったか」、即ち本小説における「悠久のもの」の「現代」的意義を検討したい。

では、上記の目的・方法に基づいた研究の意義は何であろう。こちらは武田泰淳中国小説研究上の意義、日中文化・文学交流上の意義を、二つの方面に分けて述べたい。前者について、繰り返し述べている通り、武田泰淳中国小説の綿密な考証作業により、従来主に「中国体験を素材にした」中国小説を論述してきたという研究状況を改善し、先行論の欠落を補うことができると思われる。後者について、中国の歴史資料、敦煌関連資料、中国古典に材を借りながら創造力を駆使して完成させた中国小説を分析することで、日中文化・文学交流の一側面を明らかにでき、ささやかながら日中の文学・文化交流研究分野に

貢献できると思われる。

第一章　武田泰淳「揚州の老虎」の典拠と方法―「動かすもの」としての商人たち―

一、問題提起

『新文学全集　武田泰淳集』（1952）のあとがきで「上海から帰来（1946、引用者注）後、中国革命は常に私の念頭を離れなかった（後略）」[1]と述べているように、武田泰淳は長年にわたり中国革命について思索を重ねてきた。そのうえ、歴史資料に基づいて、「辛亥革命」を背景にした小説「秋風秋雨人を愁殺す―秋瑾女士伝―」（1967）と「揚州の老虎」（1968）を作り、実在の人物を登場させ、人間と辛亥革命の関わりを叙述した。この二つの作品の創作意図について、武田は以下のように述べている。

> 日本人の中国革命の見方はまだ少し不足してますね。たとえば孫文の革命とか毛沢東の革命とか、そういうのがスラスラと行ってるように言われるけれど、実際は非常にジグザグしたもので、滑稽なこともあるし悲壮なこともあるし、人間的なものですよね。中国だからと言ってかしこまっているところがありますね。だからそれに反対する意味で、「秋風秋雨人を愁殺す」と共に「揚州の老虎」を書いたんで、（後略）[2]

以上の引用部分から、中国革命に対する見方がまだ不充分な日本人に中国革命を紹介するということが、「秋風秋雨人を愁殺す」と「揚州の老虎」を執筆した動機の一つであると見られる。作家にとっては、中国革命の問題意識の延長上に書かれている「揚州の老虎」も辛亥革命題材小説のなかで重要な位置を占めていることがうかがえる。だが、従来、両

[1] 武田泰淳「『新文学全集』あとがき」（1952）、『武田泰淳全集増補版』第 12 巻、筑摩書房、1979 年、254 頁
[2] 武田泰淳・竹内実「戦争と中国と文学と」（対談、1974）、『武田泰淳全集増補版』別巻 2、筑摩書房、1979 年、228 頁

者についての研究は、専ら「秋風秋雨人を愁殺す」に絞って行われ、それに比べて「揚州の老虎」の研究は遅々として進んでいない。管見の限り、「揚州の老虎」に論及している先行研究は主に以下の通りである。杉浦明平は、書評「独特のわらいとレアリテ―武田泰淳『わが子キリスト』―」（1969）において、「そのように状況、人物ともにじつにおもしろく、武田にもってこいの材料のようにおもえる」[3]と小説の素材に惹かれながら、「武田は思うぞんぶんかれの腕力をふるって、この奇妙な政治的状況やいかにも清末らしい茫としながら狡い連中やおっちょこちょいたちをおどらせ、取引・駆引させるというまでにいたらず、案外あっさり記述をおわってしまう」[4]と嘆いている。また井口時男は、講談社文芸文庫『わが子キリスト』の解説「武田泰淳の『世界』」（2005）において、「この混乱のなかで、理念に奔走する者も権力（政治）に奔走する者も潰え、ただ商人たちが生き延びる。彼らは理念でも権力でもなく、利害というものの現実性だけを信じている。いいかえれば、彼らは世界の根本的変革ではなく、世界の持続を信じている」[5]と指摘している。

先行研究は主に「揚州の老虎」の素材の面白さと記述の単調さを提示し、また作品中の商人たちの持っている「世界の持続」の観念に説き及んだが、小説の独創性を知るうえで重要である小説と典拠との比較は、管見によればまだ行われていない。以上の点を踏まえ、本論は、「揚州の老虎」の典拠を指摘し、「揚州の老虎」と典拠とを対照して両者の関連性を分析したうえで、典拠の利用法を明らかにする。また、浮き彫りになる創作された部分によって、先行論で「案外あっさり記述をおわってしまう」と評価された「揚州の老虎」における武田の独創性を論じたい。

---

[3] 杉浦明平「独特のわらいとレアリテ―武田泰淳『わが子キリスト』―」（書評）、『群像』24 巻 3 号、1969 年、185 頁

[4] 同上

[5] 井口時男「武田泰淳の『世界』」（解説）、『わが子キリスト』所収、講談社、2005 年、210 頁

二、「揚州の老虎」とその典拠

まず、雑誌『文芸』の 1968 年 8 月号に発表された小説「揚州の老虎」[6]の粗筋を述べておく。招撫され「新水師営の督帯」になった盗賊あがりの主人公徐宝山（徐老虎）は、江蘇省の各地の商人たちに助けを求められ、揚州を光復[7]した自称革命家の孫天生を逮捕・殺害し、泰州で叛乱を起こした劉鳳朝の賊軍を改編し、匪賊だらけの興化県を光復した。徐宝山はかくして、江蘇省の各地で自分の勢力範囲を広げていった。しかしその後、日和見主義の徐宝山は帝政を復活させた袁世凱に帰順し、「わしは百万の男児の号令者でありますぞ」といった袁を脅かす暴言を吐いたので袁に暗殺された。このような辛亥革命勃発後の地方のエピソードを描いた。

「揚州の老虎」の執筆に取り組む際に、武田はどのような資料にあたっていたのかというと、「揚州の老虎」における「1957 年以後、揚州師範学院歴史系の研究者が、辛亥革命江蘇地区資料を編集するため、（後略）」[8]という叙述が大きな示唆を与える。筆者の調査により、辛亥革命 50 周年を記念して、1961 年に江蘇人民出版社より出版された 41 万字超えの『辛亥革命江蘇地区史料』の前書きにおいて、「我系為了豊富教学内容，搜集和整理史料，従 1957 年起，組織了由中国近代現代史教研組教師和部分学生参加的調査隊，進行郷土歴史資料的調査工作（拙訳：我が学科（揚州師範学院歴史系、訳者注）は、授業の内容を豊富にし、史料を収集・整理するために、1957 年から、中国近代現代史教研グループの教師と一部の学生が参加した調査隊を組織し、郷土の歴史資料の調査の仕事を行った）」[9]という記述がある。この記述と小説での叙述とは、調査を開始した年、史料を編集した者など一致しているので、『辛亥革命江蘇地区史料』と「揚州の老虎」との関連性が

---

[6] 「揚州の老虎」は、1968 年 12 月に講談社より発行された創作集『わが子キリスト』、1971 年 11 月刊行の講談社文庫『わが子キリスト』、1972 年 6 月筑摩書房刊の『武田泰淳全集』第 9 巻、1974 年 1 月講談社刊の『現代の文学２　武田泰淳』、1974 年 4 月新潮社刊の『武田泰淳中国小説集』第 4 巻、1978 年 10 月筑摩書房刊の『武田泰淳全集増補版』第 9 巻、2005 年 7 月講談社文芸文庫『わが子キリスト』に収められている。

[7] 「光復」というのは、割譲・譲渡された地域や主権を再び取り戻すことである。

[8] 武田泰淳「揚州の老虎」、『武田泰淳全集増補版』第 9 巻、筑摩書房、1978 年、335 頁

[9] 揚州師範学院歴史系編『辛亥革命江蘇地区史料』、江蘇人民出版社、1961 年、1 頁

確認できる。「該書的出版是当時全国以省区編輯出版的辛亥革命史料の濫觴。（拙訳：本書の出版は、当時中国全土において省級行政区に絞って編集・出版された辛亥革命に関する史料の濫觴である。）」[10]と評価された。『辛亥革命江蘇地区史料』は初刊行後、相次いで国内外の出版社により再刊された。1963 年に『辛亥革命江蘇地区史料(影印)』は東京の株式会社大安より発行された。1980 年に『辛亥革命江蘇地区史料』は中国近代史資料叢編の十二として香港の大東図書公司より刊行された。また辛亥革命 100 周年を迎えるにあたり、2011 年に『辛亥革命江蘇地区史料』と『辛亥江蘇光復』（1991）と合併して『辛亥革命江蘇地区史料合集』と改題のうえ江蘇人民出版社より発行された。

『辛亥革命江蘇地区史料』は、江蘇省範囲内での総合的な記載である「綜合部分」と、「太倉州」「鎮江府」「揚州府」といった「州・府」を単位とした各地方の記載である「分区部分」に分けられている。内容に関しては、辛亥革命の実体験者の日記や回想録、当時の新聞雑誌の関連記事、辛亥革命後研究者が執筆した「附録：千人会起義調査記」「附録：孫天生起義調査記」という二篇の調査報告書などを含んでいる。小説のタイトルの通り、「揚州の老虎」が主に辛亥革命直後の揚州の物語を扱うので、『辛亥革命江蘇地区史料』において小説との関連性が最も高いのは「分区部分」の「揚州府」（293～329 頁）である。「揚州府」は、①「揚州光復事略」、②「孫天生起事見聞録」、③「記揚州軍政分府成立」、④「徐宝山来揚的経過」、⑤「附録：孫天生起義調査記」、⑥「東台光復始末」、⑦「泰州光復記実」、⑧「回憶劉鳳潮兵変」、⑨「揚子県光復之一瞥」、⑩「興化県光復記略」という十篇の文章によって構成されている。①～③はそれぞれ、揚州の光復を自ら体験した、塩運使衙門の書吏、紳商である方爾咸（字は沢山）の家庭教師、揚州商会会長である周谷人の実弟が書いた回想録、④は揚州の紳商を代表し徐宝山をそそのかして孫天生を攻撃させたある実体験者に研究者がインタビューした時の記録、⑤は研究者が揚州の光復を実体験した五十余名の存命の老人たちを取材し、その老人たちの提供した資料に基づいて執筆した調査報告書である。①～④には徐宝山、孫天生に関する記述が重なっているとこ

[10] 張海鵬「『辛亥革命江蘇地区史料合集』序」、『揚州大学学報』15 巻 5 期、2011 年、81 頁

ろが多い。また、①～④と⑤で、孫天生の人物像は全く異なる（孫天生の人物像に関する詳細な論述は第三節で行う）。以降、本論中の丸数字は以上の記号に対応する。

三、「揚州の老虎」と典拠との比較

以上のような認識のもと、本節は「揚州の老虎」と『辛亥革命江蘇地区史料』（以下『史料』と略記）との比較を行い、両者がどのような照応関係を持っているのかを分析し、併せて、同時代鼎談における武田の発言などを参考にして典拠の取捨選択の理由について考察したい。また、小説における変更・付加された内容を通して武田の独創性を論じる。

以下、「揚州の老虎」のストーリーを追いながら、便宜的にシーンを分かち、通し番号、見出し、それぞれの頁数を記し『史料』との比較を試みる。ただし紙幅の制限により、「揚州の老虎」と『史料』との関係が特徴的である部分を中心に考察し、両者の間に変更のない箇所について言及を省いたものもある。小説の発表の前に、既に江蘇人民出版社より発行された『辛亥革命江蘇地区史料』（1961）と東京の株式会社大安より発行された『辛亥革命江蘇地区史料(影印)』（1963）が存在し、武田がどちらを参考にしたのかは判断し難いが、両書の内容は完全に一致しているので、『史料』は初版（1961）を使用する。また、「揚州の老虎」本文は『武田泰淳全集増補版』第 9 巻（1979）に拠る。

（一）「揚州の塩商の頭株の人々」が徐宝山に「眼をつけた」（330～334 頁）

小説の冒頭において、語り手はいきなり「揚州の塩商の頭株の人々が、『こうなったら徐宝山のほかに、たよりにできる男はいないな』と衆議一決したのは、まちがっていたのだろうか。」という質問を読者に投げかけている。続いて語り手は、「いや、そうではなかった。」と自問自答し、さらに「にくむべき大敵であった」塩梟（「塩の密売買のやから」）になっていた徐宝山に着目した「官許の塩商人」を以下のように評価している。

彼らが、革命さわぎの地方都市で、とりあえず秩序を保ってくれる実力者として、徐老虎とよばれて恐れられていた、卑しき身分からのしあがった男に眼をつけたのは、

ある意味では、徐その人より、先き行きの事態の変化について、眼がきいていたのである。（「揚州の老虎」330 頁）

この引用から、商人たちが先見性のある人物であることがうかがえる。また、この評価での「徐その人より」という比較は、最後に徐宝山が社会情勢を見抜くことができず袁世凱に帰順したが殺されたことを暗示する伏線になっている。では、典拠の①②③④⑤において、徐宝山が揚州に来た経緯についてどのように記述されているのかを説明する。

方爾咸等睹此情形，深恐日久生変，遂推里人阮薪伝（阮五）、戴友士等代表過江迎徐。（拙訳：方爾咸らは、この様子（孫天生たちが蜂起した様子、訳者注）を見て日がたてば異変が生じることを深く恐れた。そこで、阮薪伝（阮五）、戴友士など同郷の者を代表に推薦し、彼らに長江を渡らせ、徐宝山を迎えに行かせた）（①の 296 頁）

方、周两位在十七日之前，已派人到鎮江請徐宝山了。（中略）与方氏兄弟素有交情。（中略）並且徐宝山在庚子那一年，已経由地方大紳薦挙，出来担任緝私的職務了。（中略）方、周两位請徐宝山来，不是没来由的。（拙訳：方、周の二人は十七日より前に、すでに徐宝山を招くために人を鎮江に派遣していた。（中略）（徐宝山は、訳者注）方氏兄弟と日ごろから親しく仲が良かった。しかも徐宝山は庚子の年（1900 年、訳者注）に、すでに地方の紳商の推挙により密輸犯を逮捕する職務を担当していた。（中略）方、周の二人が徐宝山を招いたことに理由がないわけではなかった）（②の 303 頁）

忽有孫天生，糾合定字営兵丁，声言革命；（中略）一面由谷人向鎮江告急，（中略）林述慶[11]派徐宝山来揚。（拙訳：突然孫天生が出てきて、定字営の兵士を呼び集め、

[11] 『辛亥革命江蘇地区史料』の中での「林述慶」は、小説において「林慶述」と書かれている。これは武田が人名を誤ったと思われる。本論では「林述慶」を用いる。

「革命」と公言した；（中略）一方、周谷人により鎮江へ急を告げ、（中略）林述慶は徐宝山を揚州に派遣した）（③の 305～306 頁）

我們想利用駐鎮江的清軍統領徐宝山来光復揚州。（拙訳：我々は鎮江に駐屯している清軍の指揮官である徐宝山を利用して揚州を光復しようと思っていた）（④の 309 頁）

同時他們慫慂鎮江的清軍統領徐宝山来揚充当他們的保護人。（拙訳：同時に彼ら（紳商たち、訳者注）は鎮江の清軍の指揮官である徐宝山に揚州に来てもらい、彼らの保護人になってもらうことを慫慂した）（⑤の 314 頁）

以上の引用部分から次のような相違点が確認できる。③においては、周谷人が孫天生たちの蜂起に面して鎮江へ急を告げて援助を求めたら、林述慶が徐宝山を揚州に派遣したとあり、商人たちが徐宝山を招いたことが記述されていない。それに対して①②④⑤においては、塩商の頭株たちが徐宝山を招いたことが記載され、小説で商人たちが徐宝山に「眼をつけた」という設定と一致している。ただし、①②③④⑤において、いずれも小説での「先き行きの事態の変化について、眼がきいていたのである」というような商人たちに対する評価は存在しない。ゆえに、商人たちが徐宝山に着目した（330 頁）ことは、①の 296 頁か②の 303 頁、④の 309 頁、⑤の 314 頁のいずれかに拠って描写されているが、商人たちの将来どうなるかをあらかじめ見抜く見識の高さについては武田の創作であると言えよう。「先き行きの事態の変化について、眼がきいていたのである」という言葉が付加されたことで、商人たちの先見の明が顕在化された。それを踏まえて、武田はこのような商人たちが「鎮江の軍事諸力」から徐宝山を選び出すという展開をおのずから導き出した。

当時揚州の住民の「革命党」に対する認識を、武田は次のように描いている。

革命の「革(クオ)」の字を、揚州方言では「合(ホウ)」の字と同じに発音するので、住民の大部分は「革命党ちゅもんは、大家(みんな)が一条(ひとつ)の命を合わせる党なんだろうさ」と思っていたくらいだ。（「揚州の老虎」331 頁）

右の箇所は②の 301 頁の「鎮上居民，議論紛紛，多不知道甚么是革命党，以為革命党就是大家合（揚州方言読合如革）一条命的党。（拙訳：町の住民の議論が数多く出たが、大部分の住民は革命党とは何か分からず、（揚州方言において「合」と「革」の発音が同じなので）革命党はみんなが一つの命を合わせる党と思っていた）」に拠る。鼎談「革命と大衆をどうとらえるか」（1968）においても、武田泰淳は「革命が起こったらしいと、革命というものが町へやってくると、中国語で革命はコーミンというんだが、揚州の方言では、革という字は、合(ガツ)すると、そうすると、合(ゴウ)命になる。合命がきたと、合命って何だと、それは、みんなの命を集めて一つにするものだ、というんですね。この解釈が実におもしろい。」[12]と述べている。当時のインテリ以外の民衆の革命に対する一種の誤解を提示するためか、小説においても揚州方言での「革命」に言及した。

自衛団を作った（331 頁）ことは①の 294 頁に拠る。ただし、同段落の「『武力、武力とえらそうに言うが、奴らの兵士がおとなしくしているのは、給料がほしいからだ。その給料の支はらいは、カネがなくてはできやしない。だからカネさえ握っていりゃあ、どうにでもなる』」という金で武力が買える旨の会話は、典拠に存在しておらず、暗に金を持つ商人たちの支配的地位をほのめかすためか加えられたものである。「旗兵」「緑営」「新軍」など「鎮江の軍事諸力」の描写（332 頁）は『史料』の「鎮江府」の「鎮江光復史料」の 269～270 頁の要約である。それに続けて、語り手は、

したがって揚州の商会は、たえず鎮江の商会と連絡をとっていたし、複雑をきわめた鎮江の軍事諸力の中から、どれか一つ選び出す用意はしていたのである。

[12] 花田清輝・武田泰淳・司馬遼太郎「革命と大衆をどうとらえるか」（鼎談）『別冊潮』第 10 号（中国問題総特集）、1968 年 7 月、115 頁

鎮江がかわれば、揚州もかわる。

だが商会の「巨頭」たちは、その変化のさいに、かわらせられる被害者になるような、バカなまねはしたくない。むしろ、かわらせる側の主役になってしまわなければ、商会そのものがあぶなくなる。（「揚州の老虎」の 332 頁）

と述べている。③の 305 頁において、鎮江商会と揚州商会との連絡については、「其時林述慶已光復鎮江，鎮江商会会長于立三（和周為至親）与揚州商会聯系。（拙訳：その時、林述慶はすでに鎮江を光復していた。鎮江商会会長于立三（周谷人の最も近い親戚）は揚州商会と連絡を取った）」と記されている。武田は、揚州商会が積極的に社会変革に対応することを強調するためか、典拠において鎮江商会が揚州商会に連絡したことを小説では「揚州の商会は、たえず鎮江の商会と連絡をとっていた」に変更した。また、前述のように①②④⑤においてはただ商人たちが徐宝山を招いたことのみが記載されているが、小説においては揚州商会が「複雑をきわめた鎮江の軍事諸力の中から、どれか一つ選び出す用意はしていたのである」に変更されている。改変によって、揚州の商人たちの自主決定権を持つ主導的地位が強調されている。さらに、「かわらせる側の主役になってしまわなければ、商会そのものがあぶなくなる。」という言葉が付加されたことで、社会情勢の変化の際に、世の中を動かすものにならなければ「かわらせられる」被害者になってしまう商会の「巨頭」たちの危機感が描写されている。

続いて、小説において周と方との「鎮江の軍事諸力」に対する評価をめぐる会話（332～333 頁）を展開している。会話の冒頭における三益桟についての説明と、李竟成と徐宝山の仲についての描写はそれぞれ『史料』の「鎮江府」の「三益桟与李竟成」の 287 頁、「鎮江府」の「李竟成的一生」の 284 頁に拠る。ただし、後述の周、方の二人の会話における林述慶、李竟成と徐宝山に関する「品定め」は虚構であり、以下のように小説に加えられた。

「そうだよ。つまり鎮江が光復すれば、あそこを支配するのは、第 3 営の漢人隊長の

林、それにその李竟成とかいう男だからな。これは二人とも、革命思想にとりつかれて、私利私欲ぬきで革命運動をやらかそうとしているんだそうだ。勇敢で正直なだけがとりえではあるが、経済のことも実業のことも何一つわかってはいないらしい。それにこの連中は、中国全土に革命を押しひろげるのに熱中しているから、地方の利害をとりさばく実務となると、あんまりあてにならんようだな」

「うちの本家では、老虎びいきで、あの男も揚州へ来ると、かならず本家で宿泊することになってるんだが」

「いいじゃないか。どうせ革命党の大物は、上海、南京、武漢、北京をめがけているんだ。鎮江や揚州ばかり、かまっているわけにいきゃしない。だとすれば、こちらのカネに目をつけている、執念ぶかい地方小権力者の方が身ぢかの味方になりうると言うもんだ」

「こちらもむこうも、下ごころが通じあっている。江蘇人の江蘇、揚州人の揚州、商人の商会。その点のホドを心得ている奴。それがほしいんだが。……あの老虎は？」

と、周谷人、方沢山の二人は徐督帯の品定めもしていた。（「揚州の老虎」333 頁）

以上の引用部分で示されているように、林述慶、李竟成は二人とも自分の利益を追い求めず中国全土に革命運動を推進しているが、「経済」や「実業」について理解が乏しく、「地方の利害」をうまく処理する実務が期待できない。それに対して、お金に執着する徐宝山は商人たちの味方になる可能性がある。これらの「品定め」により、周、方の二人は最終的に「鎮江の軍事諸力」から徐宝山を選び出した。ただし、前述の①②④⑤の引用文において、商人たちが徐宝山を招いたことが記されているが、いずれも、商人たちの林述慶、李竟成と徐宝山に対する「品定め」に関しての記述は存在しない。ゆえに、「品定め」が付加されたことで、商人たちを「かわらせる側の主役」として描写したいという武田の意図がより一層明確になったと言えよう。

また、引用文における「あの老虎は？」という疑問文で表されているように、商人たちは徐宝山に警戒心を抱いていた。その原因は、政府側に重用された徐宝山が私情にとらわ

れて叛乱者の首領の逮捕を免れさせた（333 頁）ことにある。徐宝山が職務に私情を持ち込んだことは『史料』の「綜合部分」の「撫呉文牘」30、32 頁の内容をまとめて作られたものである。

（二）孫天生が兵士を率いて蜂起（334～336 頁）

定字営の兵士が入城した（334 頁）ことは、主に①の 295 頁に拠る。ただし、小説において、孫天生たちが「頭のてっぺんから足の先までまきつけていた」「白色洋縐」は「略奪した」ものであるという設定は、③の 305 頁の「至綢緞店，強取白洋縐，（後略）（拙訳：（孫天生たち、訳者注）絹織物の店に至り、白色洋縐を略奪し、（後略））」から取り入れている。「一万五千人に達していた」自衛団が暴動を起こした孫天生たちに抵抗せず列に並んで歓迎したことは、①の 294 頁と 295 頁をまとめて描写されている。ただし、自衛団が抵抗しなかった理由は典拠に存在しないが、武田が以下のように推測している。

> 「革命党の奴らは自分の腹に爆弾を飲みこんでいて、身体ごと爆発させるんだそうな」というううわさも流れ、むやみに恐れていたため、そうなったのか。（「揚州の老虎」334 頁）

武田が言及したこのうわさは、②の 301 頁「船中乗客也多談起革命党，有一人説：『革命党人真厲害，能把炸弾呑入腹中，遇到敵人時，将身一躍，人弾斉炸。』（拙訳：船の乗客も多く革命党に言及し、ある一人は『革命党人が実にすごいな、爆弾を腹に飲み込んで、敵に遭う時、自らの体を飛ばし、人と爆弾が一緒に爆発する』と言った。）」という記述に拠っている。また、鼎談「革命と大衆をどうとらえるか」（1968）においても、武田は以下のようにこのうわさに触れている。辛亥革命の時、インテリ以外の人々は「革命党員は、いつでも爆弾を抱えている、じゃなくて、呑んでいるから、ぶつかれば爆発する」[13]

[13] 同上

と思い違いをしていた。ゆえに、武田がこのうわさを、自衛団が抵抗しなかった理由の一つとしてわざわざ小説に取り込んだのは、辛亥革命時、中国の一般の民衆がどのように革命党をとらえていたのかを強調するためであると思われる。

次に、語り手が「彼（孫天生、引用者注）は光復会や同盟会、その他いかなる革命機関から派遣されてきたわけでもなかった」（335 頁）と孫天生の身分についてコメントしている。このコメントは武田が自らの史的判断を小説に加えたものであると思われる。注意すべきなのは、⑤の 313 頁では、「在武昌起義後不久，革命党派来了他們的密探孫天生（拙訳：武昌蜂起の直後、革命党は彼らの密探である孫天生を派遣した）」と肯定的な文脈で「真革命」者である孫天生が叙述されていることである。武田が孫天生を⑤の表現に反して「仮革命」者として否定的に評したことは、武田が孫天生を描写する際に⑤に従っていないことをうかがわせる。

孫天生が兵士を引き連れて塩運使衙門に乱暴に入り込み、方沢山が在庫の銀の状況を孫天生に教えた（335 頁）ことは、①の 296 頁に拠る。周谷人が、孫天生に兵隊の給料を手に入れる方法に関してわきから言葉を添えている間に、人を派遣し徐宝山に揚州に来てもらうことを要請した（335 頁）ことは、主に③の 305 頁に拠り、小説において次のように描かれている。

> のみならず、（周谷人は、引用者注）使者に同行して孫天生のもとへ至り、「兵隊にはらう給料その他については、これこれの方法で」と、先輩らしく口ぞえまでしている。そのあいだに鎮江へ人をやって、徐宝山に急報し、その来揚をうながしていた。これを「揚湯止沸の計」と呼ぶそうである。煮えたぎる熱湯を冷ますには、燃える薪を抜きとるのが上策である。それができないとき、湯をうちわであおぎ、いくらか沸騰をとどめる。いわゆる「一時しのぎ」のことである。

同場面の典拠には「一面由谷人向鎮江告急，一面由無方尋其熟人至孫天生処，教以筹餉之法，以為揚湯止沸之計。（拙訳：周谷人が鎮江へ急を告げる一方、周無方（周谷人の実

弟、訳者注）が知り合いに同行して孫天生のもとへ至り、兵隊の給料を調達する方法を教える。これを「揚湯止沸の計」とする。）」とある。煩雑さを避けるためか、『史料』での兵隊の給料を調達する方法を教える「周無方」を小説では登場させなかった。「揚湯止沸の計」についての説明が付加された。傍線部の「揚湯止沸の計」という言葉は『史料』と「揚州の老虎」のどちらにおいても孫天生たちの蜂起に対処する策略であった。

以上の比較より、孫天生が「革命機関から派遣されてきたわけでもなかった」と判断した武田は、『史料』の①②③を組み合わせ、孫天生の蜂起を描写したということがうかがえる。続いて、語り手（つまり作者である武田）は、⑤における孫天生像に関する自らの判断について以下のように述べている。

> 1957 年以後、揚州師範学院歴史系の研究者が、辛亥革命江蘇地区資料を編集するため、生きのこりの老人に面談して調査しても、「英雄」であったというほかに、あまりはっきりした人物像がうかびあがって来ない（「揚州の老虎」335 頁）

では、武田の言う「英雄」のほかに「あまりはっきり」しない孫天生の人物像は、⑤において具体的に如何にして叙述されているのか、例を挙げて説明する。

> 【編者按】揚州光復時，爆発了以孫天生為首的城市貧民与士兵的起義。起義的果実被代表塩商利益的帮会頭目徐宝山所簒奪，他以“仮革命”的罪名殺害了孫天生，自立為揚州軍政分府都督。孫天生起義的歴史，長期被反動派所歪曲。（拙訳：「前書き」揚州光復の時、孫天生をはじめ都市貧民と兵士が蜂起した。だが、塩商の利益を代表する幇会の親分である徐宝山が蜂起の成果を奪い、「仮革命」という罪名で孫天生を殺し、揚州軍政分府都督を自任した。孫天生の蜂起の歴史は長期にわたって反動派によって歪曲された。）（⑤の 311 頁）

> 当晩，孫天生把塩運使署的庫銀，分給了軍隊和貧民；大清銀行也被打开，散銭満

地，招呼貧民任意搬取；（拙訳：その日の夜、孫天生は塩運使署の在庫の銀を軍隊と貧民に分配した。大清銀行も開かれ、地面いっぱいにばら撒いたお金を、（孫天生が、訳者注）貧民を呼び勝手に取らせた。）（⑤の 315 頁）

身纏白綢的都督孫天生騎馬巡街，到処騰起春雷般的掌声和歓呼声。（中略）塩商巨頭蕭云譜家，整天大門緊閉，悽悽惶惶，害怕孫天生会衝進他們的屋子。（拙訳：白色洋縐を身にまとった都督である孫天生が馬に乗って大通りを巡回し、至る所で春雷のような拍手の音が起こり、歓声があがった。（中略）塩商の頭株である蕭云譜は、1 日中正門をぴったりと閉ざし、悲しみながら、孫天生が彼らの家に押し入ることを怖れた）（⑤の 316～317 頁）

狡猾的方、周等人明白：如果公然反対革命的孫天生，便暴露了自己的反革命面目，将激起人民的公憤；必須把自己打扮成“真革命”，把孫天生扣上“仮革命”的帽子，（後略）（拙訳：狡猾な方、周たちは、もし革命を行っている孫天生に公然と反対すれば、自分の反革命の姿が暴露され、人民の公憤が引き起こされる故に、自分が「真革命」を気取り、孫天生に「仮革命」というレッテルを貼らなければならない、ということをはっきり知っていた）（⑤の 318 頁）

至今，揚州的労働人民，（中略）還在眉飛色舞的談論他的勇敢。（中略）相反的，対残忍凶狠的徐宝山都是心懐余恨。（拙訳：現在でも、揚州の労働人民は、（中略）依然として顔をほころばせて彼（孫天生、訳者注）の勇敢について語り合う。（中略）これに反して、残忍で凶悪な徐宝山に対して相変わらず恨みを抱いている）（⑤の 319 頁）

以上の引用部分から見れば、⑤において孫天生は、危険に屈することなく兵士を率いて蜂起し、貧民にお金を渡し、勇敢さを発揮して揚州の光復事業を成し遂げた「英雄」であ

り、紳商によって陥れられ死んだ後でも多くの人から畏敬の念をいだかれている「真革命」者でもある。一方、周、方たちは自分の利益を守るために「平和光復」を企み、下からの革命を阻止する「仮革命」者として記述されている。

また、武田は⑤の 315～316 頁における孫天生の後について事を起こした人々の名簿の詳細をほぼ翻訳して小説に取り入れている。ただし、武田は「この調査はあまり正確でないようで、まさかこの連中を活用するだけで、たとえ三日天下でも揚州を乗っ取れるはずがない」[14]とこの調査の正確さに疑いを表している。続いて、武田は⑤の 316 頁における孫天生が公布した告示の内容も小説に取り入れ、「年貢[15]と税金全廃、奸商の横行禁止などかかげてあるのは、手っ取り早い効果をねらったのであろう」[16]と推測している。言うまでもなく、以上の引用部分は武田自らの判断であって、典拠にある記述ではない。そこからは、武田のこの調査報告書に対する不信感や告示の目的に対する猜疑が読み取れるのであろう。

（三）徐宝山が揚州に到着し、孫天生を逮捕・殺害（336～338 頁）

「紳士、商人の両界」によろこび迎えられた徐宝山が十九日に揚州に到着し、翌日孫天生を逮捕した（336 頁）ことは、②の 303 頁に拠る。徐宝山が揚州に到着したことについては、『史料』の中でいくつかのところで触れられているが、小説における「十 9 日」、「よろこび迎えられた」など細部の描写と、②の 303 頁の記述とは一致しているので、303 頁の記述により徐宝山の来揚が描かれていると判断したほうが適切と思われる。徐宝山の揚州への到着に伴い、周谷人、方沢山の徐が真革命であるかどうかについての対話（336 頁）は、小説において以下のように展開されている。

「孫天生は、仮革命だったから、あっさりつかまった。だが奴をつかまえた徐老虎は

[14] 武田泰淳「揚州の老虎」、『武田泰淳全集増補版』第 9 巻、筑摩書房、1978 年、336 頁
[15] 武田泰淳『わが子キリスト』（講談社文芸文庫、2005 年）では、『武田泰淳全集』に記載された「年具」という語は明らかな誤植として「年貢」に修正された。
[16] 同 14

真革命なのかな」

と方沢山が浮かぬ顔つきで周谷人に言う。

「たしかに仮革命は、わるい。だがな。真革命が仮革命より、わしたちにつごうがいいものか、どうか。仮であろうと真であろうと、わしたちがそれを動かせばいいのだ」

この対話は③の 306 頁の以下の記述に拠る。

徐本塩梟，受招安為緝私営長。揚州人士対彼，頗不信任。於是众人責問周谷人：“孫天生是仮革命，徐宝山是否真革命？”其勢汹汹，大有与谷人為難之勢。無已、無方退去众人，約少数人同谷人至徐宅察看情形。有阮元之曾孫阮茂伯出面，以身家性命担保，其勢乃平。（拙訳：徐は元々塩梟で、招撫されて緝私営長になった。揚州の人士は彼をあまり信任していなかった。すると、衆人は周谷人に「孫天生は仮革命だったら、徐宝山は真革命なのか」と詰問した。気勢がすさまじく、周谷人を困らせる姿勢が感じられた。無已、無方の二人はみんなを退去させ、何人かを誘って周谷人と一緒に徐の住宅に行って状況を観察した。阮元の曾孫である阮茂伯は顔を出して、自分と家族の命を担保にすることで、みんなを落ち着かせた）

ここに見られるとおり、武田は「徐老虎は真革命なのかな」という内容を典拠から採っているが、典拠においては、大勢の人に詰問された周谷人が困窮して現場で答えられず、他人と一緒に徐の住宅に行って状況を観察するしかなかったとされているのに対し、小説においては方と会話する周谷人が「仮であろうと真であろうと、わしたちがそれを動かせばいいのだ」と返事したとしている。『史料』の中で存在しない「わしたちがそれを動かせばいいのだ」という内容を「揚州の老虎」に付加したことで、商会会長周谷人たちは時局が支配できる「動かすもの」に変貌したと言えよう。

孫天生がかじやに捕まえられたか、アヘン窟で見つけ出されたか（336 頁）は、②の 303 頁と④の 310 頁の内容をまとめて作られたものである。孫天生が連行された大通りで、

「揚州の同胞たちよ。わが孫天生のなすところを学べ。わが輩が揚州で三天(みつか)皇帝となったことをウソとは言わさんぞ」と大声で叫んだ（336 頁）ことは、②の 303 頁に拠る。また、徐が孫天生に盗まれて埋められてあった銀を掘り出した（336 頁）ことは、①の 297 頁、あるいは②の 303 頁に拠る。以上述べたところを総合すれば、武田は、この調査報告書の正確さに疑いを持っていたためか、⑤ではなく①～④から材料を取り入れて、乱世を利用して金銭を略奪する「仮革命」者である孫天生像を創作したと言えよう。

（四）徐宝山が泰州と興化県を光復（338～340 頁）

囚人の破獄（338 頁）、泰州の商会長と保護団長の経歴（338 頁）、招かれた徐宝山が泰州における劉鳳朝の叛乱を鎮めた（338～339 頁）ことは、それぞれ⑦の 321 頁、322 頁、322 頁に拠る。匪賊だらけの水郷である興化県で「北から匪賊の大集団がくるぞ」といったうわさがながれていたので、当地の農界、商界、学界が徐を興化県に招いて興化県の光復を成功させた（339～340 頁）ことは、⑩の 327～328 頁に拠っているが、『史料』で金持ちが避難を準備し、貧民が衣食を哀願したことなどは、作中の事情が煩雑にならないためであろう、省略している。本シーンの中で注意すべきなのは、劉鳳朝の叛乱に対する泰州の商会長と保護団長の対応が次のように書かれている点である。

> この二人（泰州の商会長と保護団長、引用者注）も揚州の二人そっくりに「揚湯止沸の計」を用いて、この劉鳳朝の要求を適当にあしらったり、はねのけたりしておいて、鎮江から揚州へ来ている徐老虎に救いを求めた。（中略）泰州の保護団長は「金は集めてさしあげる。ただしそちらの要求額が大きすぎるから、数日間待ってもらう。（中略）」を劉に約束させた。（「揚州の老虎」338 頁）

同場面の⑦の 322 頁には「帰与沈計，決定一面与刘叛議，准其向商富筹金犒軍，（中略）因其数甚巨，須寛几日，方能彙集；一面由商会発電，派員往請徐軍統立即派兵来泰剿捕。（拙訳：（泰州の保護団長は、訳者注）帰って沈（泰州の商会長、訳者注）と商談

したところ、劉鳳朝と討議して、劉が豪商から兵隊の給料を調達することを認め、（中略）要求額が大きすぎるから、何日か期限を延ばさなければならず、そうしてはじめてお金を揃えることができると約束する一方、商会から電報を送り、人を差し向け、徐宝山に泰州へ兵隊を派遣し匪賊を討伐・逮捕してもらうと決めた。）」とあり、確かに両者は細部の一つ一つまでがほぼ合致している。ただし、一見してわかるように、傍線部の「揚湯止沸の計」という表現は付け加えられたものである。「揚湯止沸の計」を利用して社会情勢を有利に転換させた揚州の商人たちのように、武田は、「揚湯止沸の計」を繰り返したことで、泰州の商会会長たちも、「一時しのぎ」を用いる「動かすもの」として描いたと言えよう。

（五）袁世凱に帰順した徐が殺された（340～342 頁）

徐宝山を革命側の仲間にしてくれた林述慶が袁世凱に毒酒を飲まされて死んだ（340 頁）ことと、帝政を復活させた袁世凱に反対した李竟成が逮捕状を出され故郷へ帰り農地を耕作して生活した（341 頁）こととは、それぞれ『史料』の「鎮江府」の「李竟成的一生」の 285 頁、285～286 頁に拠る。小説のこれらの箇所は典拠をほぼ翻訳したものと言ってよい。徐宝山は袁世凱に帰順しようとしたが、袁を恐れさせる暴言を吐いたので、袁が送った参謀長に殺された（341 頁）ことは、③の 307 頁に拠る。小説の結末では、塩商の頭株たちが今後如何にして時局に対応するのかについて、以下のような会話（341～342 頁）がなされている。

「これからどうする。袁世凱は、孫天生とも徐宝山ともちがうぞ」

と心配する方沢山に、周谷人はしずかに語った。

「やはり、<u>揚湯止沸の計</u>でゆっくりやろうじゃないか」

「孫天生の皇帝は三日だったな。袁の奴は？」

「三日よりは長びくさ。だが三年はもたんよ」

そして、周谷人の予言はまたもや的中した。

以上のエンディングの会話は、対応する原文がない武田の創造したものである。ここまで、井口時男の評論で示されたように、「この混乱のなかで、理念に奔走する者（林述慶と李竟成、引用者注）も権力（政治）に奔走する者（徐宝山と袁世凱、引用者注）も潰え、ただ商人たちが生き延びる」ことが確実に見られる。そして、商人たちは帝政復活を宣言した袁世凱が「三日よりは長びくさ。だが三年はもたんよ」と予測して、誰かが主導する政治的社会的な革命の持続を信じず、商人たち自らが「揚湯止沸の計」で世の中を動かすことも垣間見える。ゆえに、井口時男の「彼ら（商人たち、引用者注）は世界の根本的変革ではなく、世界の持続を信じている」という指摘は、間違いないと思われる。

ただし、小説と典拠との比較により、「揚州府」に関連する資料において一回のみ使用されている「揚湯止沸の計」という言葉が、小説のエンディングの会話でも出てきており、小説中で三回繰り返されたことがわかる。武田は、結末の「揚湯止沸の計」と冒頭の「衆議一決」の内容とを対応させ、商人たちに一時しのぎを用いて「鎮江の軍事諸力」から徐宝山を選出させ、そして世の中を動かさせた。ゆえに、小説において商人たちは、ただ「世界の持続を信じている」のみならず、「動かすもの」として社会情勢を導くと言えよう。

四、典拠の利用法と小説の独創性

（一）典拠の利用法

第三節では具体的に小説と典拠との比較を検討してきた。本節ではそれを踏まえつつ、全体の典拠の利用方法をまとめてみたい。おおよそ次のことが言えるのであろう。

１、小説は一部分が『史料』の「分区部分」の「鎮江府」にある「鎮江光復史料」、「三益桟与李竟成」、「李竟成的一生」、および『史料』の「綜合部分」にある「撫呉文牘」などをもとにして作られた。しかし、全体から見れば、大部分が『史料』の「揚州分府」の①②③④⑤⑦⑩を典拠とする。揚州の住民の革命（党）に関する認識、人物の服装、事件の時間など細部も典拠内の記述に従い、「揚州の老虎」が『史料』の内容とほぼ一致し

ているので、小説のほとんどが『史料』をなぞっていると見てよい。

２、武田は「揚州の老虎」の創作にあたり、実体験者の回想録・インタビュー記録（①②③④）と研究者の調査報告書（⑤）を比較しながら摂取し、研究者の「附録：孫天生起義調査記」よりも辛亥革命の実体験者の回想録・インタビュー記録を優先して取り込んだと言えよう。この点を表明するのは、⑤における「英雄」であり、「真革命」者である孫天生像に反して、①②③④に拠って創作された乱世を利用して金銭を略奪する「仮革命」者である孫天生像である。

『史料』の前書きには、「首先調査了辛亥革命時揚州孫天生起義的経過。這是編輯本書的嚆矢。（拙訳：まず、辛亥革命時の揚州孫天生蜂起の経過を調査した。これは本書を編集する嚆矢である）」と記されており、「附録：孫天生起義調査記」が『史料』において重要な意味を持っていることがわかる。ただし、武田は小説の全体に渡って、⑤ではなく①～④を用いて孫天生の蜂起と逮捕の経緯を描写した。それは、おそらく前述のように武田が⑤における孫天生像に関して「『英雄』であったというほかに、あまりはっきりした人物像がうかびあがって来ない」と考え、また、この調査の正確さに疑いを持っていたことに原因があるのであろう。

（二）小説の独創性―「動かすもの」としての商人たち―

小説は、ほとんど『史料』をなぞっていると言えるが、武田が典拠の記述を丸写しせず独創的に再構成したものである。典拠に基づいて作られた作品の独創性は、無論変更・付加された箇所に表れている。以下、明らかになった変更・付加部分によって作品の独創性をまとめたい。

本論の第三節の（一）で示したように、語り手の「揚州の塩商の頭株の人々」に対する「先き行きの事態の変化について、眼がきいていたのである」という評価が付加されたことを通して、商人たちの先見の明が強調されている。「だからカネさえ握っていりゃあ、どうにでもなる」という軍事力が経済のはたらきで決定される旨の会話が付け加えられたことにより、金を持つ商人たちの支配的地位がそれとなくほのめかされている。また、①

②④⑤では、ただ揚州の商人たちが徐宝山を招いたことが記載されているのに対して、小説では揚州商会が「複雑をきわめた鎮江の軍事諸力の中から、どれか一つ選び出す用意はしていたのである」に変更されている。その上、「かわらせる側の主役になってしまわなければ、商会そのものがあぶなくなる。」という地の文と、揚州の商人たちの林述慶、李竟成、徐宝山に対する「品定め」の対話が付加された。これらの変更・付加部分により、商会の「巨頭」たちが、社会情勢の変化の際に身を守るため、「鎮江の軍事諸力の中から」「身ぢかの味方になりうる」徐宝山を選んだ「かわらせる側の主役」に変貌されていると言えよう。

また、第三節の（三）で提示したように、「徐老虎は真革命なのかな」と聞かれた時、典拠においては人々に問い詰められた周谷人が答えに困窮し、他人と共に徐の住宅に行って状況を観察するしかなかったのに対し、小説においては方と会話する周谷人が、「仮であろうと真であろうと、わしたちがそれを動かせばいいのだ」と返答した。「わしたちがそれを動かせばいいのだ」という内容が小説に加えられたことにより、商会会長周谷人たちは社会情勢を支配できる「動かすもの」に変容されていると言えよう。

さらに、第三節の（二）（五）（六）で指摘したように、『史料』の「揚州府」に関する資料において一回のみ使われている「揚湯止沸の計」という言葉が、「揚州の老虎」においては三回繰り返されている。典拠において、孫天生たちの蜂起に直面した揚州の商人たちは、孫天生に兵隊の給料を調達する方法を教えながら鎮江へ急を告げた（小説では「徐宝山に急報し、その来揚をうながしていた」）。これを「揚湯止沸の計」とする。すなわち、「揚湯止沸の計」が最初に出てくる際に、典拠、小説、いずれにおいても、「揚湯止沸の計」は揚州の商人たちが用いた孫天生たちの蜂起への対策であった。ただし、（五）で分析したように、泰州の商会長と保護団長も「揚州の二人そっくりに『揚湯止沸の計』を用い」、劉鳳朝の要求をいいかげんに扱いながら徐老虎に救いを求めた。また（六）で検討したように、袁世凱が帝政を復活させ、徐宝山が死んだ後、揚州の商人たちは「やはり、揚湯止沸の計でゆっくりやろうじゃないか」と述べ、「揚湯止沸の計」を用いて社会情勢を導こうとしていた。以上の変更・付加部分により、小説において商人たちは、変革の時

代において「揚湯止沸の計」を利用して世の中を動かすものに変貌されていると言えよう。

武田は、実質的なデビュー作である評論『司馬遷』（1943）の中で、「素封」と呼ばれる中国古代の民間経済人の伝記である『史記』の「貨殖列伝」に言及し、また、実業人に注目した小説集『士魂商才』のあとがき（1958）において、「司馬遷はこの「素封」の人々の独特的なエネルギーを、すこぶる重要視している。欲はふかいが、世の中を動かす活力を、あなどりがたいと見たからである。」[17]と、司馬遷が経済人の世の中を動かすエネルギーを重視したことを指摘している。おそらく武田は、司馬遷から影響を受けたためか、「揚州の老虎」で商人たちの働きを重視し、商人たちを、世の中を「動かすもの」として描いていると考えられる。

五、おわりに

本稿では、一節で『辛亥革命江蘇地区史料』が小説「揚州の老虎」の典拠であることを突き止め、二節で具体的なテキスト間の相互関係を明らかにした。そのうえ、三節で小説全体にわたる典拠の利用方法をまとめ、併せて、「揚州の老虎」において付加された「わしたちがそれを動かせばいいのだ」、繰り返された「揚湯止沸の計」など言葉によって、商人たちを「動かすもの」として描く「揚州の老虎」の独創性を明確化した。

最後に武田文学における辛亥革命題材小説の意義について述べる。問題提起で指摘したように、上海から帰来後、武田は常に中国革命についての思索を巡らせてきた。悲壮さも滑稽さもある中国革命を紹介したい武田は、相次いで「秋風秋雨人を愁殺す」（1967）と「揚州の老虎」（1968）を発表した。言うまでもなく、悲壮とは「秋風秋雨人を愁殺す」において浙江での蜂起計画が察知され、大通学堂に留まった革命家秋瑾が逮捕され、斬首処刑されたことなどを指す。滑稽とは「揚州の老虎」において「実際は革命党にも何も属していない青年（孫天生、引用者注）が、ひとたび『革命』と呼んだら揚州の革

[17] 武田泰淳「『士魂商才』あとがき」（1958 年）『武田泰淳全集増補版』第 13 巻、筑摩書房、1979 年、328 頁

命ができちゃった」[18]ことなどを指す。二つの作品が発表される直前、中国の文化大革命（1966）が開始され、武田は「日中関係もむずかしくなってきている」[19]と心配していた。辛亥革命以降「革命っていう言葉を使うのは日常茶飯事になった」[20]という中国に対して、異なる側面から「非常にジグザグした」辛亥革命を描いた二つの作品は、武田にとって日中理解の懸け橋を架ける作業であったと言えよう。

[18] 武田泰淳・竹内実「戦争と中国と文学と」（対談、1974 年）、『武田泰淳全集増補版』別巻 2、筑摩書房、1979 年、228 頁
[19] 同上
[20] 武田泰淳・河上徹太郎「革命・神・文学―吉田松陰と秋瑾女子の間―」（対談、1968 年）、『武田泰淳全集増補版』別巻 1、筑摩書房、1979 年、248 頁

第二章　武田泰淳「水の楽しみ」の典拠と方法

一、問題提起

武田が「『才子佳人』後記」（1947 年）において「自分としては明朝滅亡は死ぬまでに一度ゆっくり書き上げたいテーマである。」[1]と述べているように、「明朝滅亡」は武田が生涯をかけて書きたかった主題と言っても過言ではないと思われる。中国文学研究会の際から、武田は「明朝滅亡」に関心を表し、続々と「明朝滅亡」・「明末文学者達」に関連する作品を発表した。1937 年に明代後期の文人袁宏道（字は「中郎」）に関する評論「袁中郎論」を発表した。1943 年に中国文学研究会が解散する直前、武田は「私は明末文学者達の生き方に興味を持つ者なので、ことに謙益は棄てがたい対象である。」[2]と明言し、『烈皇小識』、『鹿樵紀聞』などの中国語史料に基づいて明末・清初の文人である銭謙益の伝記「閃鑠」を書いた。1946 年に戦争下に書きためられていた旧稿に筆を加え、清初文人の史震林の『西青散記』を典拠として、「戦争中、中国古典の精神を摸索していた頃の記念の一品である」[3]小説「才子佳人」を発表した。1953 年に雑誌『心』の 2 月号に明末の文人袁中道（字は「小修」）を主人公とした小説「水の楽しみ」を発表した。1979 年に「おそらくこの時期（1940 年、引用者注）に、＜明朝没落史＞の構想の一環として執筆されたものと思われる」[4]＜未発表作品＞小説「霞客」が雑誌『海』に掲載された。以上の整理により、言うまでもなく「明朝滅亡」題材の小説は武田文学において重要な位置を占めていることがうかがえる。

「明朝滅亡」を扱った小説に関する先行研究は、小説「才子佳人」を中心に検討されてきた。たとえば、布村弘は「武田泰淳の『才子佳人』（その 1～4）：原拠『西青散記』との

---

[1] 武田泰淳「『才子佳人』後記」（1947 年）、『武田泰淳全集増補版』第 12 巻、筑摩書房、1979 年、72 頁
[2] 武田泰淳「閃鑠」（1943）、『武田泰淳全集増補版』第 1 巻、筑摩書房、1978 年、76 頁
[3] 武田泰淳「『新文学全集』あとがき」（1952 年）、『武田泰淳全集増補版』第 12 巻、筑摩書房、1979 年、254 頁
[4] 古林尚「霞客」（解題）、『武田泰淳全集増補版』第 18 巻、筑摩書房、1979 年、586 頁

距離」（1991～1994）において、小説「才子佳人」とその典拠である『西青散記』との比較文学的考察を行っている。ただし、管見によればこれまで小説「水の楽しみ」に関する研究は皆無である。本論は「水の楽しみ」の典拠を指摘し、小説とその典拠とを比較した上で典拠の利用法をまとめるという基本的な作業を行いたい。

二、「水の楽しみ」とその典拠

小説「水の楽しみ」は 1953 年に雑誌『心』に発表され、のち 1971 年に筑摩書房刊行の『武田泰淳全集』第 1 巻、1974 年に新潮社より発行の『武田泰淳中国小説集』第 4 巻、1978 年に筑摩書房刊行の『武田泰淳全集増補版』第 1 巻に収録された。以後の再録はない。雑誌『心』では文末に(「明朝滅亡」のうちの一章)という注記があり、作者にはこれにつづく長編小説執筆の構想のあったことがうかがえるが、発表後何も書きつがれてはいないので、ここでは独立した短編小説としてとりあつかう。小説の主人公は中国の明代末期の文学者、詩人である袁中道である。袁小修は兄の袁宗道（字は「伯修」）、兄の袁宏道と共に世に「三袁」と呼ばれる。そして三袁の出身地（湖北省公安県）によってその一派を公安派と称される。それでは小説の梗概を述べておく。明末文人である袁小修は少年の頃からずっと舟遊びを好んでいたが、様々な出来事（親戚の逝去、国家の政治の変遷など）に遭って舟遊のおもむきが何度か変って来ていた。少年の頃の舟遊びから、年を取り自分の舟を持つまでの袁小修の個人の運命と時代変遷と家族凋落が舟旅を通じて描かれている。

筆者の確認により、武田の小説の表現と袁小修の作品と深い関係があると思われる。袁小修の作品の書誌情報について、銭伯城が「珂雪齋集版本及校点説明」[5]において以下のように整理した。

（１）『珂雪齋近集』（10 巻、ほかに袁小修の息子である袁祈年の詩が 1 巻付録されて

[5] 銭伯城「珂雪齋集版本及校点説明」（1984）、（明）袁中道著・銭伯城点校『珂雪齋集』、上海：上海古籍出版社、2019、1～4 頁

いる)。銭伯城は付録の袁祈年の詩の一句「予今二十五（拙訳：私は現在 25 歳である)」により、この本は万暦 45 年（1617）に刊行された可能性があると推定している。

（２)『珂雪齋前集』(24 巻、万暦 46 年（1618）刊行)。「名為「前集」，実即「全集」(拙訳：書名は「前集」であるが、実際に「全集」である)」[6]。

（３)『珂雪齋集選』(24 巻、天啓 2 年(1622)刊行)。「此本係就前集基礎有所増删，故曰『選』(拙訳：この本は前集を基礎にして増減されたものであるから、「選」と呼ばれている)」[7]。

（４)『珂雪齋外集遊居柿録』(13 巻、天啓 4 年(1624) 刊行)。「柿録実札記別称（拙訳：実際に「柿録」は「札記」の別称である)」[8]。この本は 1935 年に阿英により校訂し句読点をつけられ、施蟄存により編集されて、『袁小修日記　遊居柿録第一至十三巻』に改題のうえ上海雑誌公司から刊行された。

以上の銭伯城の言及した本以外、袁小修が存命していた時から小説「水の楽しみ」が発表された（1954 年）時にかけて、袁小修の作品について次のような出版物が存在する。『袁小修日記』(袁中道著・何有林校閲、国学研究社、1935.08)、『珂雪齋近集』(袁中道著・襟霞閣主人重刊、中央書店、1935.12)、『袁小修日記　遊居柿録』(袁中道著・胡協寅校閲、広益書局、1936.04)、『珂雪齋集：詩集』(袁中道著・阿英校点・施蟄存編集、上海雑誌公司、1936.06)、『珂雪齋集選』(袁中道著、中央書店、1936.06）などがある。袁小修の作品の本はバージョンが繁雑で、各本の校閲に良否あり、まちまちである。本によって巻の順序、頁数などが異なる。現時点では武田がどの本を典拠にしたか判断にくい。その上、ある本は年代が古いので入手が困難である。ゆえに、参照の便、本論は（明）袁中道著・銭伯城点校の『珂雪齋集』(上海古籍出版社、2019）を使い、小説と典拠との比較を行う。「珂雪齋集，是明代公安「三袁」兄弟之一袁中道的全集，包括他的詩、文、雑著、遊記、書札和日記 (拙訳：珂雪齋集は明代公安「三袁」兄弟の一人である袁中道の全集で、

[6] 同上、1 頁
[7] 同上、2 頁
[8] 同上、3 頁

彼の詩、文、雑著、遊記、書札と日記を含んでいる)」[9]。銭伯城は『珂雪齋近集』、『珂雪齋前集』、『珂雪齋集選』、『珂雪齋外集遊居柿録』を含む袁中道の現存する詩文を『珂雪齋集』に収録し、そして編集の際に用いたバージョンについて、「前集及近集係原中央図書館蔵書，台湾偉文図書出版社影印；集選係上海図書館蔵書；遊居柿録係復旦大学図書館蔵書（拙訳：前集及び近集は元中央図書館の蔵書で、台湾偉文図書出版社の影印である。集選は上海図書館の蔵書である。遊居柿録は復旦大学図書館の蔵書である)」[10]と述べている。また、「水の楽しみ」本文は筑摩書房刊行の『武田泰淳全集増補版』第 9 巻（1979）に拠る。

三、「水の楽しみ」と典拠との比較

以上のような認識のもと、以下は「水の楽しみ」のストーリーを追いながら、便宜的に小説を五つのシーンに分け、通し番号、見出し、頁数を記し、典拠との関係が特徴的である描写を中心に比較を試みる。引用文の冒頭の仮名文字について、平仮名は小説の本文を示し、片仮名はそれに対応する典拠の本文を示す。

1、袁小修の舟遊びの趣

小説の冒頭の段落において、武田は『珂雪齋集』の「書王伊輔事」の一部分を借りて、次のような袁小修の若い頃の経歴について描いている。

（あ）

少年にして才気にまかせ、駿馬にまたがって酒家に出入し、銭を視ること糞土の如くであった小修も、<u>水の楽しみだけは棄て切れず、年をとるに従い愛着の念が増すばか</u>

[9] 銭伯城「前言」(1985)、(明）袁中道著・銭伯城点校『珂雪齋集』、上海：上海古籍出版社、2019、1 頁

[10] 銭伯城「珂雪齋集版本及校点説明」(1984)、(明）袁中道著・銭伯城点校『珂雪齋集』、上海：上海古籍出版社、2019、4 頁

りである。功名なぞは手に唾して取れるもの、天下の事は易々たるものと、郷里の人人の排斥も気にせず、遊俠放浪の旅をつづけた事もある。(「水の楽しみ」350 頁)

(ア)

予少年雅負才気，謂功名可唾取，易言天下事。自辛卯後，連擯斥，乃好任俠。危冠綺服，騎駿馬，出入酒家，視銭如糞土。数年，大為郷里毀罵，妻子怨嗟，羞不能帰。(『珂雪齋集』の「書王伊輔事」932 頁)

比較してみると、以下の相違点が確認できる。典拠の中の「辛卯」は万暦 19 年（1591 年）を指す。当時、22 歳の袁小修は郷試[11]を受けたが不合格になった。その後何回か郷試を受けたが相変わらず不合格であった。ゆえに、李寿和は『袁小修小品』(1996) において、「擯斥」が「指郷試不中[12]（拙訳：郷試に不合格したことを指す)」という注釈をつけている。そこで「連擯斥」は「連続して郷試に不合格した」という意味になる。ただし、この解釈と異なって、武田が（ア）の「大為郷里毀罵（拙訳：大いに郷里の人々に悪口を言われ、ののしられた)」を参考にしたためか、「擯斥」を本来の意義である「排斥」に翻訳し、さらに「大為郷里」と「擯斥」とを組み合わせて「郷里の人人の排斥」にした。また、(あ）の下線部の内容が組み込まれていることにより、年をとるにつれて、小修が水の楽しみに益々こころをひかれるばかりであることを強調したいという武田の意図が見られる。そして、(あ）の下線部の内容は次の（エ）の「中年以後，煙霞趣重，粉黛習軽（拙訳：中年以後、山水煙霞への趣が重くなった。美人粉黛への趣が軽くなった。)」に拠り作られた可能性が高い。

2、遠帆楼（350～351 頁）

遠帆楼を手に入れた経緯と楼の周りの風景（350～351 頁）は本シーンの最初の段落において以下の（い）のように描写される。それに対応する典拠は『珂雪齋集』の「遠帆楼

[11] 郷試：明・清代に各省で 3 年ごとに行われた科挙の試験である

[12] ［明］袁中道著、李寿和選注『袁小修小品』、北京：文化芸術出版社、1996 年 8 月、263 頁

記」の一部分（イ）である。

（い）

遠帆楼が宅の右に建てられたのは万暦二十年のこと。ひねもす江上に遊んで、沙石の間に酔臥していた小修の有様を目にとめられてであろう。父上は竜陽の人から、楼を載せた舟を買いとり、それに彼を住まわせた。楼に登って望めば大江前によこたわって、江北の煙樹も沙上の遊人もかぞえられるばかり。槐や柳の緑の中を、風にまかせた帆船の往来は疾い時は奔馬の如く、ゆるやかな時は雲の停るよう。遠帆楼と呼んで自ら楽しんでいた。（「水の楽しみ」350～351 頁）

（イ）

予性嗜水，不能両日不遊江上。嘗醉卧沙石間，至夜猶不去。

万暦壬辰，有龍陽人以舟載楼而鬻者，大人鬻而建之宅右，而令予居焉。登而望之，則大江横亘其前，浩浩乎，洶洶乎，（中略）凡江北之煙樹，沙上之遊人，了了可数。其風帆之往来者，出没於青槐緑柳之中，或疾如馬奔，或緩若雲停，（中略）顧而楽之，曰是可名為「遠帆楼」也。（『珂雪齋集』の「遠帆楼記」558 頁）

（イ）においては「嘗醉卧沙石間，至夜猶不去。（拙訳：嘗て沙石の間に酒に酔って寝ころんで、夜まで帰ってこなかった。）」のみが記されているのに対して、（い）においては小修の父は小修の酔臥の様子「を目にとめられてであろう」という推測が付加されている。また、武田は典拠における元の主語「大江」を「舟（武田に省略されている）」に変更し、「則大江横亘其前，浩浩乎，洶洶乎（拙訳：大江が舟の前に横たわって、水が豊かにみなぎり広がって、湧いていた。）」を「（舟が、引用者注）大江前によこたわって」と翻訳している。これらの相違点以外、（い）は典拠の記述をほぼそのまま使ったと言えよう。続いて、ある女（楼の前の持主の妓女）が遠帆楼を訪ね、楼の過去を小修に伝えたことは「遠帆楼記」の一部分（558～559 頁）を典拠にして描かれたものである。ここで留意すべきなのは、本シーンのエンディングにおける小修と女との対話である。

（う）

小修は、その女の気持ちをひきたてるように、「それでは楼が僕のものになったのだから、君も僕のものになってここに住む気はないか？」とたずねてみた。しずかに顔をもたげた女は、それでも嬉しそうに笑った。「楼が他人に買われてしまったのに、燕がいつもでもそれに住んでいるわけにはまいりません」そう言い置くと、女は思いきりよく立ち上がり、楼を降りて行った。砂の上を歩み去る女の姿を小修はいつまでも見送っていたものだ。（「水の楽しみ」351 頁）

（ウ）

予乃調之曰：「汝独不学盼盼乎？」妓収涙笑曰：「燕子楼被人買去、盼盼将安居耶？」（『珂雪齋集』の「遠帆楼記」559 頁）

典拠に出てくる「盼盼」というのは、唐王朝時代に徐州の長官張氏の愛妓関盼盼である。「燕子楼」というのは張氏の邸内の小楼である。関盼盼は主人の旧愛を忘れることができずに、張氏の死後十余年この楼に住んで嫁がず独身を守り続けた。竹内好は「そうでない（漢訳仏典のほかの、引用者）漢籍に関していえば、高等学校のころから、またはそれ以前から、読みたくわえた量が相当あったろうと想定される」[13]と武田の漢籍の読書量に言及している。膨大な漢籍を耽読しながら自然に得られた漢文力により、武田は「盼盼」「燕子楼」という中国の典故（古典の故事）を知っていたはずであると思われる。ただし、比べてみるとわかるように、武田は関盼盼の物語を借りて、典拠における「汝独不学盼盼乎？（拙訳：君はまさか盼盼に見習うわけではあるまい？）」を「それでは楼が僕のものになったのだから、君も僕のものになってここに住む気はないか？」と意訳して小説に取り入れている。そして武田は、典拠の中の「燕子楼」から「燕」（日本語の「燕」は中国語の「燕子」に当たる）のみを拾い上げ、「盼盼」を「燕」に置き換えて、「燕子楼被人買去、

[13] 竹内好「解説」（1972）、『武田泰淳全集増補版』第 9 巻、筑摩書房、1978 年、346～347 頁

盼盼将安居耶？（拙訳：燕子楼が他人に買われて、盼盼は安居することができるのか？）」を「燕がいつもでもそれに住んでいるわけにはまいりません」と意訳した。中国の典故になれない日本人の読者に分かりやすい文章にするためか、武田は典拠の一つひとつの語句にこだわらず、全体の意味をとって意訳したことがわかる。

3、兄の遺骸を引き取る行き帰り（352～355 頁）

第２シーンに続けて、武田は小修の「美人粉黛」と「山水煙霞」への楽しみ、社会背景、自然環境について、典拠を参考にして以下の二つの段落（(え）と（お)）を描写している。

（え）

あの頃はまだ美人粉黛の香りを忘れかねていたのであろう。買いとった舟を宅として住みついていたとはいえ、まだまだ人間くさい土をはなれかねていた。美女粉黛の楽しみから遠ざかり、山水煙霞の楽しみにひたるまでには、あれからさまざまの出来事に遭わねばならなかった。わが身の上にも、明朝の上にも、めまぐるしいほど変遷があった。わが身は漂泊のうちにおのずから一つの安心へと近づいているが、国家の政治向きはますます険悪になっていた、それらの変化変遷につれ、袁小修の舟遊のおもむきも、何度か変って来ていた。(「水の楽しみ」352 頁）

（エ）

予少年時，煙霞粉黛，互戦而不相降。邇煙霞，則入煙霞；近粉黛，亦趨粉黛。中年以後，煙霞趣重，粉黛習軽。(『珂雪齋集』の「東遊記二十二」620 頁）

（お）

江南の入江、呉の水郷ならば、舟の旅もあぶなげもなく楽しいであろう。波濤の高い楚のあたりでは、ともすれば風浪になやまされることが多い。とりわけ航行者のおそれたのは、行く行くとられる舟税の額が、なかなかにかさむことであった。ことに治安が乱れはじめると、盗賊や軍兵が水上にまちぶせて暴行をはたらくおそれもあった。そうした危険を冒してまでも、どこまでも舟をすすめて行けたのは、やはり若い

日のことである。(「水の楽しみ」352 頁)

（オ）

銭太史抑之来，極言汎舟之快。予謂生於呉越，自当享汎舟之楽。若楚中江、漢，波濤時時掀舞，毎出即有性命之憂，其楽安在？幸有沮、漳、湘、沅，水隘而文，但去予家稍遠耳，然亦不忍不遊也。(『珂雪齋集』の「游居柿録巻之十二」1477 頁)

（エ）において、単純に小修が若い頃に「煙霞粉黛」両方を好み、年を取ると「煙霞」のほうが割合に好きになったことが記載されている。それに対して、（え）において「煙霞粉黛」のこと以外、「さまざまの出来事」、「国家の政治向き」と「舟遊のおもむき」との繋がりも書かれている。この繋がりに当たる直接の典拠が見つからないので、武田が創作した箇所である可能性がある。また（オ）の下線部が（お）に活かされていることは一読してわかる。（え）と（お）を通して、第２シーンの小修の「粉黛」への楽しみから第３シーンの小修の「煙霞」(「苦しかった」「旅」、即ち兄の遺骸を引き取る行き帰り）の体験に筆を移している。ゆえに、（え）と（お）は文と文をつなぐ段落であると判断してもよいかと思われる。(え)、(お) に続けて、小修の兄の遺骸を引き取る行き帰りについて、武田は『珂雪齋集』の「行路難」(925～932 頁）に基づいて描いている。本シーンの以下の冒頭（か)、中間（き)、結末（く）の段落を例として説明する。

（か）

万暦二十八年の旅は、とりわけ苦しかった。兄の伯修の遺骸を、北京まで引取りに行ったのである。冬十二月、身を切る寒さの中であった。折悪しく小修の子供がやはり月を同じくして世を去っていた。兄の死をおもい、わが子の死をかなしみ、凄然たるうちに小修は舟に乗った。(「水の楽しみ」352 頁)

（カ）

万暦庚子，（中略）十一月廿六日晩，忽得伯修訃音，（中略）大人含涙，命児可速往。予哽咽不能答，是時王母亦於一二日不起，而予小児子海亦逝，荼苦殆不忍言。(中略)

遂以月初離邑，中辰渡江，（中略）為之凄然。（中略）窮日夜，鬚鬢皆為冰結，面拆手亀。(『珂雪齋集』の「行路難」925～927 頁)

（か）を（カ）と照らし合わせてみよう。（カ）において旅の具体的な月が書かれておらず、ただ「十一月廿六日晩，忽得伯修訃音（拙訳： 十一月二十六日の晩、突然伯修の訃音を得た)」と「遂以月初離邑（拙訳：そこで月初をもって邑を離れて)」と記述されている。武田は日付を計算して旅を出す月を「十二月」にした。また、（カ）において目的地も遺骸も書かれていないが、武田が（キ）における下線部の「都門（都の門、ここでは北京を指す、引用者注)」、「櫬（棺桶、引用者注)」を参考にして、「北京」、「遺骸」を本シーンの冒頭文に置いたと思われる。

（き）

下僕は刀の柄の方を持ち、郵卒は刃の方を握っている。刃にかけた指からは血がほとばしっている。「一体どうしたわけか」とたずねると、孝廉の下僕が馬がのろかったのを怒り、雲南の刀を抜いて馬のどろよけと鞍を斬ったのだという。よほど力のある男と見え、斬られた品物はほとんど真二つに割られていた。

丁度その時郵卒二名が酒に酔っていたが、この有様を見ると、「てめえ俺様を斬る気か」と立ち上って、下僕の刀をとりあげようとする。わたすまいとする、で喧嘩になつたのであった。

郵卒どもは不平を抱き、大木を手にして孝廉と小修に迫って来るので、二人はすばやく裏口から逃げ出し、小修の部屋へ難を避けた。

ところが、ヤレヤレと一息いれるひまも無く、血まみれになった郵卒が刀をひっさげて闖入して来た。孝廉はたけりたって立ち向おうとしたが、小修はそれをなだめた。それから郵卒の親分に会って話してみると、鞍などは親分の品物であるため、それを傷つけられては親分にすまない。それがもとで郵卒が騒いだのだとわかったので、破損した品物の代金を支払い、ようやくにして事なきを得たのであった。(「水の楽しみ」

353 頁）

（キ）

見孝廉僕与一郵卒争一刀，僕持其柄，卒持其鋒，鋒入指内，血洿洿如注。訊之，則孝廉僕嗔馬不力，取滇刀割其馬障泥及鞍韉等物，所割殆尽。二卒方大飲，醉見之，曰：「若何不割我？」取刀自割，僕不与，故相持急。其類不平，遂持大木扶孝廉及予，亦誤以予為同事人也。予与孝廉従後室避之，至予寓，方坐定，而卒塗血持刀来。予復避之，孝廉大呼欲起，予曰：「此野郵也，無官可籲。又豎子俱極醉，万一相逼，而成他変，豈真珠抵鵲也。君其忍之。」予乃呼主人語之曰：「我楚人，孝廉滇人，非同事也。」主人始知之。予又曰：「若可諭其人，鞍韉係其主人家物，彼懼故為此耳。我予以銭，孝廉家奴実横，決不罪若。」主人以是語二醉豎，豎乃止。（中略）月終，乃抵都門。（中略）遂以辛丑四月，扶櫬従潞河発焉。（『珂雪齋集』の「行路難」927 頁）

北京に行く途中で、下僕が郵卒の馬が遅かったのを怒り、刀で馬の鞍などを斬り、この様子を見た郵卒が下僕と喧嘩になったという設定は、（き）が（キ）と一致している。ただし、以下のような相違点が存在する。（キ）の「取刀自割（拙訳：刀を取って自分（郵卒を指す、訳者注）を切ろうとする）」という表現が省かれている。また（キ）においては、郵卒が騒いだ原因について小修が「鞍韉係其主人家物，彼懼故為此耳（拙訳：鞍韉が彼らの主人のものであり、彼らは怖れたためそのようなことをしたにすぎない）」と推測したとされているのに対して、（き）においては、郵卒が騒いだ原因について小修が「郵卒の親分に会って話してみると」ようやくわかるようになったとされている。

（く）

また浙江征東の兵卒が三千人、ひきいる将軍もなく沿途を擄掠して横行するのにもであった。数百艘ばかりが、どれにも女達をのせて、ののしりさわぎながら小修の舟のわきを通過して行った。女はどれも擄掠されたもので、妓女もあり良家の婦女もあつた。こうした通り魔のような乱卒達の手をのがれ臨清にたどりつくと、そこには税

金をとりたてようと威だかげに待ちうける役人達がいた。大金を払って通過をゆるされ、辰河まで達した時は、もう河は底をあらわしていた。はげしい暑さの中で、河底は白い塵をあげていた。(「水の楽しみ」355 頁)

（ク）

予見牽纜者一人私向舟語曰:「我輩浙中征東卒也，凡三千人，無帥又無糧，沿途擄掠。爾舟不宜犯之，可急移対岸。」(中略) 急移舟，則見後舟可数百艘，中多女妓及良人婦，皆所擄掠者。（中略）予舟既至臨清，又為税使所厄，大輸金銭，乃得行。（中略）至辰河，見底矣。天劇暑，河揚塵，（後略）(『珂雪齋集』の「行路難」930～931 頁)

（く）と（ク）とを照合すると、（く）における乱卒達に関する描写は『珂雪齋集』の「行路難」をほぼ忠実に翻訳したものであることがわかる。

4、礦税使事件（355～356 頁）

第 3 シーンにおける小修の苦しかった旅の描写に続けて、小修の舟遊びと社会の動乱との関係を以下のように述べている。

逝きし人をいたみ、残された者をあわれみ、途の困苦につかれ、世のさまにおどろかされ、惨憺たる旅であった。しかしその頃の小修はなおも旅の面白さをあきらめぬ、豪放さを失ってはいなかった。その心をおしすすめ、大きな旅から小さな旅へ、流れ行く船から、とどまる船へと心の置きどころを変えさせたのは、やはり湖北にも目だって増して来た動乱のきざしであったろう。山地には山の乱れがあるように、水に富む湖北では、動乱は江水にのぞんできざしていた。なかでも万暦三〇年の礦税使事件は、まざまざと記憶に残っている。(「水の楽しみ」355 頁)

増してきた動乱の兆しで、今までのような悠長な舟遊びができなくなり、心のおきどころを変えた。この段落により、「大きな旅から小さな旅へ、流れ行く船から、とどまる船

へ」という舟遊びの楽しみ方の変化と社会の動乱とを関連付け、小説の描写は袁小修の旅から社会の動乱を代表する事件の一つ「礦税使事件」に移した。つなぐ段落と言ってもよいこの引用部分は、対応する典拠が見つからないので、武田が創作したものと思われる。「礦税使事件」の中心人物は、朝廷に派遣された礦税使の中の陳奉という特に悪質な男である。陳奉は悪事をたび重ねて、住民の不平を高め、叛乱を引き起こしたことは、以下のように描写されている。

（け）

朝廷にとっては都合のよい政策であったろうが、礦税をとりたてられる地方民は難渋するばかりであった。ことに派遣された礦税使が悪質の時は、地方全体がひどい騒ぎになった。湖北に出張した陳奉という男は、そのなかでも特に悪質であった。市井無頼の徒、しかも強暴無類であった。はじめこそ瓦礫を武器にして彼の出入を禁じ得た村もあったが、いつのまにか手足がふえ、はむかう者もなくなった。陳奉は武昌に役所をひらき、郡県を巡行して王者の如くふるまった。翔魚獰竜の服をまとい、ともぞろいも天子になぞらえ、部下には「千歳々々」と呼ばせた。婦女に姦淫すること数も知れなかった。略奪も意にまかせ、彼のために倒産する家が続出した。一日の収入は莫大な額に達し、呉越の大滑、市井の悪少年がきそって配下となり、彼等の横行の下に住民の不平は日ましに高まっていた。官をうらみ、吏をのろう声は地にみち、ついに万暦三〇年、武昌に人民の叛乱が起った。

陳奉の居は焼かれ、彼は命からがら藩府に逃げ込んだ。人民は彼の輩下数百人を縛し、滔々たる揚子江の中へ彼等を投げ入れた。一人また一人、黄色く濁る江水の中に、投げ入れられた身体は、声を立てるひまもなく、流されては沈んだ。武昌で叛乱が起きたと知ると、漢陽の住民もまた相聚って税吏を縛した。一人投げこむごとに両岸の住民は掌をうって大笑し、競い合うように水葬をつづけた。広い江の両岸から投げ込まれる人間は、三日間にしてまだ尽きなかった。江水は深く、流れは速く、悠々として数百人を飲み込んだまま、血泡一つうかべず、気味悪いほどしずかにうねっていた。

（「水の楽しみ」355～356 頁）

（ケ）

万暦中，両宮三殿皆災，九辺供億不給，外帑空虚。天子憂匱乏，言利者以礦税啓之，乃以内侍充礦税使，分道四出。皆奸悪武弁上其事，以無頼中使名請，詔可，則中使為主，而武弁及奸人輔之流毒。其使楚者，為陳奉，市井博徒，最無行者也。建節至楚，所至如逐梟獍，土人皆持瓦礫禦之，有司不能禁。禦之勝者，終不敢入其境；不勝者，乃入據之。久之爪牙漸多，亦無敢禦者。遂建牙開府於武昌，而歴巡郡県。其出皆建旄頭，設慮無前茅，車馬供帳，擬于王者。奉冠危冠，著翔魚獰龍服，佩使者綬，八座牽挽，幾二十余人，若天子歩輦狀。称者皆曰「千歳」。得淫奴妻，据為婦、与同臥起。（中略）呉越大猾，及市井悪少年，皆行金銭竄役籍中（中略）民皆怨恨思乱。

壬寅，奉居武昌旧帥侯邸，若古藩鎮，大作威福。金銭日至無算。奉大喜，寝有他志。民不堪剥刻，遂変，共起誅之，燔其居。奉急従後垣走入藩府獲免。居民縛其左右数百人，皆投之大江。漢陽人聞之，皆相聚縛其使，亦如武昌。毎投一人，両岸居民皆拊掌大笑為楽。投三四日不尽。（『珂雪齋集』の「趙大司馬伝略」774～776 頁）

（け）と（ケ）比較すると、次のような相違点が確認できる。（ケ）において、「万暦中，両宮三殿皆災，九辺供億不給，外帑空虚（万暦中、両宮三殿が皆火災に遭い、国境への供給が充足せず、外帑（財政機関、訳者注）が空虚である）」という事件の背景が詳しく記述されているのに対して、（け）において詳細を省いて「朝廷にとっては都合のよい政策であったろう」という推測に変更されている。また、（ケ）において「八座牽挽，幾二十余人，若天子歩輦狀。（拙訳：二十余人が八方位で担ぎ、天子が歩輦（位の高い人を乗せるための乗り物の一種である、訳者注）に乗る様子のようである））」という供の者をそろえる場面が記述されているが、（け）においてこの細かいところを省略して「ともぞろいも天子になぞらえ」に簡略されている。

５、袁小修の移住（356～358 頁）

武田は第４シーンにおいて、明末の朝廷が財政的な危機を打開するため，礦税使を各地に派遣し，礦税の増徴を行ったが、民衆の激しい抵抗に遭った事件を紹介し、当時の歴史的背景の一部を明らかにした。それに続けて、武田は「生きた人間を飲みこむことがたびかさなるごとに、長江は気が荒くなったのであろうか。波をたかめ、水かさをまして水近い村々を浸すことが多くなった。袁小修の故郷公安の街も、いつか江水に犯されるまま、住みにくい土地になりつつあった。」[14]というつなぐ段落を付加して、社会事件の描写から袁小修の住居の周りの自然環境の描写に筆を移し、さらに自然環境の変化や家族の変動による袁小修の移住の経過を書いた。これから本シーンの最初の４つの段落（こ）と最後の3つの段落（さ）を例として取り上げ、典拠との比較を行う。

（こ）

父も兄達も、はじめは公安城中をはなれた淋しい長安村中に居をかまえていた。長男の伯修が官吏試験にパスしてから、父は城中の石浦河西岸に一宅をいとなんだ。石浦河は公安城をつらぬき流れ、上は長江に通じ、下れば蒿港に至った。東河西河の二流に分れていたが、江路が破壊されるにつれ、河とは名ばかりのものになりはじめた。それでも万暦六、七年の頃はまだ河には往来の舟があり、万暦十四、五年になっても、両岸の垂楊の嫋々たるなかを小舟を泛べて楽しむことができた。それが万暦丁亥、すなわち十五年に江水が堤を破ってからは、城中にはようやく頽廃の姿が濃くなっていた。しかし住むだけにはまだ不自由はなかった。

万暦二〇年、次男の中郎が進士になって、伯修と共に故郷へもどると、伯修は河の西に、中郎は河の東に家を持ち、河をさしはさんで相寄り住んだ親族が、朝夕首を聚めては詩を賦し禅を談じて、にぎやかに暮したものである。

万暦二三年、袁小修が中郎とともに都入りをしてからは、江堤の潰えること日に日にはなはだしく、一人残された父は石浦河畔の居を棄てて斗湖の堤上に移り住んだほ

[14] 武田泰淳「水の楽しみ」(1953)、『武田泰淳全集増補版』第１巻、筑摩書房、1978 年、356 頁

どである。斗湖とは郭外西南にある湖の名で、長い堤によって二つにくぎられ、他の一つを柳浪湖と呼んだ。名こそ異れ、橋を通じて水も一つの同じ湖である。長い堤は公安城の南門に達する大道であった。柳浪湖の中には田もあって、湖の風に作物の青々とゆらぐのがながめられた。柳や楓の茂みの下に渠や堤がいりみだれ、池には白い還の花が咲いた。骨肉親戚に凋落の多かったその頃、中郎もやはり石浦河からこの堤の上に移り住んだ。

たびたびの北京行でかさむ旅費の必要から、小修も石浦河の宅を売りはらわねばならなかった。そして万暦三十二年、帰来して移り住んだのが中郎の宅の後にあたる油水の畔であった。

（コ 1）

初，大人与両兄皆居邑長安村中。伯修第後，大人始営一宅于城中石浦河西岸。石浦河者，穿城一泓，上通江，下至蒿港，出東河、西河両派。久之江路淤，僅存河身。水漲時，止通東西河。万暦戊寅、己卯年間，河中猶有舟楫。至丙戌、丁亥，尚可泛，両岸垂楊裊裊。自丁亥江水破堤，城中漸残壊，然猶可居住。故壬辰中郎成進士，与伯修同請告帰。伯修市一居，与予一小宅鄰，住河西；中郎住河東；予外王父襲春所公及諸舅，俱居河東西。朝夕聚首，譚禅賦詩為楽。乙未，伯修、中郎偕予俱入都，江堤日潰，大人乃棄石浦居，移至斗湖堤上。此後骨肉親戚多凋落，伯修卒于京；中郎再請告，棄去浦河居，亦治一宅堤上；惟予尚居石浦。癸卯，予以入都赴郷試，無資斧，乃鬻石浦河居，而移眷属于郷。甲辰，下第帰来，無居処，適中郎宅後油水之畔，（『珂雪齋集』の「珂雪齋游居柿録巻之八」1383 頁）

（コ 2）

郭外西南柳湖与斗湖，一湖也，長堤間之，為大道達於南門，其内為柳浪。柳浪匯通国之水，穿橋入於斗湖。柳浪実湖也田之，然常浩浩焉。独其中稍阜者，幾四十畝，可田，絡以堤。堤内外皆種柳及楓，帯以渠，渠樹之内始為田。田之内，地較阜，復為堤周之，堤上復種柳。堤之内，前為放生池，種白蓮，（『珂雪齋集』の「柳浪湖記」564 頁）

（こ）と（コ 1）との比較を行うと、典拠に記述されている小修や家族の移住、江堤の潰えることなどを、ほとんど翻訳してそのまま小説に取り入れられていることがわかる。ここでは、留意すべきなのは（コ 1）において（こ）の下線部の内容に対応する記述がないことである。（こ）の下線部の斗湖、柳浪湖に関する表現は（コ 2）の下線部の内容を典拠として描かれたものである。従って、武田がそれぞれ独立した、典拠としての二つの文章（「珂雪齋游居柿録巻之八」と「柳浪湖記」）を組み合わせ、述べている対象（斗湖と柳浪湖）を巧みに一つの段落にまとめたことは明らかである。本シーンの最後の 3 つの段落は主に小修が「自分の船を持つことができた」ことについて以下のように描写している。

（さ）

万暦三六年には公安の自然はますます破れすたれ、盗賊の変も多くなった。この年はじめて小修は、自分の船を持つことができたのである。

名誉や利益のためでなく、ただ遠遊するのには水の旅が一番良い。水の旅には自分で舟をととのえ、食糧を貯えて行くがよい。或は遠く或は近く、舟足の速い遅いもかまわずに良友にあえば一泊し、好山水に遇えば逗留し、そのおもむきをきわめればよい。自分の舟なら船頭にせきたてられる心配もない。行くもとどまるも自由ではないか。

こうした意見を或日舅の龔にのべると、龔は自分のもち舟を彼にあたえた。その上よくなれた舟人もつけてくれた。自分の舟が手に入ると、小修の舟遊はいよいよ興を増した。風に随って江を上下すれば、居宅などは要らぬとまで思った。雪や雨の日を舟の上ですごすことが多くなり、朝の光り夜の闇の中に点綴する沙渚や変現する烟波のすがたに心をうばわれていた。風にあえば風が面白く、事あればまたおもむきがまさった。名所旧蹟もたずねたが、やはり人知れぬ風土の中に、つきせぬものがふくまれていた。

（サ）

偶晤龔静亭八舅，語及遠遊事。予曰：「遠遊原不為名利事所迫，不若従水為便。然水道又不若自買一舟，載糗糧其上，不論遅速遠近，庶幾遇好山水，好友朋，可以久淹其間，極登渉盤桓之趣，不為長年輩所促。又江湖間多風濤，惟属己舟，可行則行，可止則止，便莫大焉。」舅云：「我有一舟，係我自作，極其堅固。又長年係我熟用者，今以付甥。」（中略）見夕陽作殷紅色，点綴洲渚。（中略）若予者，則止用小楼船往来江上，随風上下，追陶峴、張志和諸公後耳，不復問置宅事矣。（中略）何処無棲隠之地，人不識耳。（『珂雪齋集』の「珂雪齋游居柿録巻之一」1175～1185 頁）

（さ）と（サ）と比較すると、小修が舅の龔から船をもらった経緯がほぼ一致している。ただし、武田は典拠の「随風上下，追陶峴、張志和諸公後耳，不復問置宅事矣。（拙訳：風に随って江を上下し、陶峴、張志和諸公を模倣し、住宅の購入のことを再び問わなかった）」を利用した際に、「追陶峴、張志和諸公後耳」を省略し、「風に随って江を上下すれば、居宅などは要らぬとまで思った」と翻訳した。

四、典拠の利用法と小説の独創性

（一）典拠の利用法

第三節では「水の楽しみ」を五つのシーンに分け、小説と典拠との比較を詳しく考察してきた。本節ではそれを踏まえつつ、典拠の利用法をまとめてみたい。おおよそ次のことが言えるであろう。

1、シーンごとに小説の典拠となったものを整理すれば、第 1 シーンは「書王伊輔事」932 頁に拠り、第 2 シーンは「遠帆楼記」558～559 頁に拠り、第 3 シーンは「東遊記二十二」620 頁、「游居柿録巻之十二」1477 頁、「行路難」925～932 頁に拠り、第 4 シーンは「趙大司馬伝略」774～776 頁に拠り、第 5 シーンは「珂雪齋游居柿録巻之八」1383 頁、「柳浪湖記」564 頁、「珂雪齋游居柿録巻之一」1175～1185 頁に拠ったことがわかる。小説「水の

楽しみ」はほとんど『珂雪齋集』から材料を採って組み合わせられたものであると言えよう。そして、武田が、典拠の記述の順序を入れ替えたり、複数個所を適宜まとめたり（例えば、（コ 1）と（コ 2）とをまとめて一つの段落を構成した）、簡略化したりし、『珂雪齋集』をなぞって「水の楽しみ」を作ったことは明らかである。

2、細部描写に小さな変更があったが、小説「水の楽しみ」は全体的に典拠である『珂雪齋集』を翻訳したものであると言えよう。そして、翻訳した内容に典拠の原文に忠実に直訳したものもあれば、原文の一語一語にとらわれず、全体の意味をくみとって意訳したものもある。ただし、全体的に直訳が多く、意訳が少ない。

（二）小説の独創性

「水の楽しみ」が「明朝滅亡」のうちの一章であるので、作者の独創性を十分に表したとは言えないが、これから第三節において典拠と小説との比較を通して析出した付加の内容により、武田の独創性の一端を分析したい。

本小説において付加の内容は主に小説の前後の文脈をつなぐ段落であると思われる。詳しく言えば、第２シーン「遠帆楼」と第３シーン「兄の遺骸を引き取る行き帰り」をつなぐために，第２シーンと第３シーンとの間に、「わが身の上にも、明朝の上にも、めまぐるしいほど変遷があった。（中略）それらの変化変遷につれ、袁小修の舟遊のおもむきも、何度か変って来ていた。」といった「さまざまの出来事」と「舟遊のおもむき」との関係を示す表現を付加した。このつなぐ段落により、第２シーンの小修の「粉黛」への趣から第３シーンの小修の「煙霞」（「苦しかった」「旅」、即ち兄の遺骸を引き取る行き帰り）の体験に筆を移した。

次に、第 3 シーンと第 4 シーン「礦税使事件」との間に、武田は「その心をおしすすめ、大きな旅から小さな旅へ、流れ行く船から、とどまる船へと心の置きどころを変えさせたのは、やはり湖北にも目だって増して来た動乱のきざしであったろう。」といった小修の舟遊びと社会の動乱との関係を示すつなぐ段落を付加した。小説の描写は袁小修の旅から社会の動乱を代表する事件の一つ「礦税使事件」に移した。

さらに、第 4 シーンと第 5 シーン「袁小修の移住」との間に、武田は「生きた人間を飲みこむことがたびかさなるごとに、長江は気が荒くなったのであろうか。波をたかめ、水かさをまして水近い村々を浸すことが多くなった。袁小修の故郷公安の街も、いつか江水に犯されるまま、住みにくい土地になりつつあった。」 というつなぐ段落を付加して、社会事件の描写から袁小修の住居の周りの自然環境の変化、移住の経過に関する描写に筆を移した。

以上のような付加の内容（つなぐ段落）により、小説の描写が滑らかに場面を移し、そして袁小修の舟遊びの趣は明末の時代背景、家族の盛衰、自然環境の変化としっかりつながっていることになっていると言えよう。本小説における武田の独創性は、付加の内容により出典が異なるシーンにつながりを持たせて、物語がきちんと構成できたことにあると言えよう。

五、おわりに

本稿では、二節で『珂雪齋集』が小説「水の楽しみ」の典拠であることを指摘し、三節で「水の楽しみ」と『珂雪齋集』との対応関係を明らかにした。そのうえ、四節で小説全体にわたる典拠の利用方法、独創性をまとめた。

問題提起で指摘したように、武田は長年にわたって「明朝滅亡」に興味を持ってきた。では、武田が「明朝滅亡」に関心を持つきっかけは何だろうか。武田は「『新文学全集』あとがき」（1952 年）において「中国でも一時、明朝が滅亡して清朝が漢民族を支配した時期の随筆的作品が流行したことがあり、私も明末清初の文人の数奇な運命に興味を抱いた。」[15]と述べている。武田が「明朝滅亡」に心ひかれたのは、当時中国の明末文学が流行っていたことがきっかけのようである。中国の散文作家、翻訳家である周作人は、1932 年に輔仁大学で「新文学」をめぐって行った講義のノートである『中国新文学的源流』にお

[15] 武田泰淳「『新文学全集』あとがき」（1952 年）、『武田泰淳全集増補版』第 12 巻、筑摩書房、1979 年、254 頁

いて、「当時（明末、引用者注）の文学運動と、民国以来の文学革命運動とは、よく似た点が沢山あります。その主張も趨勢も、殆どみなそっくりです」[16]と述べ、明末の文学運動、中華民国成立後の中国で始まった文学革命運動、この二つの文学運動の共通点を指摘している。その後、明末の文学の価値が注目を集め、数多くの明末の文学作品が発掘し刊行され、それに関する研究も盛り上がっていた。

中国において明末の文学、およびそれに関する研究が流行っていたころ、中国文学研究会が設立された（1934 年）。同会の創設メンバーの一人である武田泰淳は鋭い洞察力をもって、ほかの中国文学研究会同人たちに先だって中国における文学の研究の新しい動きに気を付けた。その後評論「袁中郎論」を書いた。竹内好は「われわれが中国文学研究会を発意したころ、中国では明末の文学者、袁中郎の発掘が流行しはじめていた。私が準備会の席で質問したとき、袁中郎のことは誰も知らなかった。袁枚(こちらは清代の文人で有名)と同一人ではないか、という説さえあった。一年後に雑誌を出すことになって、そのころはある程度の知識が得られたので、岡崎が誌上に紹介した。それから二年、私がまだ文壇知識の程度に止まっているとき、武口は突如として自作の「袁中郎論」を雑誌にのせた。」[17]と追憶した。

「袁中郎論」を発表した後、十数年ぶりに武田は「明末文学者達」への情熱が冷めることなく、『珂雪齋集』に基づいて、袁中郎の弟である袁小修を取り上げて、小修の水の楽しみという一断面を書いている。「水の楽しみ」は「『明朝滅亡』のうちの一章」としてまだ未完成であるが、武田が「閃鑠」において「今までの支那史、支那文学史の、あのもっともらしい大きな形骸よりは、おぼろげでも閃鑠する小さい姿の方を、私はとりたいのである」[18]と述べているように、本小説も中国文学の「閃鑠する小さい姿の方」をとらえる作品と言ってもいい。中国で一時流行っていた明末文学（中国語の古文）を丁寧に日本語の現代文に翻訳（直訳・意訳）して日本近代文学作品に改作し、明末文学の「閃鑠する小

[16] 周作人著、松枝茂夫訳『中国新文学之源流』（支那学翻訳叢書第 4)、文求堂書店、1939、49 頁
[17] 竹内好「解説」(1972)、『武田泰淳全集増補版』第 9 巻、筑摩書房、1978 年、347 頁
[18] 武田泰淳「閃鑠」(1943)、『武田泰淳全集増補版』第 1 巻、筑摩書房、1978 年、80 頁

さい姿の方」を日本人の読者に紹介した。本小説を通して、日本人の読者が明末文学について新しく知ることができ、また、日中文学交流が深まることもできた。ゆえに、中国の文学をもとにして改作した「水の楽しみ」は日中文学交流の橋渡しとなる作品であると言えるのであろう。

第三章　武田泰淳「流沙」の典拠と方法

一、問題提起

武田は敦煌と深いつながりがあると思われる。東京大学の宗教学科を出た大島泰信（武田の父[1]）はかつて「敦煌の文献があったら、みんな買っておけ」[2]などの忠告を武田に与えた。浄土宗第一期海外留学生としてドイツ留学十年に及んだ武田の伯父渡辺海旭はオックスフォード大学から同大学出版の Serindia（『セリンディア』）[3]などの Stein（スタイン）[4]の著作をもらった。伯父、父の死後，武田は『セリンディア』などを譲り受けた。恐らく父、伯父からの影響を受けたのであろう、武田は長期間にわたって敦煌に関心を持っていた。大学時代において、武田は「敦煌の資料が発掘され、公刊されていた頃だから、『大正新修大蔵経』などと読み合せれば、いくらか目をおどろかす論文も書けそうだった。ウジウジしている東京帝大の漢文学科を攻撃するのも、愉快だった。」[5]この発言から、当時武田が敦煌学者を目指していた様子がうかがえる。「中国文学研究会」を設立した後、1935 年 12 月発行の雑誌「中国文学月報」（第十号）に発表された「今年度の中国文化（国学）」において、武田は「書誌学」に触れる際に「（前略）各国の敦煌発掘本の報告に注目し、海外学者の研究を常に重要視している国際的態度には敬服すべきものがある。」[6]と敦煌研究に言及した。1936 年 4 月発行の同誌に発表された「唐代仏教文学の民衆化について」において、武田は「（１）敦煌本の俗文・変文と漢訳蔵経の本縁部説話の比較、（２）

---

[1] 父、大島泰信の師にあたる武田芳淳の遺言により、武田泰淳は出生時より武田姓を継いだ。
[2] 武田泰淳「僧侶の父ーほんとうの教育者はと問われてー」(1970)『武田泰淳全集増補版』第 16 巻、筑摩書房、1979 年、433 頁
[3] Mark Aurel Stein, Serindia: Detailed Report of Explorations in Central Asia and Westernmost China, Oxford: Clarendon Press, 1921. (Reprinted 1980, New Delhi: Motilal Banarsidass)（訳名:『セリンディア:中央アジアおよび中国西端部における探検の詳細報告』)。スタインの第 2 回中央アジア探検（1906～08）の調査結果をまとめた報告書。本文 3 冊、図版 1 冊、地図 1 冊から成る。スタインの探検はその膨大な遺物・古文書の収集、正確な記録、精密な地図作製などで、最も正統的な探検といわれる。
[4] スタイン（Sir Mark Aurel Stein、1862～1943、イギリスの考古学者・探検家)。ブダペストに生まれ，のちイギリスに帰化。1900～16 年の間に３回中央アジアを探検し，敦煌などで大量の仏画・文書を発見したほか，古代の東西交通路を踏査した。(参照：　旺文社世界史事典 三訂版)
[5]武田泰淳「文学を志す人々へ」(1962)『武田泰淳全集増補版』第 15 巻、筑摩書房、1979 年、209 頁
[6] 武田泰淳「今年度の中国文化（国学)」(1935)『武田泰淳全集増補版』第 11 巻、筑摩書房、1978 年、137 頁

敦煌本の俗謡と浄土教讃詩の比較を行って仏教民間文学の形式」[7]を分析した。1937 年から華中戦線に送られた武田は「戦地に駐屯しているとき、（中略）もともとあまり文学書は買わなかったし、大正新修大蔵経の民間仏教の部や、ウィットホーゲルの支那経済学、そして何よりも、次から次へ発見される敦煌発掘の資料などを読みふけっていた。」[8]と述べているように、相変わらず敦煌に夢中になっていた。

「とても自分は小説なんか書けるものじゃないから、まあ学者のほうで、敦煌の文献でもいじってれば、なんとか食えるであろうと」[9]武田は最初思っていたが、1952 年雑誌「文芸」に武田文学における唯一の、敦煌を舞台にし、スタインの探検調査を取り扱った小説である「流沙」[10]を発表した。主人公蒋（実名：蒋孝琬）が英国の考古学者スタインとインドの回教徒シンたちと一緒に敦煌を訪れ、漢代の長城遺跡の発掘調査、千仏洞の調査を行ったことなどを描いた。

本小説をめぐって、『群像』1952 年第七巻第三号に掲載された青野季吉・佐藤春夫・中村光夫による創作合評（58 回）の「武田泰淳のアイロニイ」において、青野季吉は、「何か東洋的なものを描きたかったのだろう」[11]と、直接の創作の動機が「相当うまく書いてある」[12]「あの『蒋』という中国人」[13]を書きたかっただろうと推測し、主人公蒋が「結局嘘ばかりついているのだが、しかしそれは日本の僕らの観念による「崩れ」じゃないんだな。」[14]と、崩れながらも強いようなところがある蒋の人物像を述べ、佐藤春夫は、「だから悪く言うと『流沙』は書物から来た材料をこなしたというペダンティックな興味が多す

---

[7] 武田泰淳「唐代仏教文学の民衆化について」（1936）『武田泰淳全集増補版』第 11 巻、筑摩書房、1978 年、170 頁
[8] 武田泰淳「私の第一評論集『司馬遷』」（1967）『武田泰淳全集増補版』第 16 巻、筑摩書房、1979 年、195 頁
[9] 埴谷雄高・武田泰淳、「軍隊と文学的出発点」（対談、1970 年）『武田泰淳全集増補版』別巻 1 、1979 年、365～366 頁
[10]「流沙」はのち 1953 年 7 月筑摩書房より発行の短編集『愛と誓い』に、1959 年 9 月講談社刊＜現代長編小説全集＞39『武田泰淳集・椎名麟三集』に、1960 年 4 月筑摩書房刊＜新選現代日本文学全集＞27『武田泰淳集』に、1971 年 10 月筑摩書房刊『武田泰淳全集』第 1 巻に、1974 年 4 月新潮社刊『武田泰淳中国小説集』第 4 巻に、1978 年 1 月筑摩書房刊『武田泰淳全集増補版』第 1 巻に収録された。
[11] 青野季吉・佐藤春夫・中村光夫、『群像』7（3）「創作合評」（58 回）、1952 年、173 頁
[12] 同上、174 頁
[13] 同上、174 頁
[14] 同上、174 頁

ぎはしないか」[15]と手きびしく批評し、「東洋人の捨身のニヒリズムというものね、決して頽廃的でなく生気横溢して刹那的な生き方が虚無的な」[16]と、非常に強く生きて行こうとする東洋人のニヒリズムを説明し、中村光夫は、「武田君の意図としては、(中略) シュタインの旅行記に対して東洋人としての武田君が持つ一種のアイロニイ、それがこの作品のテーマになったのだろう」[17]と、西洋または西洋流の学問に対する反撥のような東洋人のアイロニイを指摘した。また、『新選現代日本文学全集 27　武田泰淳集』(1960) の「解説」において、佐伯彰一は、井上靖氏の西域物と比べ合わせながら、「『流沙』では、人間の野心や欲情や懸念を素っ気なく無視し黙殺して、ただそこにある砂漠の実在感が、はっきり浮かび上ってくる。中国人の蒋が、いろいろと現実家らしい才覚や観察眼を動かせれば動かすだけ、素っ気ない砂漠という空間が、よけいに動かしがたいものに見えてくる。」[18]と本小説での堅固な空間感覚を指摘した。

ただし、研究史の中では、「東洋的なもの」、「ニヒリズム」、「アイロニイ」、「空間」といった大まかな論点が指摘されるに留まり、作品と典拠との比較を精緻に行っていない。小説の文末に「Aurel Stein “Ruins of Desert Cathay[19]” 及び “Serindia” による所多し。蒋及びシンは実在の人物なるも、作者が自由にその性格と運命を、換骨奪胎したるもの也」[20]という武田が書き加えた注記があり、作品の原拠に関する情報が知られる。武田はかつて度々スタインの著作に対しての関心を表した。例えば、筑摩書房より刊行の短編集『愛と誓い』(1953 年) のために書き添えたあとがきにおいて、武田は「Serindia を全

---

[15] 同上、173 頁
[16] 同上、174 頁
[17] 同上、174 頁
[18] 佐伯彰一『新選現代日本文学全集 27　武田泰淳集』の「解説」、筑摩書房、1960 年、421 頁
[19] Marc Aurel Stein, Ruins of Desert Cathay : Personal Narrative of Explorations in Central Asia and Westernmost China, London: Macmillan&Co. Ltd. 1912. (Reprinted 1987, New York: Dover Publications Inc.) (訳名 :『中国砂漠地帯の遺跡:中央アジアと中国西部の探検における個人的な報告』)。スタインの第 2 回中央アジア探検 (1906-08) の成果を、一般向けに解説した旅行記。全 2 冊から成る。第 1 巻 : インドからの出発からカシュガル・コータンの調査、ニヤ・エンデレの踏査、チェルチェン・チャルクリクの遺跡概要、さらにロプノールでの発掘、ミーランの発掘成果、敦煌調査への出発までを含む。第 2 巻 : 敦煌の千仏洞調査始まり、漢代長城の調査、漢代遺物の発見、さらに敦煌文書の発見について述べる。ついで瓜州から河西回廊の調査を概観し、天山南路のハミ・トルファン・カラシャール・クチャ・アクス・ヤルカンドを経てコータンの調査、さらにチベットを経てインドに帰還するまでを含む。本書に対応する本格的な調査報告書は、Serindia (全 5 巻) である。
[20] 武田泰淳「流沙」(1952)『武田泰淳全集増補版』第 1 巻、筑摩書房、1979 年、338 頁

訳したいと思いたったほど、西域熱にとりつかれた時期があった。（中略）小説書きになろうなどとは夢想もしなかった頃、「流沙」の第一稿を書いた。（中略）戦後、無理にすすめられて、初稿を全部書き改めて発表した。」[21]と明言している。雑誌「週刊言論」の連載コラム「私の自慢の本」欄に寄稿したエッセイ「私の自慢の本『セリンディア』」[22]（1968年）において、武田は「砂漠、山脈、未開民族の現状、埋め忘れられた歴史を学者風に語ることが、案外、現実世界へ突入する意欲と直結している点も、おもしろい。これからタネをもらって、私は短篇「流沙」を書いた。」[23]と述べている。

以上の引用部分から見れば、武田が何度も強調していることは、「流沙」が自慢の『セリンディア』などを原拠として描かれた作品であると言えるのであろう。そうであれば、この小説を研究する際に、武田の示した原拠を調べて、原拠のいかなる部分をどのように作者が利用しているかなどを分析すればよいと思われる。ところが、今までの武田の研究者は、この研究のアプローチをまだ行っていない。

以上を踏まえて、本論は、かつて敦煌学者を目指していた武田が、如何にして典拠を利用して小説「流沙」を描いたのかを詳らかにし、武田泰淳の言う「換骨奪胎」の方法（典拠の利用法）を分析し、小説における武田の独創性を明らかにしたい。

二、典拠の追考と武田の英語力

「流沙」と典拠を比較する際に、前提として以下の二つの問題を整理しておく必要があると思われる。

１、「流沙」の典拠は、小説の追記に「Aurel Stein “Ruins of Desert Cathay ”及び“Serindia ”による所多し」という叙述からうかがえるが、「流沙」はこの二つの文献の

[21] 武田泰淳「『愛と誓い』あとがき」（1953）『武田泰淳全集増補版』第 12 巻、筑摩書房、1979 年、300 頁

[22] 「私の自慢の本『セリンディア』」：初出誌における原題は、「短編『流沙』の源流―『セリンディア』―」であるが、全集に収めるにあたって上記のように改めた。

[23] 武田泰淳「私の自慢の本『セリンディア』」（1968）『武田泰淳全集増補版』第 16 巻、筑摩書房、1979 年、240 頁

みから素材を取り入れたとは言い難いので、他の参考文献があるのか、という点は優先して検討しなければならない。筆者の調査した範囲で、Ruins of Desert Cathay（以下 Ruins と略す）、Serindia 以外の、武田が読んだ可能性のある、スタインに関する文献を以下の A～D に記載し、スタインにかかわりがない文献を F に書き記す。

A、『中央アジア踏査記（アジア内陸叢刊）』（Marc Aurel Stein 著 ； 風間太郎訳、生活社、1939.12）

B、Innermost Asia: Detailed Report of Explorations in Central Asia, Kansu and Eastern Iran（Marc Aurel Stein 、Oxford: Clarendon Press、1928）

C、『斯坦因西域考古記』（Marc Aurel Stein 著；向達訳、中華書局、1936.9）

D、①The Thousand Buddhas: Ancient Buddhist paintings from the Cave-temples on the Western Frontier of China （Marc Aurel Stein、London: Messrs. B. Quaritch、1921）

②Memoir on maps of Chinese Turkestan and Kansu from the Surveys Made during Sir Aurel Stein’s Explorations, 1900-1, 1906-8, 1913-15 (with appendices by Major K. Mason and J. de Graaff Hunter) （Marc Aurel Stein、Dehra Dun: Trigonometrical Survey Office、1923）

③Ancient Khotan: Detailed Report of Archaeological Explorations in Chinese Turkestan（Marc Aurel Stein、Oxford: Clarendon Press、1907）

④Kalhaṇa’s Rājataraṅgiṇī: A Chronicle of the Kings of Kaśmīr, Translated, with an Introduction, Commentary, & Appendices（Marc Aurel Stein、London: A.Constable & Co.Ltd.、1900、2 vols）

F、『回教概論』（大川周明、慶応書房、1942）

続いて詳細をみていきたい。A について、日本近代文学館に所蔵されている「武田泰淳コレクション」の中の未発表の「草稿　流沙」（資料番号　T0056446）において、武田は「Ｓ博士の講義集が日本で翻譯されてゐるが、その中にもチャンと、蒋四爺が出場してゐる」と述べている。「Ｓ博士の講義集」というのは、スタインがハーバード大学での講義

をもとに上梓した、全 3 回にわたる中央アジア探検の成果を一般向けにわかりやすく解説した旅行記 On ancient Central Asian tracks: Brief Narrative of three Expeditions in Innermost Asia and North－western China, (edited and introduced by Jeannette Mirsky) (London：Macmillan、1933) のことである。A はこの著作の日本語訳である。「流沙」の主人公蒋は A の中の「蒋四爺」とは同一人物なので、「流沙」と A との関連性が高いと言えるであろう。

Ｂについて、武田は「私の自慢の本『セリンディア』」において、『インナーモースト・エイシア』(Innermost Asia) の構成などに言及した。Ｂはスタインによる第 3 回中央アジア探検（1913～16 年）の調査報告書であるが、「流沙」は第 2 回中央アジア探検のことを描いた小説である。ゆえに、Ｂが典拠として用いられた可能性はほんのわずかであると言えよう。

C について、武田の仲間である増田渉は、自分の蔵書を整理した際にスタインの『西域考古記』(向達訳) という本などが出てきて、「これらは確か三十数年前、何かの必要から泰淳氏の書斎で見て、借りてきたものだと思い出したが、およそこのような書籍、雑誌にも当時の泰淳氏の研究的（？）態度の一端がしのばれるというものだ」[24] と述べている。この発言からみれば、武田は『西域考古記』を読んだ可能性があると思われる。C は先述の On ancient Central Asian tracks の中国語訳である。C にも蒋のことが記述されているが、「流沙」と比較したところ、『西域考古記』(向達訳) は小説の内容と必然的な関係を持っていると認め難いので、典拠資料から除外する。

D①～④について、「武田泰淳コレクション」の中の未発表の「Innermost Asia」(資料番号　T0056709) に「Stein books」を小見出しとしてのメモがあり、このメモにおいて、武田は Ruins、Serindia 以外 D①～④を挙げている。D①はスタインが第 2 回中央アジア探検において収集した仏画を収めた大型図録であるが、「流沙」には仏画についての描写がないので、両者は相関がないと言ってもよい。D②はスタインの第 3 回中央アジア探検

[24] 増田渉「武田泰淳氏との交友記（上)」(1971 年 8 月)『武田泰淳全集増補版』第 4 巻付録月報 3、1978 年、7 頁

の報告書である Innermost Asia に収められた大型地図の作成に関する覚書である。D③はスタインの第 1 回中央アジア探検（1900～01）の調査結果をまとめた報告書である。D④は「彼（スタイン、引用者注）が三十七歳（一九〇〇年）の時に出版した有名な『カシミール王統年代記』」[25]である。「スタイン卿を梵語博士と云わしめたのは」この「労作のあることからと思われる」[26]。ゆえに、D①～④は何れも小説とは無関係な著作であると言えるであろう。

F について、武田は、評論「宗教は統一できるか」（1966）において、戦争中回教を研究する日本の学者たちが「日本帝国の政策として、アラビア、アフリカに進出する必要のため、調査員、研究員としてはたらいたのだった。」[27]と言及し、「東京裁判に出廷し、A 級戦犯に指名されて、のちに発狂した大川周明氏にも『回教概論』という著書がある」[28]と述べている。筆者の確認により、この『回教概論』のある部分の記述は小説の登場人物シンの描写と類似しているため、ひとまず典拠資料として認める。

以上を踏まえて、小説「流沙」の追記に記されている Serindia、Ruins 以外、A『中央アジア踏査記（アジア内陸叢刊）』も F『回教概論』も典拠資料として認めたほうが妥当だと思われる。ただし、A における漢代長城の調査や敦煌文書の発見など第 2 回中央アジア探検に関する多くの記述が Ruins、Serindia と重なっているので、比較作業の重複を避けるために、第二節の論述は、典拠としての Ruins、Serindia、『回教概論』を使用する。

２、「流沙」が Ruins などを原拠として描かれた小説であると武田が言い切るものの、CiNii および国立国会図書館のホームページで検索すると、日本語訳の Ruins、Serindia は見当たらない（2022 年 12 月 30 日閲覧）。ゆえに、武田が実際に英語の著作物が読めるほどの語学力を身につけていたのかどうかについては、考察しなければならない。インタビュー「作家に聴く・武田泰淳」（1952）において、武田は「中学は、やはり本郷の京北

[25] J.ミルスキー著 ; 杉山二郎［ほか］訳『考古学探検家スタイン伝』下巻、六興出版、1984 年、364 頁
[26] 同上
[27] 武田泰淳「宗教は統一できるか」（1966）『武田泰淳全集増補版』第 18 巻、筑摩書房、1979 年、278 頁
[28] 同上

中学という、不良の多い私立中学だった。みんなが出来ないので、僕は、その中ではよく出来て、ことに英語が一番好きだった。英文学をやろうなどと、真面目に考えていた頃もある」[29]と述べている。評論「文学を志す人々へ」（1962）において、武田は「中学に入ってからは、国語ではなくて、英語の成績が良かったので、英文学でも勉強しようかと、漠然と考えていた。」[30]と記述している。エッセー「文学と私」（1975）において、武田は「そのころ（中学校時代、引用者注）、英語はお経みたいなふうで、得意だったので一時は英文学者になろうかということを考えたこともあります。」[31]と述べている。以上の引用文のように、全集の中で武田は自分が英語に秀で、一頃英文学研究者になりたかったことに再三言及している。ゆえに、武田が英語文献が読める程度の英語力を身につけていたと言えよう。武田は中学に入っておよそ二年、父に英語と漢文を夕食後みっちり勉強させられていた。「講義はきわめて丁寧で、聴いていると学力が増進して行くのが、少年にもよくわかった。漢文は十八史略、英語はリーダーの予習。父子ともにその二時間、他の家族には秘密の楽しさを味わった。」[32]とあるように、武田が英語が得意になれたのは、父の熱心な指導が関係していると思われる。また、中国文学を専攻した者としての謙遜や自虐的な意味を含んでいるのであろうか、武田は「草稿　流沙」（資料番号　T0056446）において「英語の本など、ほとんど讀んだことのない私は、犬が星でもみるやうに、呆然と大きなページをめくった」及び「無頼漢が街を歩くやうに私は、品の無い、あばずれた讀み方で、讀むと言ふより、わかる字だけ拾ふやうにして、少しづつ讀んでゐた」と書き記している。この発言により、武田がそれほどすらすらと英語の著作を読むことはできていなかったことが見られるが、中学に入った後父と共に勉強に勤しみ英語に長けていたことは、武田が様々な視点で典拠に基づいた「流沙」を書くことができた大きな要因になったと考えられる。

[29] 武田泰淳「作家に聴く・武田泰淳」（1952）『武田泰淳全集増補版』第 18 巻補遺、筑摩書房、1979 年、3 頁
[30] 武田泰淳「文学を志す人々へ」（1962）『武田泰淳全集増補版』第 15 巻、筑摩書房、1979 年、207 頁
[31] 武田泰淳「文学と私」（1975）『武田泰淳全集増補版』第 18 巻、筑摩書房、1979 年、452 頁
[32] 武田泰淳「父子の情」（1952）『武田泰淳全集増補版』第 4 巻、筑摩書房、1978 年、63 頁

三、「流沙」と典拠との比較

以上のような認識の元、本節では典拠としての Ruins、Serindia、『回教概論』と「流沙」との比較を行う。全集に収録されている「流沙」は五つの節に分けられ、一節ごとに1行空けられている。検討の便宜のために、筆者が各節に、通し番号、見出し、頁数を記して比較を試みる。ただし、「草稿　流沙」（資料番号　T0056446）によれば、武田はスタインの著作を読んでいたところ、「数年にわたる沙漠の旅行をした」中国人「チャン・スウ・イエ」（蒋）という「面白い人物を発見した」。また、武田が「この男のことを書いて小説にしてやらうかしら。私はすぐ、そんな風に気を廻した。（中略）つまり私は砂の中から、一支那人人物を発掘せんとしてゐた。それはＳ博士にもまけぬ発掘であるかもしれぬ」と述べているように、蒋が「流沙」において最重要な役割を担うことがわかる。ゆえに、本節は武田が「換骨奪胎」した蒋やシンの人物像、また典拠との関係が特徴的である描写を中心に検討し、典拠と「流沙」の間に改変のないものについては言及を略したものもある。比較に際し「流沙」本文は『武田泰淳全集増補版』（1979）第１巻、典拠はすべて初版を用いる。なお作品及び典拠の本文引用は極力省略するが、参照の便を図ってそれぞれの頁数を記する。

１、敦煌の漢代土牆（長城）の調査（315～322 頁）

１）Ｓ博士と蒋とは発見した各木簡に書き記された「永平」、「建武」年号を相次いで確認した（315～316 頁）ことは主に Ruins（vol.2）第 54 章 50～53 頁に拠り、もしくは Serindia（vol.2）第 15 章第 3 節 593～594 頁に拠る。ただし、Ruins と「流沙」のどちらにおいても夜、テントで年号を発見した後の蒋の様子に触れている。Ruins では、「We both loudly rejoiced at this discovery, which put us at once on safe chronological ground for further researches.（拙訳：年号を発見して我々二人は大声で喜んだ。この発見は直ちに、一層の研究のための確かな年代順の根拠になった）」とされている。それに対して、「流沙」においては、「『ホウ』蒋はあくびを噛みころしながら、おだやかに微笑をひろげる。『建武でしたか。武の字がどうも古い形なもんで、読めなかったんですけ

ど』旅行者らしくない落ち着いた返事であった。踏査用テントでする会話とはみえず、官衙の事務室で上役と書類の文章を相談する口調であった」と記されている。蒋がただ自分の担当する仕事を完成するために木簡の年号を考察し、実際には学問に関心を持っていなかったことを強調するためか、武田は小説において、蒋が官衙の上役と「書類の文章を相談する口調で」悠々と返事したという設定に変更している。

２）小説では、「故郷湖南省を出てから十余年」、「辺疆を漂泊しつくした」蒋は、「妻子を養い家を構え」るといった困難にぶつかった。「人事に対する表面上の無関心と、利害に関する細心の注意。この二つが小役人蒋の沙原の底深く隠匿されていた。故郷へ帰るためには金を貯えねばならぬ。金を貯めるには利益に対する注意の集中、利益にならぬ事には全くの無関心。」（317 頁）とされている。典拠として見なしてもよい Ruins（vol.２）第 75 章 275 頁において、「Fully three months' journey still separated Chiang from his Hu-nan home, where he had then left behind his wife and newly-born son; and with years still needed to raise his savings to the standard fixed for retirement, he had resolutely put aside all idea of returning to them until the period of exile had come to its appointed end.（拙訳：まる三か月の旅で、蒋は妻、新しく生まれた子供を残して、ふるさと湖南省を遠く離れた。退職後必要なお金を貯めるのに何年も必要だったために、かれはその漂泊の期間が終わるまで、家族のもとに戻るのを諦めた）」とある。小説、典拠のどちらにおいてもお金を貯めるという動機についての記述がある。ただし、蒋の自分の利得につながるかどうかという観点から物事をとらえる現実主義の生き方を強調するためか、武田は「流沙」において「利益にならぬ事には全くの無関心」のような、原拠に存在しない表現を付け加えた。

３）蒋の服装と体面（317～318 頁）は Ruins（vol.1）第 12 章 143～144 頁に拠り、作中服装については Ruins の記述と、服の色や服の種類等の細部の描写も一致している。

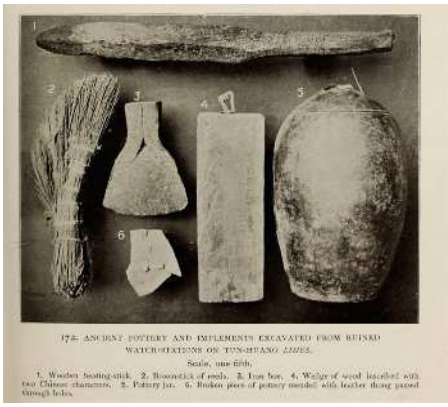
４）蒋の学問への興味（318 頁）について、作中では、蒋は辺疆小役人より博士の秘書のほうが金になり気が楽であるという「現実的な思案」から、博士の秘書になり、「博士の指示に従って態度はいちいち忠実であるが、考古学的な夢など、みじんも持ち合わせが

ない。年号の文字、記録の内容、それは秘書としての彼の価値をたかめ、傭主の欲望を満足させるに役立つ物件に過ぎない」と描写されている。それに対して、典拠の中では蒋は好学の人として記述されている。例えば、スタインは探検隊に参加したばかりの蒋を以下のように評価した。「Very soon, with the true historical sense innate in every educated Chinese, he took to archaeological work like a young duck to the water. With all his scholarly interest in matters of a dead past, he proved to have a keen eye also for things and people of this world,（後略）（拙訳：教育を受けたあらゆる中国人に生まれ付き備わっている真の歴史的な感覚で、彼（蒋、訳者注）は考古学の仕事にすぐに慣れた。過去の物事に学術的な関心を寄せていた彼は、この世界の物や人にも鋭い目を持ち、(後略)）」[33]下線部の内容を読み比べてすぐわかるように、典拠における学問を好む蒋の人物像と異なって、「流沙」において、学問に興味を全く持たず、ただ現実の利益を重要視し、博士の欲望を満足させるために考古の仕事を進めていたという「現実主義者」である蒋の人物像が描き出されている。

５）漢代遺物の発見（318～320 頁）について、詳しく言えば、革紐で破片を繋ぎ合わせた土器を発見した（318～319 頁）ことは Ruins（vol.2）第 58 章 96 頁に拠る。ただし、この土器は水が漏るようになってから穀物でも入れるのに使ったらしいという蒋の推測は、典拠に該当する記述がないので、武田が蒋の口を借りて述べた個人的な判断であると言ってよい。漢代の隊長か長官の許可証として使われた木片を発見した（319 頁）ことは Ruins（vol.2）第 58 章 94～95 頁に拠り、木片についての描写（「真黒」「末端に紐がついてる」など）がほぼ一致している。漢代の地下牢である井戸のそばで罪人を殴る棒を発見した（319～320 頁）ことは Ruins（vol.2）第 60 章 119～120 頁に拠り、あるいは Serindia（vol.2）第 19 章第 1 節 686 頁に拠る。注意すべきなのは、先述の土器、木片、棒についての典拠は異なる章にあるが、土器、木片、棒はそれぞれ以下の Ruins（vol.2）第 58 章 96 頁と 97 頁の間に掲載されている写真の中の６、４、１に該当する点である。ゆえに、

[33] Mark Aurel Stein, Ruins of Desert Cathay : Personal Narrative of Explorations in Central Asia and Westernmost China (vol.1), London: Macmillan&Co. Ltd. 1912. 117page

写真によって小説の本節の構成をすることができた可能性があると思われる。



（写真出所：Ruins of Desert Cathay（vol.2）第 58 章 96 頁と 97 頁の間）

６）亭長、司馬、千人、都尉、長吏、太守という地方役人の官職名（321 頁）は Serindia（vol.2）第 20 章第 5 節 745～748 頁に拠る。専門の歴史的知識は本格的な調査報告書 Serindia に拠ると言えるであろう。阿片を呑んで睡りこけて出発に遅れて三日ばかり行方不明になっていた二人の中国人苦力は帰った後にＳ博士に叱られた（321～322 頁）ことは Ruins（vol.2）第 60 章 118～119 頁に拠る。ただし、Ｓ博士の叱責や蒋の慰めの言葉などは付加されたものである。

２、Ｓ博士達が敦煌の城内に入り、寡婦やシンが登場（322～327 頁）

１）寡婦が棲息する敦煌の城内の家屋に泊まった（322～323 頁）ことは Ruins（vol.2）第 51 章 9～12 頁に拠る。ただし、Ｓ博士達と同行した、「熱烈な回教徒」であるナイク・ラム・シンは、蒋との間には「やや冷たい空気が流れ」、蒋が寡婦とデートする場所の近くで夕べの祈りをささげた（323～324 頁）ことは虚構である。また、シンの身分に関しては小説、Ruins のどちらにおいても「印度の工兵」とされているが、シンの宗教に関しては異なっている。Ruins（vol.1）第 7 章 65 頁において、「I knew well that hard-and-fast caste rules would allow neither Surveyor Ram Singh, the Hinduized Gurkha, nor Naik Ram Singh, the Sikh, to partake of impure Mlecchas' dishes.（拙訳：私（スタイン、引用者注）は、厳しいカーストのルールにより、測量技師であるラム・シン（ヒンドゥー教徒のグルカ人）とナイク・ラム・シン（シク教徒）が不純な異教徒の食物を食べることを許すわけにはいかないということをよく知っていた）」という記述のよう

に、ナイク・ラム・シンがシク教徒とされている[34]。Ruins（vol.2）の巻末付録の索引 510 頁のシンに関する項目において、「refusal to eat Muhammadan dishes（拙訳：回教徒の食物を食べるのを断わる）」とされており、前述の「異教徒」が「回教徒」を指すことがわかる。以上を踏まえて、Ruins において、シンが回教徒ではなく、シク教徒であると言ってもいいのであろう。

ところが、「流沙」では、小説の緊張感を高めるためか、武田はシンをシク教徒から「熱烈な回教徒」に変更し、シンと信仰が「今でも模糊としていた」蒋、この二人の対立と和合を描写している。また、「流沙」において、シンが清めのために「白い砂を腕にこすりつけ」てコーラン経の一節を誦した（323～324 頁）という回教徒の祈り方についての描写は、Serindia、Ruins には存在しない。前述のＦ『回教概論』の第六章「回教の儀礼」第一節「清浄」では、「また次の如き場合には、砂を以て水の代える砂浄 Tayammum が許される。（中略）砂浄は双手を以て砂を打ち、顔面を撫でること一回、手甲を撫でること三回するのである。」[35]と砂浄について解説している。したがって、シンが儀礼を行う前の、「白い砂を腕にこすりつけ」る砂浄という設定は、武田が『回教概論』から何らかの影響を受け、肉付けを施し創作したものであると考えてもいいのであろう。ただし、「流沙」で描写された回教徒シンの祈りの仕方と、実際の回教徒の祈り方には何か相違点（例えば、信仰の告白）があるためか、小説が初発表された後、武田は「回教研究者の意見によると、回教徒はこのような祈りはやらないそうである」[36]と述べている。

辺疆の回教徒は寺院廟堂を破壊し、村々を焼きはらい、女子供を殺戮した（324 頁）ことは Ruins（vol.2）第 53 章 40 頁に拠る。

２）博士達は月牙泉、鳴沙の丘に遠乗りに行った（325 頁）ことは Ruins（vol.2）第 64 章 160～161 頁に拠る。具体的に言えば、湖が宝石となって大地に填めこまれていた風景、

---

[34] ただし、保坂俊司は「シク教の思想―そのカースト制批判について―」（雑誌『東方』第 2 号、東方学院、1986）において、シク教のカースト制度否定について考察してきた。それに対して、『Ruins』では、シンがシク教徒なのに、カースト制度を認めていて、矛盾しているようである。
[35] 大川周明『回教概論』、慶応書房、1942 年、139～140 頁
[36] 武田泰淳「『愛と誓い』あとがき」（1953）『武田泰淳全集増補版』第 12 巻、筑摩書房、1979 年、300 頁

水が砂の膝の間に嬰児のように抱かれている様子、蒋が何度も斜面を滑り降りた（典拠において、蒋が砂丘の上にかけ登ったのみ）ことなどは、一部の創作を除き、細部の描写（例えば、町から湖までの距離（３哩）、砂丘の高さ（250 尺）、驢馬、湖の南岸の寺院など）まで典拠と対応している。

３）お祭りには一万人近くの人出があるため、博士の千仏洞調査の予定が延期された（325～326 頁）ことはRuins（vol.2）第64章の159頁、あるいはSerindia（vol.2）第21章第1節791頁に拠る。蒋が博士と就職について相談した（326～327 頁）ことは付加されたものである。作中では、「蒋は気を変え、旅行終了後の就職の相談にかかった。それは何度も腹をわって、博士に依頼してある。調査旅行中の動きぶりを報告してもらい、どこか立派な役所に勤め口を得ること。これが蒋の念願である。『大丈夫だよ、君、こんなところでまた言い出さなくても』博士は今更ながら、蒋の、高い位置に対する小役人らしいあこがれに驚かされた。新しい口約束で、彼は嬉しそうに下を向く」とされている。典拠において、博士が蒋に勤め口を提供することに関する記述は、例を挙げて説明する。

例１　Mr. Macartney, whose knowledge of everything Chinese is profound, and who can read human character in general with rare penetration, found Chiang both clever and straight, and thought he might do some day as a successor to the Agency Ssu-yeh. This hope would, of course, act as an inducement to my Chinese assistant and mentor to stick to me, and was therefore confidentially hinted at.[37]（拙訳：マカートニーは中国についての認識が深く、大体珍しい洞察力で人の性格を見抜くことができる。マカートニーは蒋が利口で率直で、いつかイギリス領事館の師爺の後継者になれる可能性があると思っている。従って、私（スタイン）はこの昇進の機会を蒋に内緒を条件にほのめかした。言うまでもなく、このチャンスは、助手であり顧問である中国人蒋が私に対しての忠

[37] Mark Aurel Stein, Ruins of desert Cathay : personal narrative of explorations in Central Asia and westernmost China (vol.1), London: Macmillan&Co. Ltd. 1912.116page

誠を尽くす気を起こさせるのである。)

例２　Honest Chiang-ssu-yeh, too, well deserved a special effort on my part. P'an Ta-jen's friendship was to be utilized in order to obtain for Chiang the chance of official employment he had vainly striven for ever since he first came to the New Dominion some twenty-five years before. So a detailed report on his former services and all he had done for me was drawn up for submission to the Fu-t'ai or Governor-General at Urumchi, nominally in my name and ending with a recommendation for the grant of official rank. I myself did not expect success from such a document from a mere 'outsider,' and a foreigner in addition.[38] (拙訳：誠実な蒋師爺も、私の特別な世話を受けるべきである。私は潘様との友情を利用して、蒋に官職を担当させるチャンスを探した。蒋は25年前新疆に入ったばかりの頃から官職を得るために努力していたが、なかなか実現できていない。それゆえ、私は蒋の以前の仕事ぶりやしてくれたことを詳しくレポートに書いて、ウルムチの地方長官に提出し、上級機関の推薦をもらいたかった。だが、局外者であり外国人である私の起草したレポートが認められるなんて望めなかった。)

典拠と小説のどちらにおいても蒋が高級役になりたがっていたことについての記述があるが、原拠においてはスタインが昇進の機会を蒋に内緒で伝え、積極的に蒋の官職を探そうとしていたとされているのに対して、「流沙」においては蒋が何度も就職のことを博士に依頼するという現実的な行為を行ったとされている。この変更により、小説において、蒋が博士の助けで将来高級役になりたいため、何度も博士に依頼するという昇進への渇望が強すぎる現実主義者の人物像が表現されている。

３、敦煌城の長官は宴会を開いた（327～331頁）

[38] Marc Aurel Stein, Ruins of Desert Cathay : Personal Narrative of Explorations in Central Asia and Westernmost China (vol.2), London: Macmillan&Co. Ltd. 1912.422-423page

１）宴会前に博士の撮った県官王大老爺の家族の写真に関する説明（327 頁）は、典拠には存在しないが、Ruins（vol.2）第 71 章の 238 頁と 239 頁との間に以下の写真が掲載されているので、武田がこの写真を見ながら想像力を働かせて王の家族の様子を描写したものであると言えるであろう。ただし、武田は王の家族がその後暴徒に襲撃されたらしいという悲惨な運命の暗示にするためか、作中では「その華やかな服装がかえって老母を衰えっぽく見せ、ひいては両側にひかえた夫婦をも、わびしい姿にした。（中略）田舎くさい、古色蒼然たる一家」と、その写真のものさびしく感じられる雰囲気を描写している。

（写真出所：Ruins of Desert Cathay（vol.2）第 71 章の 238 頁と 239 頁との間）

２）宴会中で話題になった、王の長男が日本へ留学したこと、林大人が言う新疆省の役所の仕事の良さ、税金の問題で敦煌の農民たちが不穏になり治安を維持する駐屯兵の兵力が不十分そうなこと（327～328 頁）はそれぞれ Ruins（vol.1）第 11 章 133 頁、Ruins（vol.2）第 53 章 36 頁、Ruins（vol.2）第 53 章 35～36 頁に拠る。ただし、武田は煩雑さを避けるためか、典拠における日本へ留学した「彭の息子」を登場させず、作品で「王の長男」に改めた。翌日Ｓ博士たちが城門へ向かう途中で、頼りなさそうな駐屯兵に会った（329 頁）ことは、小説の第 4 節で農民が暴動を起した時、駐屯兵が頼りなく治安を守れなかったことの伏線にするためか付加したものである。蒋が寡婦に再会していた際にシンが祈りを行った（333～334 頁）ことは付け加えられたものである。

３）蒋は道士の信用を得るために玄奘の崇拝者の振りをし、千仏洞に秘蔵された巻物や絵絹を持ち運んだ（330～331 頁）ことは Ruins（vol.2）第 64 章 159 頁～第 66 章 194 頁に拠り、あるいは Serindia（vol.2）第 21 章第 3 節 801 頁～第 22 章第 3 節 824 頁に拠

る。ただし、作品では、「仕事場の蒋は、仏教信者の振りもする。道士の信用を得るためである。偉大なる唐僧玄奘の崇拝者にもなった」とされているが、Ruins と Serindia のどちらにおいても、博士が道士に自分の玄奘に対する崇拝を述べ、蒋がそばで説明を補足したと記述されている。武田が博士の玄奘に対する崇拝を作品に採らず、蒋が玄奘の崇拝者の振りをしたと設定したのは、蒋が博士に認められることで勤め口を得たいが為に、「技倆」を示したことを強調するためかと思われる。

４、粛州の長官は宴会を開いた（331～334 頁）

１）敦煌を後にして嘉峪関を通過する時に、博士は蒋の様子をうかがった（331 頁）ことは Ruins（vol.2）第 75 章 275 頁に拠る。

２）博士達は護衛兵の付き添いで粛州へ近づき、城内へ入ると酒泉を見物した（332 頁）ことは Ruins（vol.2）第 76 章 285～286 頁に拠る。護衛兵の様子（軍旗、麦藁帽、馬上銃）、酒泉の景色（苔と孔雀草）などの描写は典拠とほぼ一致している。

３）粛州での宴会の最中、敦煌の百姓共が暴動を起こしたという電報が到着したが、粛州の長官達が軍隊を出動させなかったので、敦煌の県官王一族は悲惨な運命に遭った（332～334 頁）ことは Ruins（vol.2）第 76 章 288～294 頁に拠る。ただし、典拠において、電報は宴会の際ではなく、博士達が粛州に滞在した最後の何日かに到着した。煩雑さを避けるためか、武田は宴会の際に電報が到着したと設定している。蒋のような辺疆の役人の悲惨の運命を強調するためか、蒋は敦煌の県官王一族の悲惨な運命が小役人たる自分の運命を暗示すると思っていて絶望に打ち砕かれた（334 頁）ことを付加した。

５、蒋は和闐でＳ博士達と別れ、カシュガルの英国領事館に赴任（334～338 頁）

１）甘州を経て、それから一年間西へ向けて旅を続けた（334 頁）ことは、武田が小説の煩瑣さを避けるためかＳ博士達の旅の経歴をまとめたものである。蒋は和闐でＳ博士達と別れ、博士の助けでカシュガルの英国領事館での仕事をもらった（334～335 頁）ことは Ruins（vol.2）第 91 章 438～439 頁に拠り、あるいは Serindia（vol.3）第 33 章第 1 節 1320 頁に拠る。ただし、別れた時に、シンは林隊長とねんごろになった寡婦が殺されたことを蒋に伝えた（335 頁）ことは付け加えられたものである。

2）蒋の入ったカシュガルの町はずれに存在するポプラ・穀物・回教寺院などの風景、驢馬や小馬に騎乗した村民・着飾った女達・泳ぎ騒いでいた子供たちなどの姿（335 頁）は Ruins（vol.1）第 10 章 121～122 頁に拠る。風景・人物などの描写はほぼ一致している。

3）蒋は領事から金時計をわたされた（336 頁）ことは Ruins（vol.２）第 97 章 490 頁に拠り、あるいは Serindia（vol.3）第 33 章第 3 節 1327 頁に拠る。蒋は領事からシンが盲目になったがメッカへ巡礼に発ったことを聞いた（336 頁）ことは虚構である。典拠によれば、シンは盲目になってから、メッカへ巡礼をせず、印度に送られて 1909 年に死んだ。前述の『回教概論』の第六章「回教の礼儀」第五節「参詣」において、「一切の回教徒は、男女を問わず成年に達し、自由の身分であり、精神は健全、而も健康之を許し、十分なる旅費を有し、其上留守中の家族を扶養し得る資力あるならば、生涯に一度メッカに参詣する義務がある」[39]とあり、武田はこの記述を参照して、盲目になったシンがメッカへ巡礼したと設定している可能性があると言えよう。

４）作品の結末の神父Ｈの葬儀（336 頁～338 頁）は Ruins（vol.1）第 10 章 122～125 頁に拠り描かれている。Ruins では、「The body rested alone in the locked-up house, but the grizzly-haired Chinese shoemaker, the solitary convert whom the old priest claimed, had faithfully kept watch on the house-top（拙訳：遺体は施錠された家の中で寂しく安置されていたが､灰色の髪の中国の靴職人(神父に帰依した唯一の人)は、忠実に屋根の上で見張りを続けていた)」(Ruins（vol.1）第 10 章 124 頁）と記されているように、中国人信徒が典拠に登場している。ただし、作中の、蒋が神父Ｈの葬儀に参加した後、「教会」で神父Ｈに帰依する中国人信徒と交流したことは付加されているものである。

[39] 大川周明『回教概論』、慶応書房、1942、167～168 頁

四、典拠の利用法と小説の独創性

（一）典拠の利用法

第三節では具体的に小説と典拠との比較を検討してきた。本節ではそれを踏まえつつ、典拠の利用方法をまとめてみたい。おおよそ次のことが言えるであろう。

１，節ごとで腑分けすると、小説の第一節は主に Ruins（vol.2）第 54 章（あるいは Serindia（vol.2）第 15 章第 3 節）、Ruins（vol.1）第 12 章、Ruins（vol.2）第 58 章、Ruins（vol.2）第 60 章（あるいは Serindia（vol.2）第 19 章第 1 節）、Serindia（vol.2）第 20 章第 5 節、Ruins（vol.2）第 60 章に拠る。第二節は主に Ruins（vol.2）第 51 章、『回教概論』の第六章「回教の儀礼」第一節、Ruins（vol.2）第 53 章、Ruins（vol.2）第 64 章、Serindia（vol.2）第 21 章第 1 節に拠る。第三節は主に Ruins（vol.2）第 71 章、Ruins（vol.1）第 11 章、Ruins（vol.2）第 53 章、Ruins（vol.2）第 64 章～第 66 章（あるいは Serindia（vol.2）第 21 章～第 22 章）に拠る。第四節は主に Ruins（vol.2）第 75 章、Ruins（vol.2）第 76 章、第五節は主に Ruins（vol.2）第 91 章（あるいは Serindia（vol.3）第 33 章第 1 節）、Ruins（vol.２）第 97 章（あるいは Serindia（vol.3））、『回教概論』の第六章「回教の礼儀」第五節、Ruins（vol.1）第 10 章に拠る。

下線部で示されているように、作品構成は一部を除き、大体典拠としての Ruins、Serindia、『回教概論』の構成順にしたがっていると言えるであろう。典拠の構成順と異なる小説の描写の中で特徴的なのは、典拠においてＳ博士達と別れた後の蒋の経歴について記述されておらず、小説の第五節においてＳ博士達と別れた後の蒋の経歴が典拠における別れる前の記載に基づいて描写されていることであると思われる。具体的に言えば、先述の二の５の３）において蒋がカシュガルに到着した時の風景・人物の描写、二の５の５）において蒋が神父Ｈの葬儀に参加したこと、という別れた後の蒋についての設定は、蒋が博士と別れる前のことが記述されている Ruins（vol.1）第 10 章を模倣しているものである。

2，全体からみれば、

１）「流沙」は大部分が典拠に基づいて形象されている。専門の歴史的知識は本格的な調査報告書 Serindia に拠る（二の１の６））が、逸話などは一般向けに解説した旅行記 Ruins の記述をもとに再構成されている。そして、正式かつ体系的な Serindia より、自然風景・面白いエピソードが豊富な Ruins のほうが多く小説に取り入れられる。

２）典拠の文字のみならず、写真もよく使われている。この点に関しては、二の１の５）の漢代遺物の写真と二の３の１）の県官王大老爺の家族の写真についての描写があげられる。「草稿　流沙」（資料番号　T0056446）において、武田が「『せるいんでぃや』は中央アジアの調査記録で、寫眞が三冊の原文の方にも多数入ってゐる。私は荒涼たる山岳や沙漠と、そこに残された瘠墟の寫眞が気に入って、寫眞を眺めながら、わが身も胡沙吹く中央アジアの曠野に立つ想いがした」と述べているように、写真も重要な素材であると判断してもよいと思われる。

（二）小説の独創性

武田はすでに小説の文末に「蒋及びシンは実在の人物なるも、作者が自由にその性格と運命を、換骨奪胎したるもの也」と明言していたが、ここでは、第三節で析出した変更の箇所を通して詳しく武田の独創性を示したい。人物ごとに分析すれば、武田の独創性は以下の登場人物像の変容にあると言えよう。

１）蒋は現実主義者に変貌されている。例を挙げて言えば、典拠における好学の蒋の人物像と異なり、小説において蒋は考古学的な夢などみじんも抱かず（前述の二の１の4））、木簡に書き記された年号を確認したという重大な発見に対しても落ち着いた気持ちを表した（二の１の１））。小説で蒋が何度も博士に高級役になれるよう依頼し、昇進への渇望が強すぎる蒋の人物像が描写されている（二の２の３））。典拠では博士が道士に自分の玄奘に対する崇拝を述べたとされているのに対し、小説では蒋が博士を満足させようとするために玄奘の崇拝者の振りをし千仏洞に秘蔵された巻物や絵絹を持ち運んだ（二の３の３））とされている。以上からみれば、蒋は現実の利益を重要視する「現実主義者」である人物像に変容されていると言えよう。

また、前述の二の１の２）で示したように、「流沙」において、蒋の気性を表し象徴となる「沙原」が取り込まれ、「誰が通ろうが砂の原の知ったことではない。人事に対する表面上の無関心と、利害に関する細心の注意。この二つが小役人蒋の沙原の底深く隠匿されていた。」[40]と記されており、「金を貯めるには利益に対する注意の集中、利益にならぬ事には全くの無関心」という「現実主義者」である蒋の人物像がより立体的に、重層的に造型されている。

２）シンは典拠においてはシク教徒であるが、小説においては「熱烈な回教徒」に変貌されている（二の２の１))。武田はかつて対談「東洋人の知性」において、「大川周明がはじめて日本では、回教研究をやったね。あれは賢かったと思う。この問題が解決できなければ、アジアといっても雲をつかむようなものだから。それ以後、回教については中断してしまっているけれど。」[41]と大川周明氏の回教研究上の業績を褒めたたえながら、アジアを捉えるために回教問題を解決する重要性を強調している。武田が、評論「宗教は統一できるか」（1966）において言及した大川周明氏の著作『回教概論』から何らかの影響を受け、『回教概論』に記述されている「砂浄」、「参詣」に関する解釈をもとにして、小説にシンが宗教的儀礼を行う前の砂浄（二の２の１)）や盲目後の巡礼（二の４の３)）などを行ったことを付加した可能性はある。『回教概論』の研究内容を小説化する作業は、武田が『回教概論』を含む複数の典拠から一部分を取り出し小説を組み合わせたことを証拠立てていると言えよう。

五、おわりに

1907 年のイギリスのスタインをはじめ、列強各国の探検隊が次々と敦煌を訪れた。敦煌文物の発見・流出に伴い、「敦煌学」、「西域熱」が誕生し、学界の関心を集めてきた。

---

[40] 武田泰淳「流沙」（1952）『武田泰淳全集増補版』第 1 巻、筑摩書房、1979 年、317 頁
[41] 花田清輝・武田泰淳、「東洋人の知性」（対談、1965）『対話・歴史と文明』（潮新書 33)、潮出版社、1968 年、55 頁

仏教出身の武田も「敦煌の資料がたくさん発掘されたでしょう。（中略）そのころ敦煌学というのが最尖端だった。そこへ行けば、才能さえあれば新しく発見できる」[42]と考えていたので、長い間にわたって敦煌資料を耽読し、その分野に進出してみた。本論は武田と敦煌との関係を切口として、日本近代文学館に所蔵されている「武田泰淳コレクション」の中の未発表資料を参考にして、敦煌題材小説「流沙」の典拠資料を整理し武田の英語力を確認した上で、典拠と小説との比較を行い、「節ごと」、「全体」という二つの方面から武田泰淳の言う「換骨奪胎」の方法（典拠の利用法）を分析し、「人物ごと」に武田の独創性をまとめた。

Serindia、Ruins はどちらもスタインが自分自身を叙述者として(一人称の語り)、第 2 回中央アジア探検に関する事柄を伝える著作である。「私の自慢の本『セリンディア』」において、「スタインの大旅行と発掘は、大胆なる壮挙であった」[43]と述べているように、武田泰淳はスタインの発掘調査に心を惹かれていた。その一方で、典拠に基づいて描かれた「流沙」において、武田はその素晴らしさを一面的に表現しておらず、蒋を主人公に変更しシンをシク教徒から回教徒に改変し、「換骨奪胎」された「現実主義者」である中国人蒋と「熱烈な回教徒」印度人シンを三人称の語りで大いに描き、アジアを立脚点として西洋人スタインの探検調査を取り扱った。よって、先行論の青野季吉が指摘した武田が「何か東洋的なものを描きたかったのだろう」という推測ははっきりと証明できると言えよう。武田の言う「換骨奪胎」の方法を検討することによって導き出される結論は青野季吉の理解の範囲を出ないが、武田文学における唯一の敦煌題材小説「流沙」の典拠追考と典拠利用法を明らかにすることで、かつて長期間にわたって西域熱にとりつかれた敦煌学者像、Ruins や『回教概論』など複数の典拠から中国人や回教徒に関する部分を取り出し小説を組み合わせたというアジアを意識していた小説家像、といった端倪すべからざる武田の全

---

[42] 武田泰淳・寺田透、「武田文学と仏教」（対談、1967）『日本の文学 67　武田泰淳』付録、中央公論社、1973 年、1 頁

[43] 武田泰淳「私の自慢の本『セリンディア』」（1968）『武田泰淳全集増補版』第 16 巻、筑摩書房、1979 年、240 頁

体像の側面を明確に照らし出すことになるのであろう。

第四章　武田泰淳「王者と異族の美姫たち」論―草稿類資料を手がかりに―

一、問題提起

1934 年の初めごろ、中国文学研究会が発足し、「君達は眼先の文化、現代の末梢だけに気をとられ、支那思想の本流を棄てている」[1]という忠告に対して、同人たち（竹内好、武田泰淳、岡崎俊夫ら）は「今にいつか、支那古典について、自分の考えをのべることにしよう、とその頃から腹の中では誓い合っていた。」[2]と「司馬遷」（1943）に記載されている。1937 年、輜重補充兵として戦場に派遣されてから、武田は中国の古典『史記』について考え始めた。「（前略）現実のきびしさを考える場合に、何かよりどころとなり得るものが、『史記』にはある、と思われた」[3]と述べていることが「司馬遷」（1943）から知られる。武田は、1943 年書き下ろした評論『司馬遷』を東洋思想叢書の一冊として発表し、その後、小説「女帝遺書」[4]（1949）と小説「王者と異族の美姫たち」[5]（1967）という『史記』に関する作品を相次いで発表した。1967 年雑誌「別冊文芸春秋」に発表された「異族の美姫たち」（講談社版の創作集に収録する際、「王者と異族の美姫たち」に改められた）は、武田が『史記』などから素材を得て、中国春秋時代、晋献公の妃の驪姫が太子申生を陥れ、公子重耳と公子夷吾を亡命させ、自分の子を即位させたが、最終的に重耳が晋文公になることを描いた。

---

[1] 武田泰淳「司馬遷」（1943）『武田泰淳全集増補版』第 11 巻、筑摩書房、1978 年、3 頁
[2] 武田泰淳「司馬遷」（1943）『武田泰淳全集増補版』第 11 巻、筑摩書房、1978 年、4 頁
[3] 武田泰淳「司馬遷」（1943）『武田泰淳全集増補版』第 11 巻、筑摩書房、1978 年、4 頁
[4]「女帝遺書」は旧名を「呂大后遺書」といい、雑誌掲載にあたって加筆修訂が施された。石﨑等の論文「『廬州風景』の成立」（日本近代文学館編『日本近代文学館年誌:資料探索』(2)、2006）において、「『呂大后遺書』はのち手がける『司馬遷』の本紀を論じた末章『おそろしき女』と交響している」と述べ、「女帝遺書」と『司馬遷』との関係を指摘した。
[5] 「王者と異族の美姫たち」は 1967 年 12 月発行の雑誌「別冊文芸春秋」（第 102 号）に発表され、のち 1968 年、講談社より発行の創作集『わが子キリスト』に収録された。その後、講談社文庫の『わが子キリスト』（1971）にも、筑摩書房刊の『武田泰淳全集』第 9 巻(1972)にも、新潮社より刊行の『武田泰淳中国小説集』（1974）第 5 巻にも、筑摩書房刊の『武田泰淳全集増補版』第 9 巻(1978 年)にも、講談社文芸文庫の『わが子キリスト』（2005）にも収められた。なお、初出誌における標題は「異族の美姫たち」であったが、講談社版の創作集に収録のさい、現行のように改められた。

本小説の創作意図について、武田泰淳は対談「戦争と中国と文学と」（竹内実・武田泰淳）（1974）において、以下のように述べている。

武田　僕が「才子佳人」を書いた時の気持は文化というもののはかなさ、才子佳人のはかなさを書こうとしたんです。だから戦後改稿して発表した時には、非常に古くさい、何を今さら古いことに執着を持って、と思われて、大変保守的なものにとられましたね。本人は荒々しい現実の中で文化の残っていく姿を、堀辰雄のような気持でなるべく静かに書いた。だからレジスタンスのつもりなんです。だけど一般の人にはそんなこと分からないし、分かりにくい小説と言われました。

竹内　時代の状況が違ってきたわけですね。

武田　ええ。だから同じことは「天命」を戦後改稿した「王者と異族の美姫たち」でも言われました。悠久なものがなぜほしかったかという気持が分からないと、なんで「左伝」なり「史記」に書かれていることが現代に必要なんだということになるわけです。僕の気持としては王者、徳の高い人というのはあると思うんですよ。それは存在する意味があるはずなんだ。特に異族の美姫というもの、胡姫と言って漢民族がほしがってよくさらってきたのですが、僕はそれにとても魅力を感じて好きなんだな。[6]

下線部の内容より、小説「王者と異族の美姫たち」は草稿「天命」をもとにして改稿されたものであることがうかがえる。また、「王者、徳の高い人」が「存在する意味があるはずなんだ」と強調したかった武田の「気持」がわかる。「悠久なもの」（中国古典）の「現代」的意義を追究したいという武田の「王者と異族の美姫たち」の改稿意図の一つが見られるのであろう。

「王者と異族の美姫たち」に関する先行研究のうち、杉浦明平は「独特のわらいとレアリテ―武田泰淳『わが子キリスト』―」（1969）において、「今の日本の作家で、中国的な

[6] 竹内実・武田泰淳「戦争と中国と文学と」（対談、1974）『武田泰淳全集増補版』別巻２、筑摩書房、1979 年、224 頁

おおらかさと同時にとりとめのない奔放さでわたしたちをとりこにするのは武田だけだから」[7]と好評すると同時に、「えらくあっさり終っちゃったというのが、わたしの落胆をまじえた感慨である」[8]と小説のものたりなさを嘆いた。兵藤正之助は『武田泰淳論―昭和史に閃鑠する作家』（1978）において、「（前略）といった主要人物の性格のホリを明らかにする会話が、全篇にあり、この小説を単なる筋書きだけの宮廷陰謀物語に墜さぬものとしているからである」[9]と登場人物の鮮明な性格を表す会話を高く評価した。井口時男は「武田泰淳の『世界』」（2005）において、「彼（重耳、引用者注）は、純粋たりえぬ自分自身の矛盾を自覚し、その矛盾に耐えているのだ。『ひかりごけ』の船長は、他の生命を食わなければ生きられない人間の条件を『我慢している』のだといった。重耳もまた、『我慢している』男である」[10]と重耳の我慢しつづける忍耐の思想を指摘している。

先行論において、あっさりした終わり方や優れた会話、主人公の我慢の思想など、様々な角度から小説が論じられてきた。ただし、一般の人に「わかりにくい」と言われた後、武田は対談（1974）で「王者、徳の高い人」が「存在する意味があるはずなんだ」と伝えたかった自身の「気持」を表したが、これまでの研究はそれに関連する論点に触れていない。また、「王者と異族の美姫たち」草稿の調査・研究は管見の限りではまだ行われていない。「王者と異族の美姫たち」の草稿に関しては、『武田泰淳全集増補版』に付けられた、古林尚氏執筆の「年譜」と「解題」に言及がないが、実際には、前述の対談「戦争と中国と文学と」（1974）において、「『天命』を戦後改稿した『王者と異族の美姫たち』」と述べたとおり、本小説は戦争下に書きためられていた旧稿に加筆訂正がほどこされたものである。この草稿を手掛かりにして、「王者と異族の美姫たち」という作品をさらに深く研究し、新たな評価を生み出す可能性が出ると思われる。

---

[7] 杉浦明平「独特のわらいとレアリテ―武田泰淳『わが子キリスト』―」（書評）、『群像』24(3)、1969、184 頁
[8] 杉浦明平「独特のわらいとレアリテ―武田泰淳『わが子キリスト』―」（書評）、『群像』24(3)、1969、185 頁
[9] 兵藤正之助『武田泰淳論―昭和史に閃鑠する作家』、東樹社、1978、258 頁
[10] 井口時男「武田泰淳の『世界』」（解説）『わが子キリスト』、講談社、2005、209～210 頁

本論は、日本近代文学館に所蔵されている「武田泰淳コレクション」における未発表の草稿類資料「原稿　天命」（資料番号　T0056535）などを考察対象として取り上げ、草稿と初出本文（初出本文は筑摩書房刊行の『武田泰淳全集増補版』第 1 巻（1978）に拠る）との異同を検討しテクストの生成過程を分析する。生成過程を踏まえ、改稿の時代背景から武田の「気持」を理解し、具体的に武田が「悠久なものがなぜほしかったか」、即ち本小説における「悠久のもの」の「現代」的意義を検討したい。

二、「王者と異族の美姫たち」関連草稿

日本近代文学館に所蔵されている武田泰淳コレクションは、2005 年と 2008 年に令嬢武田花氏から寄贈され、「司馬遷」「風媒花」など主要作品の原稿・草稿、写真などを含むものである。本論で取り上げるのは、武田泰淳コレクションのうち、小説「王者と異族の美姫たち」に関する草稿資料である。続いて本小説の関連草稿を確認してみたい（資料番号は文学館によって付されたもの）。

1、「原稿　天命」（資料番号　T0056535）

使用された原稿用紙は左右それぞれ縦 20 字横 10 行の升目がある四百字詰めのもの。欄外上中央に「頁」、右欄外上部に縦書きで「善為士者不武」、左欄外下部に縦書きで「田車既好」と印刷されており、計三十八枚ある。本文は黒ペンが使用される。この草稿はそのまま誰かに読まれることを想定するようで丁寧に書かれたものである。本草稿は戦時下に書きあげられているが、当時の社会情勢から、発表するあてもないままに保存されていた。本草稿と小説の初出本文の内容はかなりの部分が対応する。

2、「草稿　王者と異族の美姫たち」（資料番号　T0056786）

原稿用紙は縦 20 字横 10 行の升目がある二百字詰めのもの。欄外左上に（　）、欄外左下に 10×20 と印刷されており、計七枚ある。この草稿は字がぞんざいで、ページ番号がなく、草稿そのものを誰かに読んでもらうということが想定されていないようである。本

草稿に執筆日が明示されていないが、「『秦女』とは、一九六〇年代の世界にたとえれば、アメリカ女、ソ聯女にあたるのでしょう。」という記述があり、「王者と異族の美姫たち」が 1967 年に発表されているので、おそらく本草稿は 1960 年代に執筆されたものと推定される。また、欠落が多く、現存の部分について、『武田泰淳全集増補版』の初出本文と比較すると、以下の内容のみは初出本文とある程度の関連性がある（文中の〇は解読できない文字を示す）。

【引用１】申生にといえば、美と徳は、全くちがったものでありました。そして、〇は、美〇〇〇〇、徳をえらんだのです。〇〇、〇〇は〇、〇にとって、美のないところに、徳はなかったのでした。そして、徳と美が対立するものなら、美をえらぶのです。では、〇吾〇〇、〇は、美も徳も信じなかった。〇〇〇美も徳も、〇〇〇〇。黒い悪か〇〇

【引用２】〇〇〇貼〇〇〇ているのか、明らかに見えていたからです。〇吾は「見える人」であり、重耳は「見えない人」であった。重臣たち〇荀息も里克もそれを知っていたはずです。賢臣が「見えすぎる王子」をよろこばなかった。

3、「原稿　王者と異族の美姫たち」（資料番号　T0056430）

原稿用紙は縦 20 字横 10 行の升目がある二百字詰めのもの。欄外左下に「（岩波書店原稿用紙）」と印刷されており、計 180 枚ある。赤ペンの痕跡が残され、内容が初出本文と同じため、本草稿は発表される直前に校正の段階のものと推定できると思われる。

上記の関連草稿を時系列に整理すると、次のようになる。「原稿　天命」（T0056535）→「草稿　王者と異族の美姫たち」（T0056786）→「原稿　王者と異族の美姫たち」（T0056430）。ただし、「草稿　王者と異族の美姫たち」（T0056786）と初出本文との対応が少なく、「原稿　王者と異族の美姫たち」（T0056430）と初出本文と一致しているので、本論は両者とも検討対象から除外することにする。以上の草稿類資料の検討を踏まえ、まず対談の中での武田の「『天命』を戦後改稿した『王者と異族の美姫たち』」という発言から出てくる草稿「天命」を用い、小説「王者と異族の美姫たち」の生成過程を分析したい。

三、草稿「天命」と初出本文との対照表

草稿「天命」と初出本文（『武田泰淳全集増補版』に拠る）をストーリーの展開にそって便宜的に箇条書きにまとめ、対照表として図式化し、以下のように提示してみたい。なお草稿に見えて初出本文には見えない個所には破線の下線（____）を引き、初出本文に見えて草稿に見えない個所には二重下線（____）を引く。①、②などの数字は草稿の文脈を基準として付したものであるので、初出本文において数字が順不同であり、また、同じ数字を二回記載する可能性がある。A、B などのアルファベットは初出本文のみに見られる記述である。未発表の草稿資料は四角で囲い、原文のまま引用する。それぞれの頁数を記して比較を試みる。

草稿	初出本文
①美しく強くそして気高かった、古代の聖王のやうに濁りのない思想を持っていた太子申生は死ぬことによってその美しさを完成したのではあるまいか、と重耳はくりかへしわが胸に問ひただした。弟の夷吾は自分より強く猛々しい男ではあるが、兄の申生のやうな不思議な美しさは感ぜられはしなかった。（1～2 頁）	⑩夷吾と重耳とは驪姫をめぐる会話をした。重耳は、「どうしても、驪姫をおれのものにしたいんだ」と発言した夷吾をたしなめた。「あの女は、おれたち二人の、どっちを選ぶかな」という夷吾の揶揄のような質問に対して、重耳は「（前略）あの女は、この国がほしいのだ。（中略）なみなみならぬ女の知恵で、目をつけるとすれば、それはお前やぼくではなくて、晋の国のあとつぎである、太子、申生さまではなかろうかね。（中略）この世の中には、男女の情というもののほかに、政治ということがらがあるんでなあ（後略）」と夷吾に返事した。重耳の言葉を受けて、夷吾は「だから、つきつめると、自分のほしい女を手に入れるためには、政治の力をにぎりしめなきゃならんわけだ」と述べた。（297～299 頁）
	A 夷吾と重耳との申生をめぐる会話の中で、重耳は「あの方（申生、引用者注）が徳のたかい、かけがえのない方だからそう言うんだ」と申生を褒めたたえ、それに対して、夷吾は「（申生が、引用者注）生きてるのか死んでるのかわからない、力のない男だ。（中略）晋の国を支配することなど、できるわけがな

	い」「申生はおれたちにとって、かけがえのない男なんかじゃありゃしない」と申生をけなした。(297 頁)
②兄を殺されながらも重耳は加害者の驪姫に対して憎悪の念が少しも起って来なかったではないか。これは重耳が兄とは母を異にしてゐたためであらうか。(中略) それでは驪姫が美しいからであらろうか。(2～３頁)。 父獻公の精力的な情慾に身を委せて大きな野心を抱いてゐる恐ろしい程美しい驪姫。驪姫こそは晉国を破滅させる妖女ではなかったか。(３頁) 西方の部落驪戎を伐って手に入れた女であった驪姫は、獻公と共にこの子供(引用者注、奚齊)を晉の太子に立てやうといふ望みを抱いてゐた。しかし今にして思へば、たとへ奚齊が生れなかったとしても、(中略) 驪姫と(中略) 申生とは到底相容れない間柄であったのであらう。両者の争いを防ぎとどめられない重耳は、驪姫の肉体と申生の精神の引力の間で、あちらにひかれ、こちらにひかれて悩ましい日々を送ってゐたのであった。(3～４頁)	②重耳を生んだ女は異族の狐氏族の娘である。申生の母は斉の桓公の娘である。(299 頁) 皇太子(申生)は父の献公が異族から持ち帰った驪姫を無視し、その妖しい美しさを卑しんでいる。(300 頁)
③驪姫が重耳の側によって来ると、重耳	③驪姫は、避けようとする重耳にすりより、

はいつも逃げ出した。（中略）驪姫はおそらく、申生を敵として憎んではゐても、弟の重耳をその夢の中で抱きしめてゐたのかもしれない。（4 頁）	話をしかけた。「三人のうち、あなただけが好きなのよ。（中略）あなたが一ばん好きなひとは、だれ？」といった驪姫の話を受けて、重耳は「それは……。太子の申生さまです」と答えた。驪姫は「意地わるね。わたしは一ばんきらいなのは、あの申生だと知っているくせに」と返事した。（300～301 頁）
	B 夷吾と重耳とは政治の話題に変え、夷吾は「悪知恵で万事うまくいくなら、おれが天下をとれることはわかりきっている」と発言し、重耳は「太子の申生さまが、晋の国のあとつぎになるのが、何よりよいことだ。そうすれば、晋の国は武力と悪知恵ではなくて、徳によっておさめられる静かな国になることができる」と言った。（301～302 頁）
	②「あの女（驪姫、引用者注）の生まれた部落はおれたちの国がほろぼしてしまった。あの女は、祖国のために復讐するつもりで、よからぬことを企んでいるのだ。あの女は、復讐のためにも、自分一身の保全のためにも、どうしたって、この晋の国がまるごとほしいんだ。（中略）」と夷吾は言った。（302 頁） 申生は父の献公に遠ざけられた。奚斉（驪姫の子）を太子の位につけることができれば、驪姫の野望の第一歩が踏み出されたことに

	なる。（302〜303 頁）
④驪姫は太子申生に対する陰謀を計畫してゐた。（中略）太子はしかしすべてを察してゐた。女が自分の命をねらってゐること、父も女と共に自分を排斥しはじめたこと、そしてそれが避けることのできない天の命のやうに自分に迫ってゐることを知悉してゐた。だが太子申生はだまりつづけてゐた。だまりつづけることによって美しさをます自己の精神のみを守りながら〇に対しては身にふりかかる災何等防禦をしやうとはしなかった。（4〜5頁）	④重耳は申生と話し合った。驪姫に嫌われ憎まれ、いつかひどい目に遭うことが分かっている申生は、「父上は、あの女なしでは一日として生きたここちがしないのだからね。その女を、父上の子としてないがしろにできるだろうか」と言い、「奪いとられてきた異族の女たちが、驪姫のようなはげしい抵抗の歯ぎしりと企らみをかみしめるのは、あたりまえのことなんだからね」と述べた。（303〜304 頁）驪姫の侍女が申生を再度呼びかける間に、「ぼくは、国王になどなりたくありません」という重耳の発言を受け、申生は「なりたくなくても、ならねばならぬ者もいるのだ。（中略）彼女は天の命をさずかって我らにあたえられるものなのだから、我らは精神的に（お前は、肉体的にといいたいところだろうが）、正面からうけとめてやらなければならないのだよ」と述べた。（304〜305）
⑤彼（重耳、引用者注）はもとより幸福に	削除

ならうとは努めてゐた。だが、他人を幸福にできるとは夢にも思はなかった。これらの強い人人、兄と女と父とを幸福にしてあげる力が自分にはないことはわかり切ってゐたのであるから。（5～6 頁）	
⑥里克は二番目の王子重耳こそ晉國を幸福に出来る人物だと見抜いてはゐたが、慎重な政治家であったので表面にあらはれることはしなかったのである。（6 頁）	⑥里克は、自分の占いの結果として前途が「吉」と示されたのは重耳だけであることと、驪姫一派を殺す勧めを、重耳に話した。だが、重耳は王位を望まないで、驪姫一派を殺すこともできない。（305～306 頁）
	C「驪姫を生かすか殺すか、それが一国の政治のわかれ目なのである」。夷吾や献公は驪姫を守りたいが、里克や造反派は驪姫を抹殺したい。 里克は「申生は両方の側から厄介な余計もの、とりあつかいにくい敵として、ほろぼされることになるのではあるまいか」（306 頁）
⑦或る日情愛に溺れた獻公の方から太子を廃して奚齊を之に代へやうと言ひ出したことがあったが驪姫は泣きながらそれに反対した。「（中略）正統な太子を棄てて妾腹の子供をお立てになるなどと、その様なことをなさるなら私は自殺いたします」女は優しい言葉で答へたが、次の日から臣下の者に申しつけて王に向って盛に	⑦驪姫は、献公が太子（申生）を廃して奚斉（驪姫の子）を後継ぎにしたいことにうわべだけで反対し、「正統の太子を棄てて妾腹の子供をお立てになる、そんな非道いことをなされたら、私は自殺いたすより仕方ございませぬ」と言いながら、申生への陰謀を企てる 里克は「表でほめたたえているのは、裏であしざまにののしっていることなのですじゃ」

太子をあしざまに攻撃させることを忘れなかった。 驪姫は「王様はあなたの母上の齊姜様のことを夢に御覧になりました。あなたはすぐに曲沃にお歸りになつて母上をお祭り下さい。そして祭りの肉を王様のもとへお送り下さいまし」と申生に言った。すでに彼には女のたくらみの底がわかってゐた。（中略）自分のたくらみを知ってゐる太子がしかも自分の言葉にそむける筈のないことを知ってゐるので、女神のやうに自信を以て立ってゐるのだった。 祭肉には女の手で毒薬が入れられた。（中略）女は犬にそれを分ちあたへた。犬はたちどころに死んだ。位の低い臣下にそれを食べさせた。臣下はたちまち死んだ。そこで驪姫は静かにすすり泣きながら獻公に申し上げた。「太子様は何といふ残忍なお方でございませう。父上をも殺して王にならうとなさるのでせうか。」（6～9 頁）	など重耳に語り伝えた。（307 頁） 驪姫は、申生に亡母のお祭りを行うよう勧め、供えた犠牲の肉を献公に献上するよう促した。 驪姫は、この肉に密かに毒を仕込み、犬、道化役の小人に毒味させたところ、両方も死亡した。献公は、申生が肉に毒を盛り、自分を殺害しようと企てていると誤解した。 驪姫は「おとなしやかにふるまっていた御方が、ひともあろうに父君を毒殺！」と讒言を行った（306～309 頁）
⑧太子はそのまま新城へ奔った。（中略）太子の無實の罪を知ってゐるものに「父上は年老いてゐられます。驪姫がゐなければ、安らかに眠ることも、楽しく食事をすることもできません。私のことばで父	⑧逃亡する前に、申生は「父上に長生きしていただくためには、夜はやすらかに睡り、昼は楽しく食事をしていただくことだ。それには、あの女なしではすまされないではないか」と重耳に言った。弁解もせず、行動もせ

上が驪姫を怒るやうなことになれば面白くない結果になるのです」と答へただけであった。（中略）曲沃の新城において自殺したのであった。（9 頁）	ず、出奔して二カ月ほど、斉の国にとどまっていた。新年を迎える前に自殺した（309～310 頁）
⑨あのやうにあさましく人をおとし入れたり、あのやうに苦しい精神の試練に堪へたり、それでもあれ等の人には幸福を求めてゐると言へるのだらうか。これらの強い人々にたちまぢって、自分だけが何か幸福といふ夢を追ってゐる愚者なのかと、重耳はわれとわが身を怪しまずにはゐられなかった。（中略）兄なればこそ、あの妖婦に對抗して、（中略）自分にはあの妖婦に対抗する力があるであらうか。（9～10 頁）	削除
	①狩猟を行う時、夷吾と重耳とは会話した。夷吾は「あんたは、まこと申生の奴が、美しい心のために自殺したのだと思っているのか。申生は自分の弱さをとりつくろい、自分の無能の言いわけをするために、ようやく生きていた男さ。（後略）」と申生の美しさを認めていない。それに引き替え、重耳は「お前がどう言おうと、ぼくは兄上を信じているよ。兄上は正しかった。それは、いつかはわかることだ」と申生の美しさを認めていた

	（310～311 頁）
⑩二人が別れる時、夷吾は獰猛な顔を重耳の顔へすりよせて「俺はあの妖婦を自分のものにし、あの女の子供を殺し、そしてあなたさへよければ晉の國の王となるつもりだよ」とささやいた。（10～11 頁）	⑩夷吾と重耳とは出奔し別れる時に、夷吾は「あの女はな。あの女はもう、おれのものなんだ。一夜だけなんだが。おれはもうあの女を抱いてしまったんだ。」と自分が驪姫と一夜を過ごしたことを重耳に言った。（311～313 頁）
⑪重耳のゐる蒲の役人のある者は、王の内命を受けて重耳に自殺をすすめた。（中略）どんなことをしても幸福をつかむまでは生きてゐたかった。重耳は垣を踰えて逃れ去らうとした。（中略）ついに翟に奔った。重耳は、里克の「天の命によってあなたは王者になる様に定められてゐます」という豫言が嫌であった。（中略）里克はきっと弟の夷吾のもとへ行っても同じやうなことをのべたててゐるに違ひない。夷吾は相次いで屈、梁へ亡命した。それにつけても、兄のやうに冷徹な精神を保つこともできず、弟のやうに強烈な目的に対する意慾を抱くこともできず、いつも行動のよりどころとなるものを持たずに月日を過してゐる自分が情けなくなるのであった。（11～14 頁）	⑪重耳は蒲へ逃げ入り、自殺を勧められたが、脱出し翟へ亡命した。重耳は、里克の自分に対する予言が真実らしく思いながら、里克が弟（夷吾）にも王位継承を保証していると疑った。 夷吾は相次いで屈、梁へ亡命した。（313～314 頁）
⑫重耳は咎如という異族の女をあてがわ	⑫重耳は咎如という異族の女をあてがわれ

れたが、幸福にはなれなかった。驪姫がもし妻として自分と起居を共にしてくれたら或は甘美な幸福がやってくるかもしれない。（中略）それは太子申生の精神に背き、はてはその精神の美しさにあこがれる自分自身を破滅させることになるであらう。（中略）しかし妻は彼の心などにはおかまひなく忠實な愛情を捧げてくるのである。まるで天の命に従ふかのやうに、夫の命を大切に守り、重耳以外のことは念頭にないかの如くなのである。しかし妻は彼の心などにはおかまひなく忠實な愛情を捧げてくるのである。まるで天の命に従ふかのやうに、夫の命を大切に守り、重耳以外のことは念頭にないかの如くなのである。（14～15 頁）	た。
	⑮咎如の女の「お国へ帰ることは、しばらくおやめ下さい」といった教えを守って、重耳は里克の勧誘を断った。（315～317）
⑬やがて晉國の危機がせまって來た。献公が死んだのである。里克は重耳を晉の王者として迎へ入れるために叛乱を起してゐた。里克は相次いで奚斉、卓子を刺殺した。忠節を尽くして荀息は自死した。（15～16 頁）	⑬献公の没後、荀息は奚斉を即位させた。里克は奚斉を刺殺した。荀息は奚斉の弟の卓子を即位させた。里克は卓子を殺害した。忠節を尽くして荀息は自死した。（317 頁）

⑭何故あの男はそれ程までに自分を王位につけたいのであらうか。（中略）荀息を殺すといふことは、荀息の持ってゐた冷いまでに正しい精神、あの申生の守ってゐた精神に反抗することであった。（中略）重耳は心ではこの精神に対するあこがれを棄て去ってはゐなかったが、しかもその精神のために闘ふ気持とてはなかった。（中略）目撃することのできなかった驪姫の最後の一場面は、空想の色彩あざやかに、白昼の夢となってゆらぎ立って来るのである。（17～19 頁）	⑭里克は驪姫に夷吾に手紙を書かせた。夷吾が帰国する前に、里克は奴隷に危険人物の驪姫を殺させた。（317～320 頁）
⑮あはただしい行方定めぬ力の争ひのさなかにあっては、一度ぐらい自分の意志を主張して見ることも必要の様に思はれた。重耳はそこで次の様な理由をつけて晉へ歸ることを拒絶した。（中略）里克はただちに梁にゐた夷吾を王として迎え入れた。（中略）彼が王となるのを拒絶したのは、（中略）いはば、あまりにも行動性のない自分自身を驚かしてやらうとする悪戯にすぎなかったのだ。それだのに人民と君子達は、「重耳は賢明である」「翟の公子は王者の風格がある」と語りつたへ、賢明な王子重耳を王にせよといふ叫びは	⑮夷吾は即位した。（320 頁）

いたるところできこえるやうになった。（19～21 頁）	
⑯夷吾が敵視しはじめたのは自分を擁立してくれた大臣里克であった。里克が自分より先に兄のもとへ使者をやってゐること、自分の擁立者として自分に独裁權をあたへないこと、そしてやがて自分を暗殺する陰謀の中心者となるかもしれないといふ理由があった。夷吾は（中略）「かかる大逆罪を犯したからには、到底、一國の大臣として生きながらへることは出来ますまい」と申しわたした。（中略）その場で里克は劒に伏して自殺してしまった。（20～22 頁）	⑯驪姫殺害の真相をつかんだ夷吾は、里克を誅殺したいが、私怨だけでは理由にならないので、「あいかわらず、翟にいる重耳と連絡をたもち、わが晋国を転覆せんとくわだてているではないか」と里克に罪を着せた。里克は自死した。（320～322 頁）
⑰秦が饑饉の晉國に穀物を送ってくれた恩を忘れて、後になって饑饉になった秦を攻撃した。（中略）人民も君子も、晉王夷吾を憎悪するやうになった。（23 頁）	⑰秦国が晋国を侵し、人質として晋の太子は秦へ送り届けられた。晋では凶作なので、秦は救援物資を投入した。秦が飢餓に苦しんだとき、夷吾は支援をしなかった。夷吾の評判は、悪くなり、重耳の声価は上昇した。 おびただしい殺害事件、とりわけ、驪姫の惨死は、重耳の胸をかきむしった。 秦との小競り合いで、晋軍が大敗した。（322～323 頁）
⑱夷吾が勇士を派遣して重耳を暗殺するため、重耳は咎如の女と別れ、衛の国を通	⑱刺客がしばしば重耳の身辺を襲っていたので、重耳は咎如の女と別れ、衛の国を通過

過して、斉の国に着いた。（23～26 頁）	して、斉の国に着いた。（323～324 頁）
⑲斉の桓公は重耳を迎え入れた。斉の王家の女の妻を持って幸福をつかんだなと信じた重耳は、斉を離れようとは思わなくなっていた。斉の女の侍者が賢い家臣達の重耳を連れて斉を出発する計画を盗み聞きして斉の女に告げるが、斉の女は、漏洩を恐れて侍者を殺し、重耳に斉からの脱出を勧めた。だが、重耳は聞く耳を持たなかった。そこで斉の女は家臣と謀って、重耳を酒に酔わせ、車に載せて斉を出発させた。（26～31 頁）	⑲重耳は斉の桓公に歓迎された。斉の王女の妻を持った重耳は、斉を離れようとは思わなくなっていた。王女の侍臣が賢臣らの重耳を連れて斉を出る計画を盗み聞きして王女に告げるが、王女は漏洩を恐れて侍臣を殺し、重耳に斉からの脱出を勧めた。だが、重耳は聞く耳を持たなかった。そこで王女と賢臣らとの図りにより、賢臣らは酔ってしまった重耳を車に乗せ、無理やり斉から連れ出した。（324～328 頁）
⑳艱難な旅行、各国の支配者との接觸が次第に彼を王者らしく強靭な人間にして行った。（中略）幸福をもとめる胸のやはらかみが消え失せ、焼きつくやうな濃度を持った「力」が全身にみなぎってくる。人質となっていた晋の太子子圉が秦から逃げた（31～32 頁）	⑳長老は重耳に幸福などというささやかなよりどころをあきらめなければならなく、学び続けてほしいと忠告した。 重耳は巡遊し学び続けた（328 頁）
㉑楚の成王の「あなたが歸國されたら、私に何を御禮として下さいますか」という尋ねに対して、重耳は「もし万止むを得ない事情であなたと戰場でお目にかかり戰を交へることになりましたら、私は九十里退却して、あなたに御恩返ししませう」	㉑秦の五人の美人をもらい、夷吾が死ぬと、国内外の声援の下に、王位についた。（328 頁）

と答えた。重耳は家臣の言葉にしたがったといふ形で、五人の女を妻にしたのである。（中略）やがて秦の軍に守られた重耳主従は晉の國に入り、重耳は晉の王となった。（中略）やがて重耳の豫言した如く晉軍は楚軍と戰を交へた。約束どほり、晉の軍は九十里退却した 隱者介子推は天の命に依って成功したくせに、自己の力によって成功したと誇稱する人人を嫌悪して山へ隱れたともいはれる。（32～38 頁）	
㉒天の命を受けて王となった幸福な重耳に一生涯でのおどろきが絶えなかったなどと何處の歴史家が物語るであらうか。 （38 頁）	㉒「「文公」という、最上の称号をおくられて、彼（重耳、引用者注）はいとも幸福そうに、（傍点が原文に付されたもの、引用者注）一生をおわった。」 文公は人々から称賛され、歴史家からは王者の代表として生涯を書き残された。しかし、人々や歴史家は「当の王者の本質について、とうてい不可解なのに、明らかすぎると錯覚していたにすぎないのである。」（328～329 頁）

以降本論中の丸数字、アルファベットはこの表の記号に対応する

四、「王者と異族の美姫たち」の生成過程

本節は以上の対照表を通して、テクスト間の類似点と相違点を明らかにした上で、本小説の生成過程を以下の三つの方面から考察したい。

1、「聖王」「悪王」像の明確化

１）A について。初出本文において、夷吾の「（申生が、引用者注）生きてるのか死んでるのかわからない、力のない男だ。（中略）晋の国を支配することなど、できるわけがない」[11]という申生をけなした内容を付加した。A における夷吾の申生に対する否定的な評価を付加することで、夷吾と申生との対立関係が浮かび上がっていると思われる。

夷吾のマイナス評価に対して、重耳は「あの方（申生、引用者注）が徳のたかい、かけがえのない方だからそう言うんだ」と申生を褒めたたえた。草稿には申生の「精神的な美しさ」のような表現が存在するが、申生の「徳」に関する表現は見られない。草稿に書かれていない「徳のたかい」という言葉を加えることで、申生の聖王の人物像がさらに明らかに現れ出ていると言えよう。

２）Ｂについて。夷吾と重耳との会話で政治の話題に変え、夷吾は自分の「悪知恵」に関して以下のように述べている。

> 「（前略）攻撃と防禦。妥協と裏切り。仲よさそうに手を結んでおいてから、相手の手もキモも、もろにひきぬいてやる。やさしくしてやる。おどかしてやる。殺したり、命をすくったり、とめどもないどんでんがえしで、おれたちより強い奴の目をまわさせてやる。おれたちより弱い奴ら、それはどうにでもなる。（中略）悪知恵で万事うまくいくなら、おれが天下をとれることはわかりきっている。」（初出本文 301 頁）

引用部分から、夷吾が相手に勝ち抜き天下をとるために、毒と優しさが絶妙に配合され

[11] 武田泰淳『武田泰淳全集増補版』第 9 巻「王者と異族の美姫たち」（1967）、筑摩書房、1978 年、297 頁

た悪がしこい知恵を働かせることがうかがえる。注意すべきなのは、草稿⑰にも初出本文⑰にも、晋が凶作なので秦は救援物資を投入し、秦が飢餓に苦しんだ時に夷吾が支援をしなかったというプロットが存在するという点である。このプロットによって人々に憎悪される夷吾の「悪王」像は描写されているが、初出本文において、夷吾が自分の「悪知恵」を叙述することで、「悪知恵」で天下をとるという夷吾の「悪王」の人物像はいっそう明瞭に読者の目の前に浮かんでくると思われる。夷吾の「悪知恵」に対し、重耳は申生の「徳」について以下のように述べている。

「太子の申生さまが、晋の国のあとつぎになるのが、何よりよいことだ。そうすれば、晋の国は武力と悪知恵ではなくて、徳によっておさめられる静かな国になることができる」（初出本文 302 頁）

重耳は、悪王である夷吾が国君になって武力と悪知恵で国家を治めることより、徳があり立派な政治を行う聖王である申生が晋の後継ぎになって、徳によっておさめられる静かな国になるほうを希望している。ここで思い浮かべるのは、前述の武田の対談「戦争と中国と文学と」で語った「僕の気持としては王者、徳の高い人というのはあると思うんですよ。それは存在する意味があるはずなんだ。」という改作意図である。武田が「悠久なものがなぜほしかったか」というと、武田が「悠久のもの（中国古典、引用者注）」を利用して、中国古典における「徳」あるいは「王者（徳の高い人）」を抽出し、「徳/王者」によっておさめられる国の重要性を世間に唱えたかったからではないかと思われる。

まとめて言うと、以下の内容が言えるであろう。草稿に書かれていない A を付加したことで、夷吾と申生との対立関係が顕在化し、申生の「聖王」の人物像をはっきりあらわしている。B を付け加えたことで、「悪知恵」を働かせ天下をとる夷吾の「悪王」の人物像がいっそう鮮明に造形し、武田の「徳/王者」についての追究が重耳の口を借りて述べている。つまり、AB の付加により、初出本文の中に「聖王」と「悪王」との対立・葛藤を組み込み、「悠久なもの」から「徳/王者」を追究するという武田の狙いは現れたと言えよう。

2、美姫たちの格上げ

１）⑩とＣについて。草稿⑩において夷吾と重耳二人が逃げ出し別れる時に、夷吾の「俺はあの妖婦を自分のものにし、（後略）」という言葉は、初出本文の冒頭の一文「どうしても、驪姫をおれのものにしたいんだ」となる。読者を作品に引込むために重要な役割を担っている書き出しにおいて、武田は夷吾と驪姫との関係を提示した。ゆえに、後文にＣの中の以下の地の文が付加されても、読者が唐突な印象が感じられないと思われる。

女の命は守ってやる。そのかわり、その肉体と王位は自分のものにする。それが夷吾の立場だった。異族の美姫をころす。それから、重耳を即位させて晋の国土を安泰にしたい。それが、里克の立場である。驪姫を生かすか殺すか、それが一国の政治のわかれ目なのである。彼女に味方することは、父献公をはじめ現状維持をねらう実権派に味方することであり、彼女に反対し彼女を抹殺することは、つまるところ武装革命をくわだてる造反派の仲間入りすることなのであった」（初出本文 307 頁）

「驪姫を生かすか殺すか、それが一国の政治のわかれ目なのである」という言葉の付加によって、驪姫の生死は一国の政治の成り行きを左右するかぎとなり、初出本文において驪姫が担う役割が大きくなっていると言えよう。

また、草稿⑩、初出本文⑩における出奔し別れる時に、夷吾の重耳に対する発言は、それぞれ以下のように述べている。

二人が別れる時、夷吾は獰猛な顔を重耳の顔へすりよせて「俺はあの妖婦を自分のものにし、あの女の子供を殺し、そしてあなたさへよければ晉の國の王となるつもりだよ」とささやいた。（草稿 11 頁）

「あの女はな。あの女はもう、おれのものなんだ。一夜だけなんだが。おれはもうあの女を抱いてしまったんだ。」（初出本文 312 頁）

草稿⑩と初出本文⑩との比較により、以下の相違点が見られる。草稿においては夷吾が驪姫を自分のものにしたいとされているのに対して、初出本文においては夷吾が驪姫と一夜を過ごしたと設定されている。この改変から、夷吾と驪姫の愛欲の関係をさらに強調しようという武田の意図を見て取れると言えよう。これも驪姫が初出本文の中で果たす役割が重要となることの傍証であろう。

２）⑭について。草稿⑭にも初出本文⑭にも、驪姫が殺されたことが言及されているが、初出本文⑭において、驪姫が殺される前に、里克が驪姫に夷吾宛の手紙を書かせ夷吾に帰国を勧めたという設定は、以下のように付加されている。

「梁にかくまわれている夷吾さまに、これから使者をさしむけねばならぬ。あんたからも、未来の国王さまに一筆かいてやったらどうかの。そうすれば、さだめし夷吾さまも勇気百倍、この晋の国、つまりは可愛いお前さん目がけて、馳せもどってきなさるだろうよ。すんだことは、すんだことだ。これからのお前さんは、あの男を楽しく王位にとどまらせておく美しい餌になるのじゃ」（初出本文 318 頁）

「ぜひ、おもどり下さい。わたしはあの夜の約束どおり、あなた様をお待ちしております」（初出本文 318 頁）

以上の引用文はそれぞれ、里克が驪姫に夷吾宛の手紙を書かせ、夷吾に帰国を勧めるという要求の言葉と、驪姫が夷吾に送った手紙の内容である。里克は重耳に帰国して即位するよう伝えたが、重耳は里克の提案を拒絶した。そこで、里克は夷吾を帰国させて擁立した。初出本文において、驪姫の手紙が確かに夷吾には効き目があり、驪姫が夷吾「を楽しく王位にとどまれせておく美しい餌にな」った。草稿にはない、驪姫が夷吾宛の手紙を書いて夷吾に帰国を勧めるという設定を初出本文に挿入したことで、驪姫は一国の政治を動かす存在に格上げされたと言えよう。

３）⑯について。草稿⑯と初出本文⑯において、夷吾が里克を殺す動機はそれぞれ以下のように記されている。

里克が自分より先に兄のもとへ使者をやってゐること、自分の擁立者として自分に独裁權をあたへないこと、そしてやがて自分を暗殺する陰謀の中心者となるかもしれないといふ理由があった。夷吾は（中略）「かかる大逆罪を犯したからには、到底、一國の大臣として生きながらへることは出来ますまい」と申しわたした。（草稿21 頁）

ようやく驪姫殺害の真相をつかむにつれて、王は大臣を殺害するための、まことしやかな理くつを考案しはじめた。掌中の珠にしたかった女をむざむざ打ちくだかれたという、私怨だけでは理由にならない（初出本文 320 頁）

夷吾は、幕や屏風や壁の外側に配置してある、親衛隊の気配をうかがいながら、言った。

「里克よ。汝はまことに罪ぶかい男であるな。驪姫をころしたのは、罪ではない。だがお前さんは、父王の生んだ二人の王子、奚斉と悼子をころしたな。また、その二人の王子を守ろうとした忠臣荀息と、その一派の者をころしたな。汝は革命ずきの指導者ぶっている私利私欲をはかる新式悪人と申すのだ。それだけなら、まだ許せる。だが、お前さんは」

国王が両手を打ち鳴らすと、見えない親衛隊の剣戟、甲冑、弓矢のふれあう音がひびいた。

「あいかわらず、翟にいる重耳と連絡をたもち、わが晋国を転覆せんとくわだてているではないか。まず汝をころすこと、それが汝の好きな革命を実行することになるのだ」（初出本文 322 頁）

草稿では、夷吾は里克が自分を暗殺する陰謀の中心者となるかもしれないと心配して、里克を殺害したとされているのに対し、初出本文では、夷吾は驪姫が里克に殺害されたという真相をつかみ、「わが晋国を転覆せんとくわだてているではないか」というまことしやかな理屈で里克を殺したとされている。この変更によって、驪姫の政治中での存在感をより際立たせていると思われる。

４）⑮について。重耳が里克の帰国の勧めを拒絶する動機は、それぞれ以下のように記述されている。

重耳は暗殺と叛乱の晉の國へ歸りたくはなかった。里克とともに王宮の生活をつづけることも不愉快であった。それと同時に、自分が王者になることを得意然と豫言してゐる里克の言葉に背くことによって、このおしかぶさってくる政治家に反抗し、それによって自分の運命を賭けて見たくもあった。この様にあはただしい行方定めぬ力の争ひのさなかにあっては、一度ぐらい自分の意志を主張して見ることも必要の様に思はれた。重耳はそこで次の様な理由をつけて晉へ歸ることを拒絶した。（草稿19 頁）

彼が王となるのを拒絶したのは、決して古代の哲理に順ったわけでもなく、兄申生や大臣荀息の様に一なる精神を貫いたわけでもなかった。あれは賢明な達見からした行為ではなく、いはば、あまりにも行動性のない自分自身を驚かしてやらうとする悪戯にすぎなかったのだ。（草稿 20 頁）

ある日、彼女（咎如の女、引用者注）が「お国へ帰ることは、しばらくおやめください」と語った（初出本文 316 頁）

異族の女の教えを守って、重耳は里克の勧誘をきっぱりことわることにした。（初出本文 317 頁）

草稿では、重耳は自分の運命を賭けて見たく、また自分自身への悪戯心で里克の晋へ帰る勧めを拒絶したと記されているのに対し、初出本文では、咎如の女の「お国へ帰ることは、しばらくおやめ下さい」といった教えを守って、重耳は里克の勧誘を断ったとされている。咎如の女は、重耳にあてがわれた咎如という異族の美人である。「自分の意志」ではなく異族の美姫の教えにより、重耳が里克の勧誘をことわるという改稿は、咎如の女（異族の美姫）が政治の変化をもたらす者に変貌されていると思われる。

総括して言うならば、以下の内容が確認できるであろう。初出本文に付加されたＣの「驪姫を生かすか殺すか、それが一国の政治のわかれ目なのである」という地の文によって、驪姫が担う役割が大きくなっていることが見られる。草稿⑩の「俺はあの妖婦を自分のものにし、（後略）」という言葉が初出本文の冒頭の一文になることと、草稿⑩の重耳と夷吾と別れる時の話が「一夜だけなんだが」に変更することにより、夷吾と驪姫の関係を深くしようという武田の意図が窺える。初出本文⑭の里克が驪姫に夷吾宛の手紙を書かせ夷吾に帰国を勧めたという付加されている設定と、初出本文⑯の夷吾は驪姫が里克に殺害されたという真相をつかみ里克を殺したという改変によって、政治の中での驪姫の役割はより際立たされていると言えよう。初出本文⑮の自分の意志ではなく異族の美姫の教えに従い、重耳が里克の勧誘をことわるという変更によって、咎如の女（異族の美姫）が政治の変化をもたらす者に変貌されたと思われる。以上の改稿により、初出本文において、「一国の政治のわかれ目」としての驪姫と、重耳の行動の指導者としての咎如の女を武田はたんねんに描き出している。草稿において端役であった異族の美姫たち（驪姫にしろ、咎如の女にしろ）は、初出本文において歴史の裏面で暗躍し政治の方向が決められる人物に格上げされたと言えよう。

3、「幸福な重耳」と「天命」の削除

1）⑤⑨⑪⑫⑲について。前述の 1、2 の異同以外、草稿から初出本文への大きな変更のひとつは、「幸福な重耳」と「天命」に関する記述の大部分が削除されている点に求めら

れる。重耳が個人の幸福のみを追求していたことは、草稿⑤⑨⑪⑫⑲においてそれぞれ以下のように述べているが、初出本文において省いた。

草稿⑤　彼（重耳、引用者注）はもとより幸福にならうとは努めてゐた。だが、他人を幸福にできるとは夢にも思はなかった。これらの強い人人、兄と女と父とを幸福にしてあげる力が自分にはないことはわかり切ってゐたのであるから。（草稿 5〜6 頁）

草稿⑨　これらの強い人々にたちまぢって、自分だけが何か幸福といふ夢を追ってゐる愚者なのかと、重耳はわれとわが身を怪しまずにはゐられなかった。（草稿 10 頁）

草稿⑪　（自殺をすすめられた）は兄のやうに思い定めて自殺する気にはなれなかった。どんなことをしても幸福をつかむまでは生きてゐたかった。（草稿 11〜12 頁）

草稿⑫　しかし、妻（咎如の女、引用者注）はもち子供は生まれても重耳は幸福にはなれなかった。驪姫がもし妻として自分と起居を共にしてくれたら或は甘美な幸福がやってくるかもしれない。（草稿 14 頁）

草稿⑲　驪姫の美しさを〇そっくりそのまま身につけて齊の女が面前にあらはれた時から、彼（重耳、引用者注）は幸福をつかんだなと信じた。（草稿 26 頁）

２）また、草稿㉑における「天命」に関する以下の記述は、初出本文において省いた。

隠者（介子推、引用者注）は天の命と云ふことを常に口にしてゐたと言ふ。天の命に依って成功したくせに、自己の力によって成功したと誇稱する人人を嫌悪して山へ隠れたともいはれる。（草稿 37 頁）

天の命は洪水のやうに流れ、蝗のやうにおそひかかり、太陽のやうに輝いてゐる。美しき女も、強き大臣も、すべては織物の模様のやうに天命の布を染めなす色彩なのであらう。ひそかに心にかかる精神も、軟く心をとろかす肉体も一本の糸、一握りの綿となってこの布を支へてゐるのであらう。（草稿 37 頁）

重耳が晋の文公となり、論功報償が行われた。しかし、子推に俸禄は与えられず、子推もまた何も要求しようとしなかった。重耳が晋公の位につくのは天命であり、天の功績を盗むことはできない、という考えがあったからだ。重耳の臣下達は自分達の手柄だと考えており、それが許せなかった。子推の母親は、子推の廉潔の士として生きる覚悟を聞き納得した。子推は母を連れて山中に隠栖し、死ぬまで世に現れなかった。武田は介子推の言葉を借りて、草稿を「天命」と名付けた可能性がある。

五、おわりに

本論は、日本近代文学館に所蔵されている「武田泰淳コレクション」における未発表の草稿類資料「原稿　天命」（資料番号　T0056535）などを考察対象として取り上げ、三つの方面から具体例を挙げて草稿と初出本文との異同を検討し、テクストの生成過程を分析した。結論として、「聖王」「悪王」像が明確化され、美姫たちが格上げされ、「幸福な重耳」と「天命」が削除された。ゆえに、小説のタイトルは草稿の「天命（~~幸福な重耳の物語~~）」（草稿では「幸福な重耳の物語」というタイトルの行の真ん中に二重線を引いた、筆者注）から、おのずから初出本文の「異族の美姫たち」（「王者と異族の美姫たち」）に変更しなければならなかったのである。

対談での「王者、徳の高い人」が「存在する意味があるはずなんだ」と強調したかった武田の「気持」は、小説の初出本文において「あの方（申生、引用者注）が徳のたかい、かけがえのない方だからそう言うんだ」、「そうすれば、晋の国は武力と悪知恵ではなくて、

徳によっておさめられる静かな国になることができる」という付加した内容によって直接に表されている。ゆえに、本論が導き出した「聖王」「悪王」像が明確化されるという生成過程は、武田の「気持」を理解する上には大切な役割を持っていると言えよう。また、美姫たちの格上げという改稿も、異族の美姫（即ち胡姫）に「とても魅力を感じて好きなんだな」という武田の関心の表れだと言ってもいいのであろう。

これから、小説の生成過程を踏まえつつ、改稿の時代背景から詳しく武田が「悠久なものがなぜほしかったか」、即ち本小説における「悠久のもの」の「現代」的意義を検討したい。前述の「草稿　王者と異族の美姫たち」（資料番号　T0056786）において、武田は「『秦女』とは、一九六〇年代の世界にたとえれば、アメリカ女、ソ聯女にあたるのでしょう。」と述べている。初出本文において、ただ「秦の国王は、他の小国に負けぬ大国の度量を示して、一ぺんに五人の美人を彼に贈った。その五人の「妻」の中には、弟夷吾の息子、人質として秦に送られた晋の太子の妻もまじっていた。」という一文のみの中で秦の美人に触れている。両者が対応していないが、武田が執筆当時の時代背景を意識しながら小説を作ることはうかがえる。執筆当時、冷戦中に米ソを始めとする資本主義陣営と社会主義陣営の代理戦争ともいえるベトナム戦争は、（1955 年に始まったが）1964 年にアメリカがトンキン湾事件を起こして参戦した事で一気に全面戦争に突入した。日本国内においても 60 年安保闘争で混乱が続いた。こうした動乱の 1960 年代に面して、武田は「現実のきびしさを考える場合に」、「悠久のもの」（中国古典）から「よりどころとなり得るもの」である「徳」あるいは「王者（徳の高い人）」を追究し、「武力と悪知恵ではなくて、徳によっておさめられる静かな国」を唱えた。本小説において、武田の「ほしかった」「悠久のもの」の「現代」的意義は、中国古典を通して動乱の 1960 年代の難題を再検討することにあると言えよう。

終章

序章で確認したように、桶谷秀昭の中国小説に関する分類を踏まえ、これまでの武田の中国小説に関する先行研究における問題点は、「武田泰淳の中国体験を素材にした」中国小説に関する論考は盛んであるのに対して、ほかの二種類の中国小説に関する研究は少しずつ進展しているが、検討されていない作品が多く残されているという点である。

本論文では各章の論述を通してこの問題点の解決に取り組んだ。第一章では、『辛亥革命江蘇地区史料』が小説「揚州の老虎」の典拠であることを突き止め、具体的なテキスト間の相互関係を明らかにした。そのうえで、小説全体にわたる典拠の利用方法を以下のようにまとめた。小説は大部分が『史料』の「揚州分府」を典拠とし、一部分が『史料』の「分区部分」の「鎮江府」にある「鎮江光復史料」、「三益桟与李竟成」などをもとにして作られた。武田は「揚州の老虎」の創作にあたり、実体験者の回想録・インタビュー記録と研究者の調査報告書を比較しながら摂取し、研究者の「附録：孫天生起義調査記」よりも辛亥革命の実体験者の回想録・インタビュー記録を優先して取り込んだ。さらに、「揚州の老虎」において付加された「わしたちがそれを動かせばいいのだ」、繰り返された「揚湯止沸の計」など言葉によって、商人たちを世の中を「動かすもの」として描く「揚州の老虎」の独創性を明確化した。

武田は「『士魂商才』あとがき」（1958 年）において「日本資本主義が、労働者・農民の汗と油と涙の上に築かれたのは申すまでもない。下積みの国民の汗と油と涙を忘れるな、という進歩派の歴史家の意見に私は賛成だ。だがそれを重大視するあまり、実業人をふくむ日本国民の発揮した、士魂商才を忘れてしまうなら、私はそれに反対である。」[1]と述べている。この発言から、1955 年頃から高度経済成長期に入ってきた日本の社会背景において、武田が日本資本主義を唱え、商人たちを重視していたという思想が垣間見えると言えよう。「揚州の老虎」が発表された 1968 年に、日本は当時の西ドイツを抜いてアメリカ

[1] 武田泰淳「『士魂商才』あとがき」（1958 年）『武田泰淳全集増補版』第 13 巻、筑摩書房、1979 年、328 頁

に次ぐ世界第２位の経済大国となった。おそらく「揚州の老虎」において、労働者でもなければ、農民でもない、商人こそが世の中を動かすという独創性も、武田の「実業人」を重要視しているという思想を表したであろうか。

第二章では、『珂雪齋集』が「明朝滅亡」題材小説「水の楽しみ」の典拠であることを指摘した。小説とその典拠とを比較した上で、小説全体にわたる典拠の利用方法を次のようにまとめた。小説は武田が主に『珂雪齋集』の「書王伊輔事」、「遠帆楼記」、「東遊記二十二」、「游居柿録巻之十二」、「行路難」、「趙大司馬伝略」、「珂雪齋游居柿録巻之八」、「柳浪湖記」、「珂雪齋游居柿録巻之一」に拠り、『珂雪齋集』から材料を採って組み合わせたものであることがわかる。また、武田が典拠の記述の順序を入れ替えたり、複数個所を適宜まとめたり、簡略化したりして「水の楽しみ」を作ったことを明らかにした。小説「水の楽しみ」はほとんどの部分が典拠である『珂雪齋集』を翻訳（直訳、意訳を含む）したものであることを析出した。さらに、武田の独創性は、付加したつなぐ段落により袁小修の舟遊びの趣が明末の時代背景、家族の盛衰、自然環境の変化としっかりつながるようになったことにあると結論付けた。

第三章では武田と敦煌との関係を切口として、日本近代文学館に所蔵されている「武田泰淳コレクション」の中の未発表資料を参考にして、武田文学における唯一の敦煌題材小説「流沙」の典拠資料を整理し武田の英語力を確認した上で、典拠と小説との比較を行い、「節ごと」、「全体」という二つの方面から武田泰淳の言う「換骨奪胎」の方法（典拠の利用法）を次のようにまとめた。節ごとで腑分けすると、作品構成は一部を除き、大体典拠としての Ruins、Serindia、『回教概論』の構成順にしたがっていることを明らかにした。全体からみれば、「流沙」は正式かつ体系的な Serindia より、自然風景・面白いエピソードが豊富な Ruins のほうが多く小説に取り入れられ、典拠の文字のみならず、写真も「流沙」においてよく使われていることを析出した。また、変更の内容により、武田の独創性は登場人物蒋が現実主義者に変貌され、シンが典拠におけるシク教徒から「熱烈な回教徒」に変貌されていることにあると解明した。

第四章では日本近代文学館に所蔵されている「武田泰淳コレクション」における未発表

の草稿類資料「原稿　天命」（資料番号　T0056535）などを考察対象として取り上げ、草稿と初出本文との異同を検討し、「聖王」「悪王」像が明確化され、美姫たちが格上げされ、「幸福な重耳」と「天命」が削除されたというテキストの生成過程を明らかにした。ゆえに、小説のタイトルは草稿の「天命（~~幸福な重耳の物語~~）」（草稿では「幸福な重耳の物語」というタイトルの行の真ん中に二重線を引いた、筆者注）から、おのずから初出本文の「異族の美姫たち」（「王者と異族の美姫たち」）に変更しなければならなかったのである。また、小説の生成過程の分析を踏まえつつ、改稿の時代背景から、具体的に武田が「悠久なものがなぜほしかったか」、即ち本小説における「悠久のもの」の「現代」的意義を検討した。本小説において「悠久のもの」の「現代」的意義は、動乱の 1960 年代に面して、武田が「現実のきびしさを考える場合に」、「悠久のもの」から「よりどころとなり得るもの」である「徳」あるいは「王者（徳の高い人）」を追究し、「武力と悪知恵ではなくて、徳によっておさめられる静かな国」を強調して、中国古典を通して「現代」の難題を問い直したことであると思われる。

本研究は、従来の研究者たちの指摘を踏まえて、武田泰淳中国小説における四篇の小説を取り上げ、中国語・英語・草稿資料を手がかりにして「中国・中国文学」と中国小説との関係を考察してきた。本研究により、ささやかながらこれまでの武田泰淳の中国小説の研究を更新し、日中の文学・文化交流研究分野に貢献できると思われる。

本論文にて得られた知見を基に、今後より多くの「中国体験を素材にした作品」以外の中国小説を視野に入れて考察したい。研究を進めるべき具体的な課題について以下のように示す。

まず中国小説の典拠研究について述べる。小説「霞客」が雑誌『海』の 1979 年 7 月号に＜未発表作品＞として掲載された際に、武田百合子は「（武田泰淳は、引用者注）それからすぐ古びたハトロン封筒をとり出して、まだ向い会って坐っていた私に『またヒマをみて、これに手を入れて出したい。俺の見える場所にだして置いといてくれ』と言った。これから先のことなど、あまり口にしない人なのに、めずらしいことであった。楽しそう

であった。ハトロン封筒には『霞客』と上書きがあった。」[2]と追憶した。武田百合子の発言により、小説「霞客」は武田が病床に臥しながらも気にかけ、大切に遺そうとした作品であることがうかがえるであろう。小野忍は「解説」（1979）において、「資料として作家が第一に使ったのは、徐霞客自身が書いた日記体の旅行記『徐霞客遊記』である」[3]と明言し、小説「霞客」の中で用いられた主な典拠を明らかにした。これから小野忍の提示した典拠を踏まえて、武田泰淳の大切にした小説「霞客」を検討したい。また、文末に「燕京学報専号之十『呉愙斉先生年譜』によるところ多し」という注記がある「玉璜伝」（『中国文学』第 81 号、1942）なども考察の対象になるべきだと思われる。

次に中国小説の草稿研究に関して、小説「才子佳人」（『人間』1946 年 7 月号）の戦争下に書きためられた草稿「貞女」（資料番号 T0056438、34 枚）、小説「会へ行く路」の初稿（資料番号 T0056437、22 枚）などがまだ検討されていないようである。

【付記】

本論文の第三章、第四章の草稿資料の調査・閲覧・引用に際して、武田泰淳のご息女である武田花様や、所蔵館である日本近代文学館より、格別のご配慮を賜った。

第一章は 2021 年度日本近代文学会九州支部秋季大会における研究発表「「揚州の老虎」論――『辛亥革命江蘇地区史料』を手がかりに」の内容に、加筆・修正したものである。発表の際に貴重なご教示を下さった諸先生方に心より感謝を申し上げる。

第三章をなすにあたって、道園達也先生から論文の進め方などのご指導を頂いた。なお、2022 年度日本近代文学会九州支部春季大会での口頭発表の際及びその後、浦田義和先生から回教、大川周明に関するご助言を頂いた。貴重なご教示を下さった諸先生方に心より感謝申し上げる。

第四章は 2022 年度日本近代文学会九州支部秋季大会における研究発表「武田泰淳「王者と異族の美姫たち」論―草稿類資料を手がかりに―」の内容に、加筆・修正したもので

[2] 武田百合子「『霞客』発表にあたって」（1979 年）、『海』11(7)(123)、中央公論社、1979 年、363 頁
[3] 小野忍「解説」（1979 年）、『海』11(7)(123)、中央公論社、1979 年、361 頁

ある。発表の際に貴重なご教示を下さった諸先生方に心より感謝を申し上げる。

【初出一覧】

（１）第一章

武田泰淳「揚州の老虎」の典拠と方法―「動かすもの」としての商人たち―

『近代文学論集』第 48 号、日本近代文学会九州支部、69～84 頁

（２）第三章

武田泰淳「流沙」の典拠と方法

『東アジア研究』第 21 号、山口大学大学院東アジア研究科・『東アジア研究』編集委員会、153～168 頁

本論文において第一章と第三章は細部に修訂を加えるに留め、論旨に関わる大きな改変は施さなかった。

参考文献

序章

久松潜一ほか『国文学：解釈と鑑賞』（特集・日本文学研究法）31(10)、至文堂、1966.07

三好行雄ほか『国文学　解釈と教材の研究』（特集・作品論への招待）13（9)、学燈社、1968.07

長谷川泉『近代名作鑑賞：三契機説鑑賞法 70 則の実例』（第 5 版)、至文堂、1977

平岡敏夫ほか『国文学：解釈と鑑賞』（現代文学研究法）43(1)、至文堂、1978.01

柘植光彦「作家の出発期と文学活動　武田泰淳」『国文学：解釈と鑑賞』43(12)、至文堂、1978.12、50～53 頁

吉田熙生ほか『国文学：解釈と鑑賞』（特集・近代文学研究法)、至文堂、46(12)、1981.12

徐少芬「武田泰淳〝中国小説〞論」、龍谷大学大学院研究紀要人文科学 16、1995、228～231 頁

兵藤正之助「研究動向　武田泰淳」、『昭和文学研究』1（0)、1979、84～86 頁

竹内栄美子「研究動向　武田泰淳」、『昭和文学研究』45（0)、2002.09、133～136 頁

東京大学国語国文学会『国語と国文学』（特集号　近代文学における「典拠」)、ぎょうせい、2010.5

藤原崇雅「研究動向　武田泰淳」、『昭和文学研究』82（0）、2021、137～140 頁

第一章

呉玉章著『辛亥革命』、北京：中国人民大学出版社、1960

馮春竜・居再宏「祁竜威教授談『辛亥革命江蘇地区史料』」、『揚州文化研究論叢』第 1 期、2011

祁竜威「書『辛亥革命江蘇地区史料』後」、『揚州文化研究論叢』第 1 期、2011

呉莉莉『徐宝山研究』、揚州大学、2016

第二章

［中国語］

袁中道『珂雪齋近集 上下』（明代論著叢刊 第 2 輯)、偉文図書出版社、1976

李茂肅選注『三袁詩文選注』、上海古籍出版社、1988

任巧珍訳注『三袁詩文選訳　修訂版』（古代文史名著選訳叢書)、鳳凰出版社、2011

［日本語］
入矢義高著井上進補注『増補　明代詩文』(東洋文庫 764)、平凡社、2007

第三章

［中国語］
（英）奥雷爾·斯坦因著；巫新華，伏霄漢訳『斯坦因中国探険手記』第 1-4 巻、沈阳：春風文芸出版社、2004
（英）斯坦因著；巫新華訳、『沿着古代中亜的道路』、桂林：广西師範大学出版社、2008
張存良「斯坦因中亜考察著作綜述」『西域研究』2012 年第 3 期、新疆社会科学雑誌社、2012
（英）奥雷爾·斯坦因著；中国社会科学院考古研究所主持翻訳、『西域考古図記 修訂版』第 1-5 巻、桂林：广西師範大学出版社、2019
［日本語］
三瓶達司『近代文学の典拠：鏡花と潤一郎』、笠間書院、1986
山田利明『中国学の歩み：二十世紀のシノロジー』、大修館書店、1999
スタイン著；沢崎順之助訳、『中央アジア踏査記』(西域探検紀行選集)、白水社、2004
［ウェブサイト］
国立情報学研究所 - ディジタル・シルクロード・プロジェクト『東洋文庫所蔵』貴重書デジタルアーカイブ
http://dsr.nii.ac.jp/toyobunko/sitemap/index.html.ja#class1（参照 2022-10-02）

第四章

「中国語」
韓兆琦訳注、『史記 4 世家』、北京：中華書局、2010.06.
「日本語」
松澤和宏『生成論の探究：テクスト 草稿 エクリチュール』、名古屋大学出版会、2003.6
石崎等「『廬州風景』の成立」、『日本近代文学館年誌：資料探索 (2)』、2006
戸松泉『複数のテクストへ：樋口一葉と草稿研究』、翰林書房、2010.3
松澤和宏ほか『文学』(特集 草稿の時代) 11(5)、岩波書店、2010、2～255 頁
井上隆史「武田泰淳『司馬遷』の成立」、『日本近代文学館年誌：資料探索(7)』、2011
道園達也「草稿の類別と概略―武田泰淳『司馬遷』の生成（１）―」、『方位』第二十八号、2011
郭偉「武田泰淳における杜甫：武田泰淳「詩をめぐる風景」の成立を中心に」、『国学院中国学会報』58、2013

日本近代文学館編『近代文学草稿・原稿研究事典』、八木書店古書出版部、2015

謝辞

本論文は、筆者が山口大学大学院東アジア研究科に在学中に行った研究をまとめたものである。本論文の作成にあたり、多くの方々にご指導ご鞭撻ご援助を賜りました。

最後まで粘り強くご指導ご助言を賜りました、山口大学教育学部森下徹教授に誠意を表わすとともに厚く御礼申し上げます。終始懇切丁寧なご指導ご鞭撻を頂きました、山口大学教育学部高橋俊章教授に深く感謝いたします。始終温かいご指導ご意見を頂いた、山口大学国際総合科学部有元光彦教授に深く感謝の意を表します。

数々の知見をご教示賜りました、熊本高等専門学校リベラルアーツ系人文グループ道園達也准教授に深く感謝申し上げます。貴重なご指導ご鞭撻を賜りました、久留米大学比較文化研究科浦田義和客員教授に感謝の意を申し上げます。投稿論文の表現などを丁寧にご訂正いただいた、山口大学人文学部野坂昭雄教授に御礼を申し上げます。投稿論文の作成にあたり、始終熱心なご助言を頂きました山口大学教育学部吉村誠教授に感謝申し上げます。

草稿資料の調査・閲覧・引用に際して、快くご協力をいただきました武田泰淳先生のご息女である武田花様、所蔵館である日本近代文学館の皆様に心より感謝申し上げます。

お世話になった皆様方に、この場をお借りして感謝の意を申し上げます。